

21 世紀中国大衆消費社会における 文学現象の研究

課題番号：17720073

平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金

(若手研究(B)) 研究成果報告書

平成 20 年 3 月

研究代表者：高屋亜希
早稲田大学文学学術院准教授

1. 研究組織

研究代表者：高屋亜希(早稲田大学文学学術院准教授)

2. 交付決定額(配分額)

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 17 年度	1,300,000	0	1,300,000
平成 18 年度	1,000,000	0	1,000,000
平成 19 年度	1,000,000	0	1,000,000
総計	3,300,000	0	3,300,000

3. 研究発表

(1) 雑誌論文

高屋亜希 「李修文『泣きぼくろ』に見る村上春樹受容の一端——SM をめぐる綺想——」、
『中国文学研究』、査読有、第 31 期、2005 年、pp16～31

高屋亜希 「孫睿“青春三部作”に見る「虚無」の位置づけ——〈存在の耐えられない
軽さ〉への抗い——」、『中国文学研究』、査読有、第 32 期、2006 年、pp16～30

高屋亜希 「慕容雪村『成都よ、今夜は俺を忘れてくれ』試論——「欲望」と「虚無」
のリアリズム——」、『中国文学研究』、査読有、第 33 期、2007 年、掲載予定（印
刷中）

高屋亜希 「「七〇后」とボヘミアン幻想の終焉——馬驊事件の余白に寄せて——」、本
成果報告書書き下ろし、査読無、2008 年

(2) 学会発表

高屋亜希 「「応試」をめぐる風景」、早稲田大学中国文学会第 30 回春季大会、2005 年 6
月 18 日、早稲田大学

(3) 図 書

朱大可・張閔主編、高屋亜希・千田大介監訳、好文出版、『Chinese Culture Review(中国
文化総覧)』vol.1、2005 年、p351

朱大可・張閔主編、高屋亜希・千田大介監訳、好文出版、『Chinese Culture Review(中国

文化総覧)』 vol.2、2005 年、p335

朱大可・張閔主編、高屋亜希・千田大介監訳、好文出版、『Chinese Culture Review(中国

文化総覧)』 vol.3、2006 年、p321

朱大可・張閔主編、高屋亜希・千田大介監訳、好文出版、『Chinese Culture Review(中国

文化総覧)』 vol.4、2007 年、p269

目 次

「七〇后」とボヘミアン幻想の終焉 ——馬驊事件の余白に寄せて——	5
慕容雪村『成都よ、今夜は俺を忘れてくれ』試論 ——「欲望」と「虚無」のリアリズム——	24
李修文『泣きぼくろ』に見る 村上春樹受容の一端 ——SMをめぐる綺想——	37
孫睿“青春三部作”に見る 「虚無」の位置づけ ——〈存在の耐えられない軽さ〉への抗い——	51
『Chinese Culture Review』 vol.1 (2001～2002) 訳者まえがき	64
『Chinese Culture Review』 vol.2 (2003) 訳者まえがき	69
『Chinese Culture Review』 vol.3 (2004) 訳者まえがき	73
『Chinese Culture Review』 vol.4 (2005) 訳者まえがき	78
現代中国の「私」探し ——ボヘミアン幻想と海外文化の引用——	83
現代中国の国家イメージ再編 ——北京オリンピックカウントダウンの現場——	86

「七〇后」とボヘミアン幻想の終焉

——馬驊事件の余白に寄せて——

高屋 亜希

1. はじめに

二〇〇四年六月二十日夜、雲南省迪慶州徳欽県永明村で、村のボランティア教師を勤める天津市出身の三十二歳の青年、馬驊¹が自動車事故²で瀾滄江に転落し行方不明となった。懸命の捜索にも関わらず、今日に至るまで馬驊の行方はつかめておらず、生存は絶望視されている。

詩の有名サイトで管理人をつとめた経歴もあることから、詩人や愛好者などの間では一定の知名度があったとは言え、生前とりたてて社会に注目されていたわけではないロマン主義詩人の馬驊が死後、突如として喧しい議論的となったのは、彼の事例が辺境教育支援ボランティアの政策宣伝³に利用されたためである。政府サイドの宣伝では、馬驊が持つ

¹ 一九七二年、天津市出身。一九九一年に復旦大学国際政治学部に入學。卒業後は韓国系アパレルメーカーのイーランドに就職するが、二年後に退職。廈門や青島など各地を転々とした後、一九九九年より約三年間、北京に居を構える。その間、演劇や詩の活動に加わる傍ら、二〇〇〇年四月から「北大在線新青年」でBBS管理の職につき、後には「藏羚羊自助遊」ガイドブックの編集などにも携わる。二〇〇三年二月から雲南省徳欽県永明村のボランティア教師を勤めていた。

² 事件が起きてからの報道については、例えば『東方網』が「復旦畢業生雲南遇車禍生死不明」と題し、各紙の関連記事や友人の回想、更には馬驊本人の作品をまとめており、閲覧に便利である。<http://news.eastday.com/eastday/news/xwzxzt/node5085/node23099/index.html>

³ 辺境教育ボランティア自体は元から存在していたが、二〇〇三年六月より中国共産党青年団中央・教育部・財政部・人事部が共同で、辺境貧困地区の農業・教育・医療を支援するため、卒業を控えた全国の大学生を、一～二年任期でボランティアとして派遣する「大学生志願服務西部計画」が始められた。計画開始一年を終え、大々的にボランティア現場の取材宣伝が組織された時期に、馬驊事件が発生したことから宣伝に利用されることになった。但し、馬驊の雲南行はこの西部計画とは全く関係がない。事故直後、出身校の復旦大学がある上海市では、共産主義青年団が中心となって、馬驊の後継者を選抜するコンテストを開催する等、各地で馬驊を英雄として宣伝する動きが相継いだ。雲南省を中心にこうした動きを伝える記事をまとめた『雲網』「真情似火 奉獻如歌：義務支教志願者馬驊」を参照のこと。
<http://www.yunnan.cn/1574/2004/07/16/Zt13@148293.htm>

また『東方網』掲載記事「鼓励去西部去基層 復旦大学為畢業生就業引好路」（二〇〇六年六月

さまざまな肩書きの中で、名門の復旦大学出身、辺境でのボランティア教師という二つだけがクローズアップされた。つまり馬驊は、名門大学出身に相応しい都会での高給ポストにつく機会を自ら捨て、恵まれない辺境教育の現場に献身した犠牲的精神の英雄として、大々的に祭りあげられた⁴のである。

そうした雷鋒化とも言うべき英雄化の動き、および虚実織り交ぜて書きたてるメディアの報道⁵に対し、馬驊と生前から親交があった友人たちは、実際の彼のひとりとなりや事実を歪曲する⁶もののだとして、連名で『呼籲書』と題する文章⁷をネット上に発表したほか、これまた大量の回想がネット上に書かれることになった。これにより、馬驊という一人の青年の人生観をどう解釈するかをめぐって、政府と民間の違いが浮き彫りとなる興味深い文的事件へと発展した。

馬驊事件は、政府サイドが英雄を創りあげる舞台裏を暴いたという意味で、非常に興味深いものである。だがそれ以上に、事件を契機に語られた馬驊個人の経歴や志向は、明らかに「七〇后」(一九七〇年代生まれ世代)の文学青年に特徴的なボヘミアンの要素⁸が色濃く刻印されており、その志向を共有する同世代の仲間からの反応⁹が垣間見られるという点

十三日)によれば、復旦大学では現在でもボランティア募集に際して、馬驊がモデルとして取り上げられるようである。

<http://sh.eastday.com/eastday/node545/node10971/userobject1ai131808.html>

⁴ 親友の韓博の回想によれば、馬驊の生前にも雷鋒化されて語られたことがあるらしく、馬驊本人はそのことに憤慨していたとされる。「一個自由不羈的靈魂」(『詩生活月刊』、二〇〇四年十月十日)を参照のこと。

<http://bbs.poemlife.com:1863/forum/add.jsp?forumID=14&msgID=2147480164&page=1>

また王曉漁「一個抒情詩人的以外事故」(『中国芸術批評』、二〇〇六年八月十六日)を参照のこと。王曉漁は、事故で同乗し同じく行方不明となっている地元の老女については全く報道されていない状況に対し、生命が等価に扱われていないとも指摘している。

⁵ 例えば、「失踪上海志願者因失恋赴辺疆 対愛決口不提」(『Tom.com』転載、来源:『新聞晨报』、署名:郭翔鶴、二〇〇四年六月二十七日)では、失恋が原因で北京を離れたという情報を伝えている。

⁶ 親しい友人ではない一般の詩の愛好者でも、馬驊を英雄として追悼するメディアの語り方に違和感を覚えた人はいるようだ。例えば、石生「關於馬驊: 当今“民間”詩人的社会地位和新聞学價值」(『詩歌報論壇』、二〇〇四年九月二十七日)を参照のこと。
(<http://www.shigebao.com.cn/archiver/?tid-123742.html>)

⁷ 事件から一週間たった六月二十七日、馬驊がかつてBBS管理人をつとめた有名詩歌サイトの一つ「泡網俱樂部」に発表された『呼籲書』では、「一つには実際の事がやりたかったこと。もう一つにはチベット文化への関心、および別のライフスタイルへの憧れによるもの」と雲南行の理由が書かれている。<http://paowang.com/cgi-bin/forum/viewpost.cgi?which=qin&id=82757>

⁸ ボヘミアンが叛逆的ライフスタイルを示すファッションとして、一般の消費対象となるのは二〇〇三年頃のことであり、ここで言う「七〇后」が先導したボヘミアンスタイルは、一般化される前を指していよう。前者のボヘミアンについては、朱大可・張閔主編、高屋亜希・千田大介監訳『Chinese Culture Review(中国文化総覧)』vol.2 キーワード「波西米亜」(二二四頁)を参照のこと。

⁹ 「詩人馬驊、変老之前遠去」(『南方都市報』、署名:郭建光、二〇〇四年七月八日)によれば、「北大在線」の同僚だった朱靖江はインタビューに答え、「馬驊の行為は私個人の生活の投影でした。自分がやりたくとも果たせなかったことが、馬驊を通して実現されていたのです。彼が

で、希有な事例と言えよう。

本稿では、「藏羚羊自助遊」(バックパック個人旅行ガイドブック)の編集者、および「北大在線新青年」などインターネットBBSの管理人、という雲南に旅立つ前の北京時代、馬驊が持っていた二つの肩書きをとりあげ、その背景を調査する。いずれの肩書きも、それまでの中国にはない斬新な文化現象に、馬驊が創始者として関わっていたことを示すものであり、それら文化現象の登場と経緯を馬驊の雲南行と関係づけることによって、馬驊事件を「七〇后」全体をめぐる文化現象の問題として考察していきたい。

2. 語られなかった雲南行の理由

馬驊と面識がない一般の人々にとって、彼の雲南行は全く不可解な行動であった¹⁰ようだ。また親友たちもそのほとんどが、雲南行について事前に知らされておらず¹¹、雲南から手紙を貰ってはじめて知ったと語っている。ただ親友たちは、雲南行は寝耳に水と驚きはしたものの、馬驊のこれまでの生き方や趣味を考えるならば、いかにもやりそうな選択だと自然に受けとめたようである。

友人たちの回想によると、馬驊は学生時代から詩や小説の創作や演劇など多彩な趣味のサークル活動で才能を発揮するほか、意表をつくユーモラスでドラマティックなパフォーマンスや悪戯¹²で友人たちを驚かせて楽しむのが常で、学内ではつとに有名人であったと言う。つまり馬驊の豊かな趣味や恵まれた才能¹³は、一つの方向へ努力を重ねて何かを実現していくことにではなく、退屈な日常生活をちょっとした悪戯やパフォーマンスなどで、

亡くなったことで、私が追い求めていたことの多くが行き場を失いました。」と語っている。
<http://www.nanfangdaily.com.cn/southnews/tszk/nfdsb/sd/200407080237.asp>

¹⁰ 事故の第一報を伝える『新聞晨报』を読んだ傍らの同僚が、「病気だな。こいつは絶対、病気だったに違いない」とつぶやいていた、と注6前掲の石生は語っている。雲南行が一般の人々にとっては不可解な行動だからこそ、そこに英雄的精神性を読む動きを招いたとも言えるだろう。石生はまた、こうした英雄化によってメディアははじめて、単なる詩人の死からニュース価値を引き出していると指摘している。

¹¹ 韓博など親しい友人たちに、「世界旅行に向けて、ベトナムに行ってくる」と語っている。「馬驊：詩人不死、只是悄然退隱」(『新浪網』転載、来源：『外灘画報』、署名：陸暉・王曉楠、二〇〇四年七月七日)を参照のこと。<http://news.sina.com.cn/c/2004-07-07/13233634475.shtml>

¹² 入学したばかりの軍事訓練時に坊主頭にし、クラスメートに自分は労働改造犯だったが、態度がよいとのことで特別に入学を許可されたのだと語り、そのクラスメートが真に受けたというエピソードや、卒業前に友人たちと女子寮の前までピアノを運び、明け方まで歌を歌ったエピソードが披露されている。注11前掲文を参照のこと。また同文では、馬驊が長髪で退廃的と受け取られる格好をしていたとしているほか、注4前掲文で王曉漁は、馬驊が提灯のようなダブダブのズボンを穿き、不良少年のような服装だったと語っている。こうしたファッションがどういう背景を持つかという点については今後の課題としたい。

¹³ 友人の韓博や胡統冬は、馬驊が博覧強記で、かつ料理や旅行や音楽、はては周星馳や張国榮など、あらゆる方面に興味を向けていたと語っている。「尋找鄉村教師馬驊」(『南方週末』、署名：易穎、二〇〇四年七月一日)、および注11前掲文を参照のこと。
<http://www.nanfangdaily.com.cn/zm/20040701/xw/szxw2/200407010022.asp>

周囲が思いもよらない演劇的シーンへと転換していくロマンティックな創造に、使われていたと言えるかもしれない。今、自分があるこの日常生活の場から逃れ、自由になるための創造を希求する。こうしたロマンティックなボヘミアン志向は、馬驊にとって単に学生時代の遊びに止まらず、彼の生き方そのものに関わっていたようだ。

卒業後、馬驊は外資系企業に就職し、順調にキャリアを積んでいた¹⁴ものの、二年後に職を辞めて、その後は廈門など中国各地を転々とする。辞職の理由も具体的な不満があったというよりは、繰り返される日常生活を離れ、自分の生活を変えてもっと自由でありたい¹⁵、といったきわめて精神的な理由だったようだ。こうした経歴から見ると、馬驊が経済的成功などにあまり価値を置いていなかった¹⁶のが伺えるだろう。

日常生活を逃れ、見知らぬ場所で異なる文化や新しい人々と出会うのを好むのは、趣味にも現れている。馬驊は旅好きで、しばしば旅行用のリュックを背負って職場、あるいは友人との食事の席に現れた¹⁷、と友人らは回想している。この趣味が、後の「藏羚羊自助遊」編集の仕事に結びついていくことになるのだろう。

その馬驊が北京についたのははっきりと特定できないものの、一九九九年¹⁸のようである。演劇や詩などの活動を行う中で北京大学を中心とする詩人らと知り合った縁で、北京大学出身の詩人である胡統冬(胡旭東)を通じて、朱靖江らとともに「北大在線新青年」の編集管理¹⁹を任せられ、その後、約三年間その職務にあたった。しかしこの職も長続きせず、二〇〇二年十月頃、どこかのんびりできる場所を知らないかと相談された同僚の朱靖江のツテで、雲南省永明村に落ち着くことになった²⁰という。恐らくはその数ヶ月前から一人で悩み考えた結果、朱靖江に相談を持ちかけたのだろうと推測するならば、遅くとも二〇〇二年夏頃には北京を離れるという考えをあたためはじめていたのかもしれない。

¹⁴ 高給で昇進も速く、友人らと食事をする際には、いつも馬驊が勘定を払う役目になった、というエピソードが語られている。注 11 前掲文を参照のこと。

¹⁵ 廈門行の理由として、鳥の囀りで目覚められるという理由を本人があげていた、と友人が語っている。注 11 前掲文を参照のこと。

¹⁶ こうした点は、経済的達成や社会的名声など世俗的な成功をストレートに希求する「八〇后」(一九八〇年代生まれ世代)とは完全に異なる人生態度と言えるだろう。「七〇后」全体が世俗的成功の追求と無縁だったわけでは無論ないが、彼らの文化的営為に世俗的成功とは逆の、ボヘミアン志向が刻印されていることは無視されるべきではない。

¹⁷ 注 9 前掲文を参照のこと。

¹⁸ 胡統冬は自身のブログで「敲、敲、敲、敲開天堂的門」(二〇〇四年七月一日)と題して馬驊を追想している。それによれば、一九九九年冬、北京師範大学で“偶”戯劇工作室の公演でハムレットを演じていた馬驊と初めて会ったとしている。
<http://www.blogcn.com/user7/huxudong/blog/2530763.html>

¹⁹ 同僚の朱靖江は、北大在線の職で五〜六千円の収入があったのではないかとし、また同じく同僚の康赫(Kanghe)はその他に原稿料収入があっただろうと語っている。注 9 前掲文を参照のこと。

²⁰ 注 9 前掲文を参照のこと。

北京での生活を型にはまった煩わしい日常として感じるようになり、そこから逃れて新しい自由な生活を送りたいと見知らぬ地に旅立つ。徹底してボヘミアンを志向した馬驊ならば、北京での恵まれた生活を捨て、雲南でボランティア教師をするという選択もまた考えられないことではない、と考えた友人は多かったようだ。雲南行から約一年後、事故の知らせを聞いた友人たちは一様にショックを受けながらも、馬驊は死んだのではなく、例によってまた見知らぬ地に旅立っただけだ、という想像²¹で自らを慰めた。

とは言え、二〇〇三年の雲南行が馬驊のボヘミアン志向だけで説明がつくわけではない。「蔵羚羊自助遊」の編集者、および「北大在線新青年」などインターネット BBS の管理人という、趣味の延長のような仕事を仲間と一緒に立ち上げ、それをともに楽しんでいた筈の馬驊は、何に倦怠を感じたというのだろうか？二〇〇二年十月には北京を離れる具体的な算段を始めていた馬驊が、北京での生活にどういう倦怠を覚えていたのか、目を転じていきたい。

3. 「蔵羚羊自助遊」をとりまく状況

「蔵羚羊自助遊」編集に馬驊が加わったのは二〇〇〇年末²²のことである。同書のホームページ²³では、二〇〇一年に編集顧問として企画に携わり、第一期の『江蘇浙江』『雲南』巻²⁴の編集をつとめたとしている。後述するように、「蔵羚羊自助遊」シリーズの刊行が決まり、立ち上げの仲間が初めて顔合わせを行ったのが二〇〇〇年末のことで、各巻の取材旅行が二〇〇一年初め、その後、数ヶ月の編集をへて第一期²⁵『江蘇浙江』巻などが刊行されたのが同年五月だったことを考えると、馬驊が実質的に編集作業に関わったのはこの

²¹ 注 11 前掲文を参照のこと。

²² 『江蘇浙江(蔵羚羊自助遊)』(中国大百科全書出版社、二〇〇四年五月)の作者・編集者紹介頁を参照のこと。大百科全書出版社版は第二期のものであり、紹介頁では馬驊が第一期(第一版)のみ実質的な編集に関わっていたことが明記されているほか、高級顧問・責任編集という肩書きを紹介した後、「顧爾不問、有責無任」と続き、肩書きが名誉職であったことが暗示されている。このことが、二〇〇四年の事故死まで馬驊に編集顧問の肩書きが残っていたと推測する根拠となっている。

²³ <http://www.chiru.com.cn/>参照のこと。「我們的団体」では歴代の編集者全員の紹介が掲載されている。馬驊については事故死のことも言及があり、「我々の心の中では永遠に蔵羚羊の仲間だ」と結んでいる。本文で後述するように、「蔵羚羊自助遊」がこうした編集者たちの強い仲間意識を基礎につくられていた点は、これが単なるビジネスの一環ではなかったことを示唆するものであろう。

²⁴ いずれも広東旅遊出版社から二〇〇一年五月に出版された。叢書名は当時「蔵羚羊自助旅行手冊」であったが、二〇〇二年末の中国大百科全書出版社への変更に伴い、今日の「蔵羚羊自助遊」に改められた。本稿では第一期も含めて「自助遊」で記述を統一した。

²⁵ 最初に二〇〇一年五月(七月と表記する広告も)に『広西』『雲南』『四川重慶』『江蘇浙江』『甘肅寧夏』『海南』の六冊が刊行された後、同年十一月に『新疆』『青海』『西藏』が、翌二〇〇二年五月に『福建江西』『湖南湖北』が出るが、本稿ではこれらを第一期と呼んでいる。全省のガイドブックを刊行するという計画は、第二期すなわち二〇〇三年以降にもちこされている。

第一期の刊行で、恐らく一年弱の短い期間であろう。但し、二〇〇三年以降に刊行された第二期でも編集顧問となっており、二〇〇四年六月の事故死までその肩書は残っていたものと思われる。

そもそも個人のバックパック旅行²⁶自体が、当時の中国ではまだ目新しい趣味だった²⁷ことは注意しておく必要があるだろう。一九八〇年代には旅行そのものがまだ一般的ではなく、一九九〇年代後半になってようやく贅沢な消費という位置づけではあるものの、団体旅行がある程度一般化していくことになる。観光名所を点と点をつなぐようにバスで駆け回るスタイルの団体旅行に対して、旅のプロセスそのものを重視し自分の足と目で旅を体験するスタイルのバックパック旅行は、一九九八年前後になってようやく存在を現す。無論、それ以前からバックパック旅行を楽しむ個人²⁸は、少数ながらも存在した。ただこの時になって初めて、個々人の趣味として実践されていたバックパック旅行やアウトドア活動が、インターネットの普及²⁹を背景に、一定の社会的広がりとして視界に捉えられたということだろう。

二〇〇一年の「蔵羚羊自助遊」の刊行が、バックパック旅行³⁰の一般普及に先鞭をつけ

²⁶ 注 8 前掲書キーワード「背囊族」(二二二頁)には、「旅行とは単なる観光ではなく、サバイバルと密接に結びついた、自己への挑戦」としており、「バックパッカーは自らが直接世界と関わるスタイルを創り出した」と要約している。尚、同書は二〇〇三年の文化現象を扱ったものである。

²⁷ ちなみに注 22 前掲書の作者である楊一は、大学受験に失敗した後の一九九二年以降、歌を生業としながら全国を旅してまわるようになった「永遠に下層に置かれた民謡歌手」と紹介され、編集者の馬驊に請われて「蔵羚羊自助遊」の原稿執筆を担当することになったとある。バックパック旅行がエリート層の趣味として社会認知される以前、放浪の旅は例えば楊一のような非エリート層の生業であったことはきわめて重要な点である。馬驊のようなボヘミアン志向を持った「七〇后」の文学青年たちが、こうした下層の生活スタイルを参照していることは注意すべきであろう。この点はさまざまな文化シーンにおいても認められることであり、例えば馬驊の詩人仲間であり、現在は有名な音楽批評家である顔峻は、中国ロックを回顧する文章の中で、繰り返し中国ではロックが下層の表現と結びついたものであることを指摘している。例えば「超越反抗——底層青年和中国土搖滾」(朱大可・張閔主編『21 世紀中国文化地図』第二巻所収、広西師範大学出版社、二〇〇四年五月)などを参照のこと。

²⁸ 「蔵羚羊自助旅行」の作者・編集者の経歴紹介を見る限りでも、多くは一九九〇年代半ば頃からバックパック個人旅行を始めたようである。旅行が可能になる背景には、経済的要因以外に、中国の戸籍制度の問題が介在しているだろう。注 33 の記述も併せて参照されたい。

²⁹ 中国がインターネットに公式接続したのが一九九〇年代半ば以降のことである。当時は高価なパソコンや接続料を支払え、かつ新しい技術に対応できる若年エリート層が、インターネット利用の主流を占めていたことが予想される。現在は十代～三十代の若年層に利用者が偏っている傾向は続いているものの、インターネットカフェの普及などにより、利用者の経済状態は必ずしも高くない。CNN I C(中国互聯網絡信息中心)『第十八次中国互聯網絡発展状況統計報告』を参照のこと。

³⁰ 「自助遊」「自助旅行」という言葉自体は、団体旅行に対する個人旅行の意味で、一般に使われるようになったのは比較的最近のことである。注 22 前掲書「前言」によれば、二〇〇〇年末に行われた「蔵羚羊自助遊」の初顔合わせ時に、全員が旅行の実践者であったにも関わらず、「自助旅行」に対する理解も各自まちまちで、かつ「自助旅行」という言葉自体を初めて聞いた人もいたという状況であったと記されている。本稿執筆(二〇〇七年)時では、「自助旅行」はかな

た一つであることを考えると、馬驊が一般にはまだ趣味として認知されるはるか以前から、自らの生き方と関わらせるようにバックパック旅行を実践していたことは強調してよいだろう。同書の「給自助旅行者」³¹と題する前書きには、こうした新しいスタイルの旅行が「ライフスタイル」であると同時に「価値観」であり、「自分を実現し、夢を叶えるプロセス」であると語られているほか、「若者の必修科目」であり「成長には欠かせない」とも意味づけられている。「蔵羚羊自助遊」編集部メンバー、ひいては馬驊にとってのバックパック旅行とは、青春期に自分自身で世界や厳しい自然と向き合い、模索し格闘する中で自身を肉体的および精神的に成長させる体験、と位置づけられていると言えよう。

こうした社会システムの一員としての自分を拒否し、強く自分という存在そのものと向き合う体験を重視する自己実現志向はバックパック旅行に限らず、当時の同時代文化全体に見られる特徴であり、例えばDIY³²志向が登場するのも同じ文脈によるものと推察される。そもそもバックパック旅行の起源として、一九六〇年代アメリカのヒッピー文化が挙げられるが、「七〇后」の文学作品はその元となる一九五〇年代アメリカのビート世代文学から強い影響を受けたことが知られる。「七〇后」作家としては最も商業的にビートニクを咀嚼したと言える衛慧も、アレン・ギンズバークやジャック・ケルアックなど、ビートニクからの影響は歴然としている³³。

インターネットによるバックパック旅行愛好者の組織化は一九九八年以降、急速に進展したようである。まずは新浪網など各大手ポータルサイトに設けられた旅行やアウトドア関連のBBSを中心に、旅行情報を交換する最初のプラットフォームが形成³⁴された。その

り一般化し、例えばフリーパッケージツアーや家族ドライブ旅行なども全て含まれ、「蔵羚羊自助遊」の二〇〇一年第一期刊行時にはあった、団体旅行に対するアンチテーゼの意味合いが、もはや相当に薄められている。

³¹ 例えば、第二期に刊行された『河南河北(蔵羚羊自助遊)』(中国大百科全書出版社、二〇〇四年二月)巻頭部分を参照のこと。

³² 注8前掲書キーワード「DIY」(二一〇頁)には、「機械には作ることができず、価値を判断することもできない「気持ち」を込めることができるのがその魅力」で、「個性を追い求め、アピールすることで自己満足を得ることを目的とする」とある。

³³ 例えば李杰「1957-2007“垮掉的一代”在中国」(『搜狐読書』転載、来源:『南方都市报』、二〇〇六年十二月二十五日)では、戸籍制度がゆるみ、自由な人口の移動が始まった一九九〇年代に、中国の文学青年たちがビートニクから社会への反抗スタイルなど、大きくインスピレーションを受けたとし、衛慧『上海ベビー』などの身体創作も自らの身体で世界と向き合うことを創作の対象としている点で、ケルアックときわめて似ていると指摘している。尚、同文では「八〇后」がビートニクから受けた最大の影響は「七〇后」とは異なり、インスピレーションに頼り、文学的素養や技巧を必要としない点だとも述べている。

<http://book.sohu.com/20061225/n247235241.shtml>

また朱大可・張閔主編『Chinese Culture Review(中国文化総覧)』vol.3(好文出版、二〇〇六年七月)キーワード「Linglei(另類)」(一九三頁)では、『タイムズ』アジア版に春樹が取りあげられ、ビートニクに喩えられたことを誤解と評している。今後、世代や個々の作家におけるビートニクの影響は詳細に研究する必要があるだろう。

³⁴ 垂直極限(程遠東)「三国覇業：中国旅遊媒体市場分析」(『中国戶外資料網』、二〇〇七年七月)

後、技術的・経済的ハードルが下がるにつれ、そこで中核的に活動していた人物の中から、独自にBBSを立ち上げるものが現れ、更には交換される情報量が急激に増えるにしたがい、ウェブサイトとして発展していったという。アウトドアサイトの老舗的存在である北京緑野(北緑野)や深圳磨坊(南磨坊)³⁵なども、こうした歴史的経緯から誕生したものだとのことである。また多くの場合、この手のサイトは愛好者同士の情報交換から出発したため、ビジネス展開をするにあたっては参加者の意見が分かれ、分裂を繰り返す原因になったとも言われている。

「蔵羚羊自助遊」も時期的に見て、ある程度はこうしたインターネットの情報プラットフォームを背景に誕生したものと推測するが、細部は分からないことも多い。とりあえず最初の立ち上げ時から二〇〇二年七月まで編集に携わった高宏松³⁶(嘎瑪卓嘎)、および二〇〇三年四月から現在まで編集職にある孫石³⁷(紅狼)の文章をもとに、「蔵羚羊自助遊」の歴史を簡単にまとめてみよう。

二〇〇〇年十一月、北京城市巡覧網絡技術公司の中国語サイトの旅行部門に、高宏松は編集者として採用されるが、その一ヶ月後、中国語サイトは解散となった。かわって今日まで「蔵羚羊自助遊」編集長を務めることになる張瑾³⁸(花皮瓜)が赴任し、北京城市の出

二十七日)を参照のこと。<http://www.8264.cn/24648.html> 以下の旅行メディア全体の歴史についての記述は、同文を参照した。ちなみに執筆者の程遠東は「蔵羚羊自助遊」サイトの熱心な支持者であったことから、二〇〇三～二〇〇五年に同編集部に参加していた。注23を参照のこと。

³⁵ いずれも二〇〇〇年前後に設立された、アウトドアサイトの老舗的な存在。北方と南方の地理風土の違いによって好まれるアウトドアスポーツも異なる等、この種のアウトドアに関するコミュニティも、居住都市のカラーにかなり影響されるようである。例えば、小毛驢のブログ「北野南驢」(『戸外探検』、二〇〇七年一月二十六日)を参照のこと。
<http://tibetbird.blog.sohu.com/31324334.html>

³⁶ 個人ブログ『天馬行空の夢想』に発表された文章「這一次我真的失去了你」(二〇〇五年十二月二十五日)を参照のこと。http://blog.sina.com.cn/s/blog_5460364f0100010b.html
同文は、本文で後述する二〇〇五年の「蔵羚羊自助遊」買収のニュースを受け、自身の過去を回想したものである。高宏松は第一期に出版された『四川重慶』『甘肅寧夏』『新疆』『青海』『湖南湖北』『貴州』の他、二〇〇三年以降に出版された第二期の『東北』『西北中国』にも編集の肩書きで関わっている。各省ごとのガイドブック出版計画が当初からのものでありながら、その出版完成は第二期にまでずれこんでいること、および高宏松が二〇〇二年六月まで編集職にあったという事実を考えあわせると、取材・編集作業のほとんどは二〇〇二年時点で終えていたが、出版社の交替によって出版が遅延した可能性が考えられよう。

³⁷ 孫石は第一期『甘肅寧夏』の作者として「蔵羚羊自助遊」に参加し、二〇〇三年四月(ホームページでは六月)から編集者として加わっている。引用の文章は、「蔵羚羊自助遊的遺憾(蔵羚羊自助旅遊市場——紅狼回復雅_哥)」(『新浪網』、二〇〇三年八月六日)を参照のこと。
<http://bbs6.sina.com.cn/cgi-bin/newsoul/soulview.cgi?id=841393&fid=109&postdate=2003-08-06&ver>

副題と内容から、「雅_哥」が「蔵羚羊自助遊」に対して批判を述べたことに対して、釈明した文章である。ガイドブックとして必要な情報更新が適切になされていない点が、一番の批判点であったようであり、孫石もその点については率直に認め謝罪している。

³⁸ 『山西(蔵羚羊自助旅行手冊)』(広東旅遊出版社、二〇〇二年五月)の紹介によれば、一九七四年山西省生まれ、一九九一年に復旦大学法律学部入学、一九九六年に出版業界に入る、とある。復旦大学入学が馬驊と同期だが、いつ頃からの知り合いかは不明。張瑾のブログに掲載された

資³⁹で旅行ガイドブックを出版することになったと宣言したという。それを受け、前述したように北京のスターバックスで関係者による最初の顔合わせが行われ⁴⁰、後々まで強い精神的紐帯で結ばれることになる「蔵羚羊自助遊」チームが立ち上がった。またどういう経緯で出版社が決まったのかは不明だが、第一期は全て広東旅遊出版社から出された。

同出版社によれば、一九九六年以降に旅行が流行し始め、旅行ガイドブックの出版を模索していたところ、一九九八年以降にはバックパック旅行が登場してきた。この分野に市場発展の見込みがあると出版社では判断し、二〇〇〇年に北京城市と共同で「蔵羚羊自助遊」を刊行することになった⁴¹としている。二次資料を切り貼りしただけのお手軽な編集で作られたガイドブックが主流を占める中、出版サイドが執筆者に依頼し、自らの足で一次情報を現地で収集するというスタイルも非常に特殊であったほか、旅行に必要な交通手段などの情報を多く盛り込む一方、観光スポットの紹介は最低限にとどめる実用的な記述も、当時としてはきわめて斬新なもの⁴²であった。同シリーズの刊行は読者からも好評で迎えられ、出版社によれば最初の半年で二万セットを卸した⁴³と言う。

「蔵羚羊自助遊」は取材・編集ともに多大な労力を費やしており、現地に一〜二ヶ月、自らの足で実際に取材旅行して情報収集し、また各巻の編集者が全体の統一をとるため徹

「想念小馬哥」(二〇〇六年三月十三日)には、死後二周年を控えた時点での心情が語られている。
http://www.tianyablog.com/blogger/post_show.asp?BlogID=211041&PostID=4411257&idWriter=0&Key=0

³⁹ 北京城市が同シリーズの出版企画に関わった時期は非常に短く、遅くとも二〇〇二年五月に出版された注 38 前掲書では、企画が「北京榮格国際广告有限公司」となっている。注 37 前掲文で孫石は、北京城市を北京榮格の前身としている。ただ、前者の会社設立が一九九八年、後者が二〇〇〇年であることから、両社に何らかの関係がある可能性は否定できないが、孫石の言う通りであるかについては疑問が残る。後に、二〇〇五年六月に「蔵羚羊自助遊」は北京榮格から台湾城邦に買収されるが、その際に三年前に北京榮格に買収されたばかりの買収劇として報道されている。これらから推測するに、二〇〇二年の早い時期に北京榮格が北京城市から買収し、当初は既定路線のまま編集刊行を続けるが、二〇〇二年末の出版社交替をはさみ、二〇〇三年以降のいわゆる第二期から北京榮格が本格的に参加した、ということなのだろうか。なお、北京榮格はスイスに本社を置く出版広告会社 RINGIER の子会社にあたり、オーストラリア人社長の Tim Murray(馬提木)は注 23 前掲の「我們的団体」に名前を挙げられ、本人自身がバックパック旅行の愛好者で、編集にも実質的アドバイスを行ったとしている。

⁴⁰ 注 22 前掲書「前言」を参照のこと。

⁴¹ 『遠流博識網』「書市瞭望」欄掲載の「広東旅遊出版社：縦深開発、構建品牌」を参照のこと。『中国図書商報』からの原稿提供とある。
<http://www.ylib.com/readit/tower/default.asp?DocId=LOOK&SNO=319>

⁴² 盛方敏「旅遊圖書市場：有待挖掘的“金鉱”」(『中国高校教材図書網』、来源：『生活時報』、二〇〇三年五月十二日)では、旅行自体が新しい文化現象であったため、ガイドブックの整備がごく近年であり、例えば現地での交通情報が掲載されていないので、現地に着いてから自分で尋ねるしかなく、ガイドブックとしてはたいへん不便であったことを紹介している。また同文では個人旅行の急激な拡大を受けて、どのように旅を自分で組み立てるかという視点でつくられたガイドブックの需要が高まっていると述べている。さらに「蔵羚羊自助遊」ホームページ「關於蔵羚羊自助遊」でも、出版当時において自らのアドベンテージとなった特色を列挙してある。

⁴³ 注 41 前掲文を参照のこと。

底的に手直しし、不眠不休徹夜の編集作業が何日も続いたと回想⁴⁴されている。加えて前述したように多くの「蔵羚羊自助遊」関係者にとって、バックパック旅行は自らの生き方の問題と重なっていたため、出版は強い自負と思入れがつまったものであったことは容易に想像できよう。これまで社会ではマイナーな趣味にとどまっていたバックパック旅行のガイドブックを通じて、ボヘミアンの生き方を志向する「七〇后」の青年たちのライフスタイルを高く掲げ、これこそがこれからの時代をリードするのだという意気込みと信念のもとで、世に問うた「作品」こそが「蔵羚羊自助遊」シリーズであったのである。

しかし関係者にとって同シリーズが単なるガイドブックという実用工具書ではなく、「作品」という意識で制作されたものであったことが、後の顛末を彼らが悲劇として受けとめる原因となったように思われる。バックパック旅行愛好者にとってのバイブル、図書業界にとってのビジネスモデルとなった「蔵羚羊自助遊」はその社会的衝撃や驚異的売り上げにも関わらず、最初の企画会社であった北京城市は恐らく一年ほどで、スイス系広告企業の北京栄格に譲渡⁴⁵した。後を引き継いだ北京栄格は二〇〇二年五月の出版以降、新たな巻の編集刊行を凍結⁴⁶し、二〇〇二年末に広東旅遊出版社との提携を解消する。そして二〇〇三年から新たに仕切り直して出した第二期は、中国大百科全書出版社から刊行されるようになった。

この間の経緯について詳細は語られていないが、基本的にはビジネスとして採算がとれなかったことが背景にあるようだ。孫石⁴⁷によれば、一つには一冊の本につき数ヶ月かけて取材編集するというスタイルがコストを度外視したものであったこと、もう一つには中国の出版界の不合理な仕組みそのものによって、利益が実際にはほとんど入ってこなかったことを挙げている。後者については説明が必要かもしれない。中国では出版は政治イデオロギー宣伝部門の管轄であり、外資系企業あるいは民間の個人企業は原則として参加できない。そのため必ず、正規の国営出版社と提携しなければならず、流通については出版ほど厳しい制限ではないものの、やはり国営の新華書店と提携しなければ、全国に流通させることは困難である⁴⁸。かかる事情から、正規出版にこだわった「蔵羚羊自助遊」は、

⁴⁴ 例えば注 36 および注 37 前掲文を参照のこと。

⁴⁵ 注 39 を参照のこと。

⁴⁶ 例えば、手元にある『甘肅寧夏』の奥付は二〇〇二年九月で、三刷りと記載されていることから推測すると、新規巻の刊行はストップした時期でも増刷は行われていたことになるだろう。

⁴⁷ 注 37 前掲文を参照のこと。

⁴⁸ 日本では中国の出版界再編について紹介した論文は幾つかあるものの、多くは国営出版社の再編を対象に論じたものであり、この点について明確に言及したものは少ない。管見の限りでは、島崎英威『中国・台湾の出版事情——初めて解き明かされる中国・台湾の出版界の現状』(出版メディアパル、二〇〇七年六月)が、出版状況を明解に紹介している。また王曉明(赤平恵里訳)は「最近三年間の中国小説」(『中国現代文学の越境(アジア遊学 94)』所収)、勉誠出版、二〇

取材・編集・デザインなどに関わる前期投資は全額自己負担結しなければならない一方、売り上げの大半を広東旅遊出版社や新華書店に取られ、自分たちにはほとんど利益が残らなかったと言う。

厳しい中国の出版事情が「蔵羚羊自助遊」を経済的苦境に追い込んだことは確かだが、やはり何より編集部が採算性よりも、自らの自己表現という位置づけに固執したことが、この画期的ガイドブックを生み出す原動力となるとともに、経営を悪化させた最大の要因でもあろう。二〇〇二年に引き継いだ北京榮格は出版社を変更して、二〇〇三年から全省毎のガイドブック刊行という当初計画を進めるとともに、既刊の増刷を継続することで資金回収を図ろうとしたようだ。刊行に向けての実質的編集作業を一年あまりにわたってストップし、出版社変更に伴う調整作業に迫られていた編集部は二〇〇三年に再スタートをきった。しかし二〇〇一年の第一期刊行では読者から歓呼をもって迎えられた状況は、第二期刊行では一変し、風当たりも冷たいものになってしまったと推測される。

二〇〇二年に編集部に加わったばかりの孫石は、ビジネスパートナーから早急に結果を出すように迫られたため、ガイドブックとして重要な情報の更新⁴⁹を十分に行うことができず、自分たちにとっても非常に不本意な刊行であったと語っている。この時期に編集部を去った創立時メンバーの高宏松は、その間の事情を「蔵羚羊自助遊」が大空へ飛び立つのに必要な翼を自分は与えることができない以上、「蔵羚羊自助遊」は自分のものでありながら、もはや自分のものにはなりえないものだ、と婉曲に表現⁵⁰している。不器用な自己表現としての編集スタイルから離れ、ビジネスベースで効率的に体裁を整える編集作業をやむを得ないこととしながらも、感情的に割り切れずに辞職したことが伺えるだろう。そして、「蔵羚羊自助遊」が急ブレーキをかけてストップするこの時期、馬驊もまた別の新しい生活を模索しようと、北京での生活に見切りをつける算段を始めるのである。

4. 「北大在線新青年」をめぐる状況

馬驊が詩人仲間の胡統冬(胡子)に誘われて「北大在線新青年」に就職したのは、二〇〇

〇六年十二月)において、「現在のところ、あらゆる出版社はみな国営であり、政府は個人の出版社を作ること許可していない。しかし、事実、大多数の出版社は、名義的に「何々制作室」と自称しているがその実、個人の出版社である機関と提携しているのである」と紹介している。但し王曉明は、そうした民間の違法な個人出版社の乱立こそが、作家や出版社の安定した長期的利益を阻害しているとしており、民間主導による市場化そのものに否定的な立場を明確にしている。「蔵羚羊自助遊」は一例に過ぎないが、中国民間の個人が出版業に参加しようとしても、実質的には国営出版社が市場を壟断しており、民間には利益が還流しにくいシステムに直面せざるを得ない点に、注意を払うべきであろう。

⁴⁹ 注 37 前掲文を参照のこと。編集部に不満を寄せた「雅_哥」の具体的な指摘は分からないものの、孫石の文章を読む限りでは、『貴州』巻の情報更新が問題にされていたようである。

⁵⁰ 注 36 前掲文を参照のこと。

〇年四月のこと⁵¹であった。そのほかにも、インターネット詩歌サイトでは草分けとも言える「詩生活」でも、二〇〇一年五月より「詩生活論壇」というBBSの管理に携わる⁵²など、インターネット詩歌サイト草創期の運営を担った主要人物の一人と言えるようだ。

衆知の通り、インターネットの文学サイトの歴史は詩歌に限らず新しく、二十世紀末から二十一世紀にかけての世紀転換期に急速に浮上したものである。本稿では紙幅の関係上、話を詩歌関連サイト⁵³に限定して簡単にその歴史を振り返ってみる。インターネット詩歌の草創期から積極的に運営に加わり、主導的役割を果たした一九六七年生まれの桑克⁵⁴について言えば、一九九七～一九九八年頃、職場のパソコンでネットサーフィンを始めたという。当時は北米の「橄欖樹」以外は詩歌に関するサイトで見るとはほとんどなく、また発表されている詩歌のレベルも総じて低かったという。しかし比較的高い素養の詩人が集まっていた「泡網倶楽部」に出入りするうちに、桑克はインターネットの愉しさを重要性に気づき、先ず一九九九年に同サイトで自分の詩歌を発表する専用コラムを開設した。

作品発表の場としてのインターネットは、それまでの文芸誌など伝統メディアには必須であった審査や編集という手続きがなく、より広範な読者と直接向き合い、素早い反響や批評に触れることができ、またその意見をもとにリアルタイムで修正を行っていくことまで可能であった。時空間や現実社会のヒエラルキーの制限を受けず、さまざまな背景を持つ詩の愛好者と自由な交流の場を得られる愉しさに、桑克などネット詩歌草創期の詩人たちは魅了されていったようである。

更には彼らが魅了された背景には、一九九〇年代を通じて詩歌が社会的影響力を急速に失い作品発表の機会が著しく減少し、発表したとしても社会的反響がほとんど得られない状況にあったことが作用している、と王璞は分析⁵⁵している。つまり自分の作品が認められる機会に餓えていた若い詩人たちは、既存の文学体制によらず独力で新たな詩歌ブラッ

⁵¹ 注 18 の胡統冬 のブログ記事を参照のこと。

⁵² BBS 管理ではないが、「詩生活月刊」編集については雲南行の後、死に至るまで続けていたようである。注 4 前掲の韓博の文章を参照のこと。

⁵³ インターネット詩歌の歴史については、北京大学詩人の一人であった王璞が、自身の体験に基づいてまとめた回顧的研究「対“網絡詩歌”的初步考察和研究」(『詩歌報』転載、来源:『詩生活』、二〇〇五年六月六日)に詳しい。以下の記述は断りがない限り同文に従い、必要に応じて他の文献を参照している。なお、王璞は一九八〇年生まれ、一九九九年に北京大学入学。インターネットは一九九八年から始め、北大在線新青年の編集者とは個人的に知り合いだったようである。<http://www.shigebao.com/html/articles/22/689.html>

⁵⁴ 桑克「互聯網時代的中文詩歌」(『泡網倶楽部』、来源:『詩探索』二〇〇一年一・二期合冊(天津社科院出版社、二〇〇二年一月九日)。李元勝『詩歌的界限——網上現代詩選』の序として書かれたものである。

⁵⁵ こうした点については、例えば魏天無「1999 年以来的網絡詩歌」(『詩生活』、二〇〇四年十二月)でも同様の指摘がある。

<http://www.poemlife.com/ReviewerColumn/weitianwu/article.asp?vArticleId=36239&ColumnSection>

=

トホームを建設し、これからの詩歌をリードするという自分たちの姿を、インターネットに見ていたというのである。

桑克は以前から詩人として一定の名声があり、年代も「七〇后」とは少しずれている。しかし全体としては、インターネットという新しい技術をいち早く習得して、全く新しい社会環境で自己を実現させていく可能性に目覚めたのは、当時二十歳代だった「七〇后」のうち、経済的にも恵まれた高学歴層が主体となった⁵⁶ことは想像に難くない。後述する「北大在線新青年」で馬驊とともにBBS管理にあたっていた仲間には、生年を特定できない者もあるものの、胡統冬(胡子)・冷霜・馬雁(阿三)・飯飯など、多くは「七〇后」⁵⁷の友人同士で固められていた。

ここで興味深いのは、既存社会のシステムの一員である自分を拒否し、自分の存在そのものと直接向き合うことで自己実現を図るという「七〇后」の価値観が、インターネットの登場によって実現の機会を与えられたという構図が伺える点であろう。個々人の趣味に止まっていたバックパック旅行が、インターネットを通じて愛好者が情報交流するプラットフォームへと発展し、そこから新たなトレンドを自分たちがリードするという自負のもと、「蔵羚羊自助遊」という画期的ガイドブックが生まれたことを前章で紹介したが、詩歌サイトでも全く同じ構図が繰り返されたことになる。草創期のインターネット文学については、こうした「七〇后」の価値観、および前史として一九九〇年代に文学が置かれた状況を視野に入れ、彼らがインターネットという新しいツールを通じて何を実現しようとしていたのかを考える必要があるだろう。

かくして、レベルはともかくインターネットで自作を発表していた無名のアマチュア詩人たちに、桑克のような一定のレベルを備えた若手詩人が合流したのが、だいたい一九九九年頃のことであった。そして二〇〇〇年二月二十八日、後に同種の多くのサイトがモデルとした詩歌専門サイト「詩生活」⁵⁸とその目玉の一つBBSが開設⁵⁹された。桑克は三月から中心メンバーとして、同サイトの運営に一貫して携わることになり、早い時期から詩人同士が知り合うプラットフォームとしての役割を意識していたという。詩歌のネットマガジンや詩人や詩評のコラム、BBSの分類(作品・批評・翻訳・その他)など、多くがこの

⁵⁶ 注 55 前掲文にも同様の指摘がある。

⁵⁷ 例えば胡統冬は一九七四年、冷霜は一九七三年である。馬雁と飯飯は一九九七年北京大学入学の経歴を持つので、一九七〇年代末の生まれと思われる。北京大学は元より詩歌創作の伝統があり、愛好者の間で一定の交流があったことを考えると、彼らはインターネットを介する以前から、直接知り合いだった可能性があるだろう。

⁵⁸ 注 55 前掲文では李元勝が一九九九年十一月に創設した「界限」を、高いレベルの詩歌を専門に発表していく場として、意識的に運営を行った最初の詩歌専門サイトと位置づけている。

⁵⁹ 開設準備にあたったのは萊耳・小西・白玉苦瓜で、桑克は参加していない。注 53 および注 54 前掲文を参照のこと。

「詩生活」の模索で生み出されたものであり、実社会で編集者だった桑克の経験がここでも活かされることになった。またこの二〇〇〇年という年は、後述する「北大在線新青年」のほか、多くの詩歌サイトが創設された年⁶⁰でもあった。

「詩生活」のBBSは立ち上げの当初から熱気に包まれていたようだ。草創期から「詩生活」を見守ってきた王璞は、二〇〇〇年春夏から二〇〇一年秋が最もエキサイティングであり、「あのような濃密でかつ真面目な創作の雰囲気や激しい論争シーンは、もはや再現できないかもしれない」と語っている。王璞は例として王敖(朋克猫)を挙げ、彼が自作を巡る討論に果敢に加わり⁶¹、BBSに集う人々をエキサイトさせたと回想している。

馬驊が勤めていた「北大在線新青年」は、北京大学が二〇〇〇年に立ち上げたベンチャービジネスの文化的バーチャルコミュニティで、学術・映画・文学・音楽の四チャンネルを擁し、文学関連では「文学大講堂」「文学自由壇」といったBBSがあったという。胡統冬を中心とした「七〇后」の仲間がこれを運営していたが、当初はきわめて単純なもので、王璞によるとほぼ彼らがそれぞれ複数のハンドルネームを持ち、互いに仲間同士の冗談を交えながら、真剣にかつ愉しく詩歌や創作について熱く語り合っていたという。そこには新しい詩歌を生み出そうというエネルギーと仲間同士の堅い友情が溢れていたと王璞は回想している。北京大学出身者を中心とする彼らの高い素養と、草創期の活気に引きつけられるように、次第に一定以上のレベルを備えた詩人⁶²も次々参加するようになり、翌二〇〇一年に「文学自由壇」は早くも繁栄期を迎えたという。

しかし「北大在線新青年」には当初から経済的問題がつきまといっていた。同サイトは北京大学と青島軟件公司などが出資したインターネット会社「北大在線」⁶³が経営するもので、一般のポータルサイトが提供する情報コンテンツを、北京大学学生らが提供する文化情報に特化した点が最大のウリであった。「北大在線新青年」の文学や音楽、映画⁶⁴など各

⁶⁰ 注 55 前掲文を参照のこと

⁶¹ 「詩生活」についての数字だが、注 55 前掲文では王敖が二〇〇〇年に行った書き込みは一千以上にのぼるだろうとしている。

⁶² 王璞が挙げているのは、王敖(朋友猫)・顔峻・拉家渡・趙霞などである。

⁶³ 以下の記述は「青島神機妙算巧安排 成功從北大在線脱身」(『金港新聞』、署名：董長虹、二〇〇三年八月三十一日)、および「北大上網、新青年不在線——網站《新青年》」(『暇日 100 天』、署名：王辰竜、二〇〇五年九月三十日)を参照のこと。
http://news.zjg.jsinfo.net/news_view.php?News_ID=10728
<http://www.holiday100.com.cn/dzb/ShowArticle.asp?ArticleID=2655>

⁶⁴ 本稿では主に詩歌サイトに話題を限定したが、「北大在線新青年」がカバーしていた文化領域は映画や音楽など広範囲にわたっている。この問題はたいへん重要で、馬驊ら「七〇后」の青年たちの関心領域はその前の世代の知的エリートとは異なっている。「北大在線新青年」に参加したメンバーが後にどの文化領域に関わり、いかなる社会的ポジションについたかという点の調査は、今後の課題としたい。また「北大在線新青年」が企画したイベントの中で最も大きな反響を呼んだのは、サイト開設一周年を記念し、二〇〇一年五月、香港映画スターの周星馳を北

種 B B S を利用者の大半は文学青年で、同サイトは業界内での評価や影響力こそ非常に大きかったものの、ほとんど広告がとれず経営状態は芳しくなかった⁶⁵という。そのため会社成立から数ヶ月で北京大学側が送り込んだ社長の戚立峰が経営の責任をとって辞任し、青島側の倪金磊が新社長となった。

倪金磊はオンライン教育事業の方向へ大きく経営方針を大きく転換し、不採算部門の「新青年」にはその頃から売却の噂が取り沙汰されたようである。会社の正式成立が二〇〇〇年秋のことであることから、二〇〇一年初めには経営問題が発生していたことが推測される。同年は一三〇〇万円の赤字で、二〇〇二年末から徐々に黒字に転じ始めたとはいえ、当初の資本金を大きく切り崩した分は回収の見込みがたたない状況だった。二〇〇二年九月には一度、具体的な買収の話が持ち上がっている。詳細は公表されていないため不明な点も多いが、青島側は二〇〇二年末に「北大在線」の持ち株を全て北京大学側に売却し、完全撤退したという。

経済問題以外にも更に深刻な問題も発生した。人気 B B S の地位が確立されるにつれ、仲間以外の異なった背景をもつ、年代も作風も文学観もまちまちな参加者たちを一つにまとめていく必要が生まれ、現実社会のヒエラルキーを持ち込まない自由で平等な空間という理想には、限界が見え始めた。要は些細なことから生じる行き違いが、更に激しい言葉のやりとりへと発展するケンカが絶え間なく起こるようになったのである。その限界は二〇〇一年後半には、深刻な問題へと発展していった⁶⁶ようだ。この点についての王璞の回想はあまり詳細なものではないが、一触即発の状態に加えて著作権問題が起き、B B S の管理や発展が議論されたとある。他に材料がないので完全な推測になるが、書き込みに無断引用・転載があつて問題になった可能性のほか、二〇〇一年七月に「北大在線新青年」は B B S に投稿された作品や書き込みを三巻にまとめて出版している⁶⁷ことから、時期的に

京大学での講演に招いたものであった。かねてより周星馳のファンであった馬驊は、この講演の司会を自ら志願して務めたという。周星馳主演のドタバタコメディ『大話西遊(チャイニーズ・オデッセイ)』が二十一世紀中国の表現に与えた影響は多大なものである。「北大在線新青年」B B S では冗談やギャグで既存の詩壇をちゃかした調子での書き込みが行われ、それがネット上で転載されて大いに話題を呼んだと注 52 前掲文は伝えているが、いわゆる「大話(大ボラ)」文体の流行に、馬驊ら「七〇后」世代がどのように関わったのかについては、今後の課題としたい。尚、「大話」の流行については、朱大可・張閔主編『Chinese Culture Review(中国文化総覧)』vol.1(好文出版、二〇〇五年十月)キーワード「大話」(二四八頁)等を参照のこと。

⁶⁵ 不採算の原因として他に、「北大在線」はインターネット株の高騰やデジタルコンテンツ・ビジネスへの投資を当て込んで I T 事業に参加したものの、折悪しくナスダック指標の急落によって期待していた投資等が見込めなくなった点が挙げられている。注 63 前掲記事を参照のこと。

⁶⁶ 問題を抱えながらも胡統冬はこの頃はまだ、さまざまな背景を持つインターネットの参加者が、いわゆる既存の詩壇を動かすルールを変えていく力となることに強い期待を寄せている。拉家渡の司会のもと、胡統冬・桑克・燕窩が行った鼎談「關於網絡与詩歌」(『南方網』、二〇〇一年九月二十二日)を参照のこと。<http://www.southcn.com/huazhangxipin/200109220739.htm>

⁶⁷ 胡統冬・馬驊編による『盜版創世記』『声色新青年』『思想的碎片』(北大網事叢書)の三巻で、

見てそれが問題になった可能性もあるだろう。

かつ問題が起きて議論になった際、BBSの管理人が「北大在線新青年」に勤める「七〇后」の仲間同士であったため、どうしても仲間へ肩入れする傾向が見られたようである。それが火に油を注ぐ格好となり、BBSは収集がつかない状態になり、ついには匿名の「網絡管理員」なるハンドルネームで、問題がある書き込みを削除するなど、「技術的管理」を始めたという。こうして「七〇后」がインターネットに夢見た、自由かつ平等に交流する民主的な場⁶⁸は、現実の複雑な人間関係の前ではあまりにナイーブな理想に過ぎなかったことが露呈された。

こうしたことは程度の差こそあれ、どのサイトでも起こった。前述の「詩生活」でも、活発でエキサイティングなBBSでの討論に、もともと詩歌界にあった対立要素が持ち込まれ、明らかに行き過ぎた激しい論争が立て続けに起こったほか、ちょっとした見解の相違についても忌憚ない意見が飛び交ったという。更には、二〇〇〇年頃に他にも多くの詩歌サイトが創設され、「詩生活」が唯一の中心という状況でなくなったため、二〇〇一年末までには詩人たちもそれぞれ自分の居場所を見つけ、「詩生活」から一定の距離をとるようになった。すでに老舗となった「詩生活」に近寄る新規の愛好者は多かったが、それ以前にあった求心力はもはや回復できなかったとされる。

「北大在線新青年」の場合、北京大学を中心とする「七〇后」の仲間内の創作交流を核としていたため、それ以外の背景を持つ参加者との間で調整をはかっていくのが、余計に難しかったといえよう。BBS管理人を民主選挙によって選ぶ方法も模索されたがうまく機能せず、ケンカが絶えない状況は翌二〇〇二年一月末まで続いたとされる。それを象徴する一つとして、王敖(朋克猫)が連続して大量に意味のない書き込みを行うことで、他人の書き込みをスレッドの目立たない位置に追いやるという事件が起き、大きな論議を呼んだ。マナー違反行為へのペナルティを求める声もあがったが、一九七六年生まれで北京大学出身の詩人である王敖は、「北大在線新青年」の編集管理メンバーとも個人的関係があり、

いずれも長江文芸出版社から刊行された。

⁶⁸ 本稿では「七〇后」が理想として抱いていた部分のみを強調することになったが、無論、彼らが経済的・世俗的成功をも同時に夢想していたことは、衛慧の例がそうであるように、事実と言えるだろう。この点については例えば、榎本雄二・三須祐介「インターネット文学サイト『榕樹下』からみる中国文学メディアのゆくえ——編集部へのインタビューを中心に」(『漢字文献情報処理』創刊号、二〇〇〇年)、宇野木洋「美女作家」現象とその周辺——キーワードとしての「才女」「網絡」「私人化」(『アジア遊学』六十二号、二〇〇四年)等を参照のこと。とりわけ後者の宇野木論文に啓発されることが多かった。なお、同論文で紹介されている『北大才女書』(文化芸術出版社、二〇〇一年)には、「北大在線新青年」でBBS管理人を務めていた飯飯の小説が収録されており、美女作家ブームをあてこんだ出版ビジネスと「七〇后」の理想主義的部分がどのように共存していたか等、今後の検討課題としたい。

胡続冬や馬驊⁶⁹など管理サイドはBBS全体の運営と個人的友情の間で神経をすり減らすことになった。

BBSからは次第に当初の熱意が消えていくなか、最終的には二〇〇二年九月、有名詩人の孫文波と蔵棟などをBBSの管理人に迎え、事態の調整⁷⁰をはかった。しかしネット外での名声こそ高かったものの、彼らがBBSの議論に積極的に加わっていくことは想像できないと感じた人は多かったようである。更には、有名人を客寄せの目玉にすることは、インターネットの背景を問わず自由かつ平等に議論する理念が踏みにじられたように感じる人もいたという。仲間内の分け隔てない友情がそのまま外側に拡大していくというイメージだけで構想されたBBSは、現実の複雑かつ重層的な人間関係と経済的採算性という論理に絡め取られ、「七〇后」の試みにあった理想部分⁷¹はあえなく潰えたのである。馬驊が北京を離れたいので落ち着き先を紹介してほしい、と同僚の朱靖江に相談を持ちかけるのは、この約一ヶ月後のことであった。

5. ボヘミアン幻想の終焉

二〇〇三年二月に馬驊が雲南に旅立った数ヶ月後、「北大在線新青年」の責任者であり、馬驊を同サイトの管理に誘った胡続冬が客員教員としてブラジルのブラジリア大学に赴任し、サイトの運営から離れた。それと時を同じくして二〇〇三年後半、サイトは情報が更新されなくなり⁷²、人が急速に離れていった。最終的には二〇〇四年に完全閉鎖されたという。こうして「七〇后」による若者文化発信基地として一時代を築いたバーチャルコミュ

⁶⁹ 「詩生活」の「新詩論壇」で管理人をつとめる馬驊は、BBSの創作活動等には参加せず、ひたすら管理人としての職務を忠実にこなしていた、と王璞は注52前掲文で語っている。

⁷⁰ 例えば馬雁は二〇〇〇年夏～二〇〇二年夏に「文学自由壇」管理人を務めたとされるので、この管理人交替と関係している可能性がある。「馬雁任原創文学大賽評委」(『新浪網』、二〇〇三年十二月八日)を参照のこと。<http://people.sina.com.cn/forum/2003-12-08/9507.shtml>

⁷¹ 言うまでもなく、インターネットとの関わり方のみが、「七〇后」の精神的・文化的特徴を示すものではない。「中国“70后”作家面臨“定位”和“轉型”挑戰」(『中国新聞網』転載、来源：『北青網』、二〇〇七年十月二十一日)では、「七〇后」は社会主義体制時代と市場化時代の狭間の過渡期の特徴を持っており、彼らの反体制的姿勢や表現もその大半が旧来の作家協会に組織された伝統的文化体制内部で表現され、その影響力もそこに止まっていると指摘されている。市場と直接向き合い、旧来の文学体制をあまり利用しなかった「八〇后」との最大の違いの一つと言えよう。

<http://www.lihaiwang.com/myfav/news/shownews.jsp?db=true&head=false&newsid=102859>

それと同時に、ネットに寄せた「七〇后」の理想・夢想とは、要はネット利用者がまだ少数であった時期、いち早くそれを利用しえた自分たちのアドベンテージを前提としており、ネット利用人口が拡大するにつれ、それが急速に失われたと見ることもできよう。例えば二〇〇三年はSARSに関する政府当局の情報隠蔽に対して、批判的ネット世論が噴出し、当局に事態への対応策変更を引き出す画期的事件が起きた。二〇〇三年にはネット世論が一定の規模を持つようになったことを示すこの事件は、ネットにおける少数の先行者としての「七〇后」のアドベンテージが失われたことを象徴的に示す事件でもあるだろう。

⁷² 注63前掲の『暇日100天』記事を参照のこと。

ニティは、馬驊が事故死した同じ年にその姿を完全に消したのである。理想に破れた「七〇后」の若者たちはやむなく現実に戻り、それぞれの人生を再スタートした。

そして「蔵羚羊自助遊」のその後も、立ち上げに加わった「七〇后」の編集者たちの理想を置き去りにして、現実の厳しい市場で生き残るため苦闘を続けることになった。馬驊が亡くなってから一年あまりたった二〇〇五年六月、「蔵羚羊自助遊」が北京榮格からTOM傘下の台湾城邦に買収された、というニュースが会社からのメールで編集部に伝えられた⁷³。編集部のメンバーは薄々そうなることを予感していたものの、それでもショックで言葉を失った⁷⁴ようだ。会社からのメールの文面では売却の理由として、一つは売り上げ収入が実際に入金するまで一年以上かかるという図書流通システムの問題、もう一つは二〇〇二年に買収してから三年間、目標としていた売り上げ数値に到達しなかった⁷⁵ことの二つが挙げられていた。またメールは、新たな買収先である城邦が編集部メンバーの雇用を予定していない⁷⁶ため、榮格に残りたいと希望する者についてはしかるべきポストを与えるということを伝えた。

この知らせはニュースとしても記事に転載されたが、かつての編集者たちにまで情報が伝わるには少し時差があったようである。以前に編集部にいた趙吾文(趙宇)は張瑾からの電話⁷⁷で、八月十二日にニュースを知り一人感傷に沈んだ。翌十三日に趙吾文が書いたブ

⁷³ 「中国最早的自助旅遊系列圖書《蔵羚羊》再次被轉讓」(『駝鳥戶外』、二〇〇五年六月二十五日)を参照のこと。<http://www.07758.com/news/chinanews/2005-6/25/0562510540171462.htm>

⁷⁴ 趙吾文「為理想主義送行」(『天涯社區』、二〇〇五年八月十三日)を参照のこと。
http://www.tianyablog.com/blogger/post_show.asp?blogid=163560&postid=2443012

⁷⁵ 「從地理行走向精神行走轉折——旅遊圖書出版突破訪談」(『中国高校教材圖書網』転載、来源：『中華読書報』、署名：韓曉東、二〇〇四年九月二十二日)で、記者からインタビューされた中国青年出版社勤務の莊庸は、二〇〇〇～二〇〇二年、自ら移動するということに必要な情報や視点を盛り込んだバックパック旅行ガイドブックが全く新たに登場したが、二〇〇三～二〇〇四年にはさまざまな出版社が類似のガイドブックを出版したため、市場が飽和したと述べている。北京榮格が二〇〇二年に北京城市から買収した後、バックパックガイドブックの市場価値は急速に低下したことになるだろう。

⁷⁶ 注 23 前掲の「蔵羚羊自助遊」のホームページでは、台湾城邦の買収以前から「蔵羚羊自助遊」編集部に勤めていた張瑾・孫石・許彦利などの名前が見られることから、あくまでも「蔵羚羊自助遊」と運命をとにもするという選択をした編集者もいたことが伺える。但し例えば最初期からの編集者で「蔵羚羊自助遊」と運命をとにもする選択をした張瑾も、二〇〇五年の買収直前に趙吾文に「今の仕事には情熱が湧かなくなった」と漏らしている。注 73 前掲のブログを参照のこと。更にこの数日後にあたる八月十六日のブログ「天色真的涼了」では、張瑾は職場で彼女のブログを読んで泣いてしまった等、仲間からセンチメンタルな気分になったという旨の連絡がインターネットを介して趙吾文に届いたことが記述されている。なお趙吾文は二〇〇四年まで編集部にいた趙宇(江城子)と同一人物で、「蔵羚羊自助遊」編集部を辞めた後、中国旅遊出版社に勤務している。

⁷⁷ 注 76 前掲文を参照のこと。

ログを読んだ高宏松もまた、ショックを受けた⁷⁸一人だった。自分たちの理想と思い入れがつまった「蔵羚羊自助遊」が市場で生き残るためには仕方ないことと思いつつ、自分たちの手から離れていくような思いに耐えきれず、二〇〇二年の北京栄格による買収時に編集部を去った高宏松は、今度こそ本当に「蔵羚羊自助遊」を自分は失うことになるのだという思いに苛まれ、悲しみにくれた。高宏松がこの二〇〇五年の買収を、二〇〇二年の買収時に重ねるのは当然として、更に二〇〇四年の馬驊の事故死にも重ねあわせているのは興味深い。「七〇后」の仲間が共有した理想は現実の中ではもはや失われ、思い出の中にしか存在していないという事実、高宏松は改めて打ちのめされたのである。

こうした経緯を踏まえて再度、二〇〇四年の馬驊の死を振り返るならば、政府やメディアが政治的あるいは商業的に馬驊の死を利用したことに対して、「七〇后」の若者たちが連名で『呼籲書』を発表した背景には、単に馬驊の姿が歪められたことへの義憤でなかったことが伺えるだろう。彼らは自分たちの理想や夢が再び現実には踏みこまれた、と感じていたのではなかったろうか。馬驊の転落事故が伝えられた時、彼は死んだのではなく、例によってまたどこかに旅ただけだという想像で、自らを慰めた者⁷⁹がいたことは前述した通りである。そう彼らが考えたがった理由の幾分かは、現実の既存システムを拒絶し、永遠のボヘミアンを続ける「七〇后」の理想を、馬驊が自分たちの代わりにどこかでまだ頑なに実践してくれているのだ、という期待が含まれていた可能性は否定できないと思われる。「北大在線新青年」で苦楽をともにした胡統冬は、自分らが三十歳を過ぎて知らぬ間に生活のルールに取りこまれている中、馬驊だけがそれと上手に戯れていたと語り、いつかまたふいに戻ってきて悪戯を仕掛け、自分らにニヤリと笑ってみせる馬驊の姿を想像している。馬驊は現実から永遠に姿を消す⁸⁰ことによって、図らずも「七〇后」のボヘミアンの理想を体現し続けることになったのである。

*引用した URL は全て二〇〇七年十二月十七日に確認したものである。

⁷⁸ 注 36 前掲文を参照のこと。趙吾文のブログで八月十二日に張瑾から買収の件を趙に知らせたことを知った高宏松は、その十二日に許巍のコンサート会場で張瑾と会ったにも関わらず、彼女がそのことを知らせなかったのは、自分の気持ちを気遣ったことだろうと推測している。

⁷⁹ 例えば注 11 前掲記事を参照のこと。

⁸⁰ 同年九月には雲南から都会にまた戻る予定であったという。注 4 前掲の韓博の文章を参照のこと。

慕容雪村

『成都よ、今夜は俺を忘れてくれ』

試論

——「欲望」と「虚無」のリアリズム——

高屋 亜 希

1. はじめに

慕容雪村¹が2002年、ネット上に連載発表した長篇小説『成都よ、今夜は俺を忘れてくれ』²(以下『成都』)は、作者と同じ1970年代生まれの若者たちを等身大でリアルに描いたとして、大反響を呼んだ。小説は発表とほぼ同時期にあたる、2001年春からクリスマスイブにかけての1年弱を背景にしている。成都のやり手ディーラー陳重がセックスや金銭などさまざまな誘惑に「欲望」のまま流されることで、妻や友人などこれまで大切にしてきた人間関係を蔑ろにし、そのことに罪悪感を覚えながらも結局は、その全てを失うというストーリーである。

¹ 1974年生まれ、『成都』発表時に広東の会社で管理職をつとめていたが、現在はフリーで創作活動に専念などの情報以外、実名や経歴など個人情報ほとんど明らかにされていない。

² 原題は『成都，今夜請将我遺忘』。王鳴劍「現代都市里的欲望人生——試析《成都，今夜請将我遺忘》」(『重慶工商大学学报(社会科学版)』23卷5期、2006年10月)等によれば、「天涯」「新浪」「NET-BUGS」に掲載したとある。「神秘的網絡文学青年」(『中華読書報』、2002年9月)で慕容雪村は記者からのインタビューに答え、3種のペンネームでこれら3箇所に原稿を発表したことがあり、慕容雪村のペンネームは「天涯」で使用したことを語っている。なおまた李海鵬「慕容雪村：愈懷疑，愈藏匿」(『新聞週刊』、2002年10月7日)によると、連載が開始されたのは2002年4月5日のことで、2002年12月に内蒙古人民出版社から“大結局完全版”(筆者未見)が出版されるが、削除・改作部分があったとして、2003年8月に百花洲文芸出版社出版、二十一世紀出版社発行で“完全修正版”が出版されたとする。本稿の分析は全てこの完全修正版に基づく。ネット上で公開されたのは30章まで(完全修訂版：全37章)で、姜楠「給網絡小説以文学的關照——評《成都，今夜請将我遺忘》」(『北京理工大学学报(社会科学版)』5卷5期、2003年10月)等では、結末をネット上に公開しなかった理由が海賊版に対応するためであった、という噂を紹介している。ネット上では読者がそれぞれ書きかえた『成都』のさまざまなバージョンが出現し、混乱を引き起こしたと前掲の李海鵬も語っている。

各人が社会的規範やモラルを無視し、ひたすら自身の「欲望」を追求することによって、規範やモラルそのものが空洞化し、人生から目の前にある「欲望」以外の存在意義を奪っていく、という「虚無」的な『成都』の同時代認識は、1980年代生まれの作家たちにも共通する³ものと言えよう。但し1980年代生まれの作家の多くにとって、規範が空洞化した社会の「虚無」状態は他人がつくりだした所与のものであり、そのことへの憤りは示されるものの、自らもその状態をつくり出す当事者だという意識は一般に乏しい。これに対して1970年代生まれ世代を描いた『成都』は、自らの「欲望」との関わりにおいて「虚無」を描いており、現状を招いた当事者としての意識が明瞭である。

この違いの背景には、両世代が社会参加する時期のズレが作用しているだろう。市場化の進展に伴い、個々人の「欲望」を社会全体で調節する機能の欠陥が露わになり、社会規範の形骸化が深刻化していくのが1990年代半ば以降のことである。1970年代生まれ世代はこうした社会風潮と軌を一にして社会参加を果たした⁴のに対し、1980年代生まれ世代は社会規範の崩壊が完全に深刻なものとなってから社会参加を模索しなければならなかったことが、両者の同時代認識の違いを生んでいるものと推察される。

『成都』は赤裸々な「欲望」の描写で世間の注目を集めた⁵が、本稿では1980年代生まれ世代との違いを考えるため、この「欲望」を「虚無」との関係において考察する。その際、個人的「欲望」の充足がいかに関社会に対して「虚無」をもたらすかという点を確認するととどまらず、「虚無」化された社会において個々人の「欲望」がどのように構造化されているかという点についても、分析を行う予定である。なお小説は、陳重の放埒な性的「欲望」がもたらす妻との関係破局や、金銭的「欲望」を原因とする友人との関係破綻など、複数の「欲望」が相互に関連しながらストーリー展開するが、本稿では紙幅の関係上、陳重と大学時代以来の友人である李良と王大頭の間にあり、友人関係を中心に検討したい。

2. 「欲望」による友情の「虚無」化

職場のライバルが支社長に抜擢⁶され、自分がその下で働かなくてはならなくなったことに苛立つ陳重が憂さ晴らしをしようと、先物取引で成功している資産家で親友の李良宅を

³ 拙稿「孫睿“青春三部作”に見る「虚無」の位置づけ——〈存在の耐えられない軽さ〉への抗い」（早稲田大学中国文学会『中国文学研究』第32期、2006年12月）を参照のこと。

⁴ 『成都』の主人公の陳重は、1995年前後に大学卒業という設定になっている。

⁵ 注2前掲の李海鵬は、『成都』がポルノサイトに転載されたり、単行本化された海賊版ではその種の小説とセットにされていたことを紹介している。

⁶ この抜擢は、本社への密告で元の支社長を追い落としたことに伴う後任人事。陳重は追い落としに直接関与していなかったものの、自分にとってもメリットがあると期待し、それを黙認したという設定になっている。この新しい支社長との間で展開される主導権争いも、小説の主要なストーリーの一つであり、最終的に陳重は争いに敗れ、職場を追われることになる。

訪れる場面から、小説は始まる。李良と一緒に麻雀卓を囲んでいた葉梅という初対面の女性に引き合わされた途端、陳重はそのセクシーな体つきに目をとめ、性的「欲望」を抱く。更には麻雀で給与半月分の戦果⁷を手にとると、“とたんに内心すっきり”(p4)し、昼間の苛立ちもいつしか消える。そして上機嫌のまま、葉梅を車で自宅に送り届ける途中、半ば強引に誘惑して関係を結ぶことに成功し、苛立ちで始まった夜は戦果を得た歓びのうちに更けていく。

ここからは、内心見下していたライバルから命令支配される立場に転落した屈辱的現実が、目の前にぶらさげられた金銭とセックスという「欲望」の対象を、ちょっとした勝負のすえに戦果として手に入れ、組み敷いて支配する行為の過程で、一時的に忘却されていく構図が見て取れよう⁸。こうした支配と被支配をめぐる陳重の代償的行為は、電話での妻からの食事の誘いをにべもなく拒絶する行為と平行して行われている。戦果を得て気分転換する行為が最優先される中、自分に差し出されていた妻からの愛情や信頼といった感情は背景へと後退して無視され、陳重が意図したものではない⁹にも関わらず、妻の存在は陳重の気分次第で容易に踏みじることが可能な、モノと化している¹⁰と言えるだろう。

モノとして扱われていることは葉梅も同様で、陳重は性的「欲望」の対象としてしか葉梅を見ていない。しかし葉梅自身が、モノではなく感情を持った生身の存在であることを、その不機嫌な態度で示し続ける点は興味深いところである。情事が終わった後、葉梅の冷淡な態度に“ご満足いただけなかったようだ”(p7)と、陳重は男としてのプライドを傷つ

⁷ 元手の約 1,000 元をすぐに使い果たし、李良から借金して勝負を続けたという設定。李良にこの借金を返したかは小説では明らかではないが、普段から陳重は李良からこうした借金を繰り返しており、その累積は 32,000 元という高額にのぼる。また会社の公金 284,000 元あまりを私的に流用しており、小説のラストではそれが原因で会社から訴訟を起こされそうになる。陳重の「欲望」はこうした自身の経済能力を超えた、ルーズな消費によって実現されている点は注意すべきであろう。

⁸ この点について注 2 前掲の王鳴剣は、人生で味わうちょっとした挫折や失意が、さまざまな女性の肉体で晴らされると指摘している。また姜飛は「“遺忘”：叙事話語と価値態度——評慕容雪村的網絡小説《成都，今夜請將我遺忘》」(『文芸理論と批評』、2003 年 2 月)で、女性は単に叙述の道具として使われ、陳重の反省や懷疑を呼び起こす契機となった後は、その存在は悉く“忘れ去られる”と厳しく批評している。併せて姜飛は、陳重が放埒な欲望を恣にした後、そうした行為への反省や懷疑が一瞬だけ現れ、その後はすぐに一切が“忘れ去られる(遺忘)”、といった繰り返りで『成都』が構成されている、と重要な指摘を行っている。

⁹ 陳重が大切な存在として愛情を向ける対象は妻に限られており、他の女性たちには肉体以外の関心を向けることはない。小説全体を通して妻への愛情は一貫しており、小説中盤で生じる離婚後もその点は変わらない。本稿で後述するように陳重の意識では、妻と「欲望」を向ける相手は社会的ヒエラルキーが厳密に分かれている可能性が高い。

¹⁰ 大学の後輩で指折りの美人だった妻の趙悦と知り合うきっかけは、大学敷地内で恋人とセックスしようとしていたところを暴漢に見つかり、強姦されそうになっていた趙悦を、現場を通りかかった陳重と王大頭が助けたことによる。婚前セックスにまだ寛容ではなかった 1990 年代前半、事件が明るみになることは趙悦にとって致命的なことであり、後々まで彼女の負い目になっていたことが複数の記述から伺える。(p15 等参照)

けられ、少しばかり意気阻喪する。

なお小説全篇を通して、陳重は大勢の女性と肉体関係を持つが、取引先の接待以外では、高級クラブではない手頃な値段で遊べる風俗店の女性か、行きつけの食堂の女将など肉体労働者が大半である。陳重はこれらの女性の肉体で自身の「欲望」を満足させる一方、女性たちの社会階層や生活習慣、趣味などを軽蔑(p108～109 等参照)しており、これらの女性をモノとして扱う意識の背景となっている。また自身の経済力では分不相応な高級クラブで遊ぶことを羨望しており、社会的ヒエラルキーの下位をモノとして支配し「欲望」をぶつける一方、ヒエラルキー上位に対しては羨望や嫉妬の視線を向けるだけで、「欲望」が実際に行使されない傾向が歴然と認められる。

陳重にとって些か悪い後味に終わった葉梅との情事は、彼女が親友の李良のフィアンセであると判明したことから、性的「欲望」のはけ口としてではなく、その感情を尊重すべき対象として扱わざるを得なくなる。葉梅との婚約を李良から知らされショックを受けた直後、陳重は更に葉梅からも電話で妊娠の事実を告げられる。電話口で罵られた陳重は、“この数年、自分をこのように罵る奴などいなかった”(p17)と怒りをおぼえるが、その怒りものみこむしかない。李良や妻に気付かれないうちに、近郊の樂山まで葉梅に付き添い、墮胎手術を受けることにする。

葉梅の妊娠は本当に煩わしかった。これまでも何人かの女を妊娠させたことはあったが(中略)、そいつらは簡単に処理できた。女たちに何千元か渡せば、もうみんな満足して堕ろしてくれた¹¹し、俺が顔を出す必要も全くなかった。だけど今回は何といっても親友のフィアンセだ。李良に対しては本当に面目ない。(p20)

李良との友情を裏切る行為であった点のみが、陳重に自身の非として意識されている。ここには、葉梅という女性が置かれた苦境や心中を思いやり、妊娠させたことに対して申し訳ないと思う感情是一片も見あたらない。寧ろ面倒に巻き込んだ葉梅には煩わしさを感じるばかりなのが読み取れよう。

それに対して墮胎手術のため、陳重と一泊ドライブに出かける葉梅の格好は、“ピンクのびっちりしたノースリーブ”(p20)で、セクシーな体型を強調するものである。“顔を赤らめて”(p20)車に乗り込んだという描写や、“李良にどう言ったんだい?”(p20)という陳重

¹¹ 結婚前、同棲していた農村出身の露天商の女性に対して陳重が別れ話を切り出した際、女性は一夜泣き明かしてから、妊娠した子供を墮胎するから金がいる、と言って別れ話を受け入れたエピソードが見られる。(p26～27 参照)

の問いかけに対し、“アンタはアタシを構っていてよ” (p20)と答えていることから、彼女が陳重との関係を肉体以上の精神的結びつきへ変えたいと思っていることが伺える¹²。しかし陳重はそうした彼女の気持ちを薄々感じつつも、関係をこれ以上のものに変えるつもりはない。陳重は内心、彼女に軽蔑を感じながら、無言のままドライブを続ける。

樂山での二人きりの夜、今度は葉梅から陳重をセックスに誘い、半ば強引にベッドに押し倒すが、陳重は“強姦されているような感覚” (p23)だとし、葉梅が肉体を通じて自分にぶつける激しい感情から身を引き離す。その後、情事が終わってから葉梅は号泣するが、小説中盤で明かされる李良がインポテンツだという事情を考えあわせると、葉梅は自分に触れようとしめない李良との結婚¹³にどこか不安や不満を感じ、そこから逃げ出す出口として、陳重を見ていたことが想像される。

しかし、こうした言葉にならない葉梅の肉体による叫びは、陳重に“粗野な女” (p101)という印象を与えたに過ぎず、二度までも肉体関係を持ったことに対して、李良への申し訳なさが募るばかりである。女を肉体というモノの領域に押し込め、自分の性的「欲望」をぶつけ支配しようとする陳重の優越的な主体意識が、肉体を介して自己主張をぶつける女の予想外の行動によって揺らぐ。そうした自身の主体領域に踏み込んでくる女の振る舞いを、“粗野”と陳重が解釈している点は実に興味深い。

結婚に躊躇を見せていた葉梅と李良の結婚生活は当然、最初からうまくいかず、ケンカが絶えない。結局はケンカの挙げ句、葉梅は電話で男と話をつけ家を出て行く。その苛立ちをぶつけるため、李良は自分だけが相手に貞操を守る必要などないから、商売女を調達しろと陳重を呼びつける。陳重は行きつけの接待用高級クラブにつれていくが、李良はクラブのママを指名してわざと嫌がらせの態度をとる。

姚萍 [=クラブのママ] の顔の笑みが次第にこわばり、陰鬱に俺をにらみつけている。李良を引っ張ったが、乱暴にふりほどかれた。李良はその場の雰囲気などお構いなしに、どんどん値をつり上げ続けている。“2万!” 姚萍の顔がたちまち蒼白になった。優に1分の時間が流れてから、彼女は口を開いた。“よろしいでしょうか。

お客様がお金持ちでいらっしゃるのは分かりました。しかし、私ども商売女の前で

¹² 陳重の離婚後すぐ、葉梅から電話がかかってくるが、長い沈黙の後、かけ違えたと言って電話を切るエピソード(p188 参照)が描かれており、彼女が陳重からのアプローチを期待していたことが伺える。また李良とケンカした葉梅が男に電話をかけて出ていったという記述(p101)もあり、彼女が救いを求めていた相手は陳重一人ではなかったことも伺えよう。

¹³ 小説では二人の婚約までの経緯や具体的な結婚生活の詳細は描かれておらず、これ以上、葉梅の心情を推測することは困難である。破局後、李良が離婚には応じてよいが、一銭も支払わないと発言している(p142 参照)ことから、彼自身は葉梅が自分と敢えて結婚した理由を経済的なものと認識した可能性があるだろう。

ひけらかす必要などございません(中略)。”俺は慌てて作り笑いを浮かべ、ママ、怒らないでやって下さい、こいつはこの手のことに疎いものだから、悪く思わないでやって下さいと言った。言い終わらないうちに、李良がいきなり獅子のように怒り狂い、俺に平手打ちをお見舞いした。“畜生！お前が俺の女房とやった時、どうして俺がこの手のことに疎い、と言わなかったんだ！？”(p103)

陳重と葉梅の関係を李良が気付いた経緯は、小説中に書かれていない。ただ披露宴の席上、陳重ら参列者が性的な話題で新婦をからかつてはやし立てた際に、葉梅が陳重に対して怒りを露わにするという事件が起こっている。周囲は二人の関係をいぶかる程度であったが、自身のインポテンツが原因で葉梅が別の男のもとへ出奔するにおよび、李良は遡って披露宴での事件の背景にある二人の関係を悟った、ということなのかもしれない。

インポテンツの李良は妻に捨てられた内心の苛立ちや憤りを晴らそうにも、陳重のように性的「欲望」の発散によって解消することもできない。そのため、資産家である李良は札びらで頬を叩くようなやり方で、指名できないママを指名することに執心し、自身の支配力を見せつけようとしたのだろう。しかし、若き日の美貌と超絶的なテクニックで業界の名声を勝ちとり、今は第一線から退いた“誇り高い”(p102)ママは、金次第で支配できるモノとして自分を売り渡すことを断固拒絶する。

恣に自分が支配できるモノを手に入れられなかった李良は、行き場のない苛立ちをついに陳重にぶつけてくるが、そのきっかけが性的なことに“疎い”という陳重の言葉に反応してのものだったことは、重要かもしれない。つまり李良は、友情に背いて妻と不倫したという事実に対してだけでなく、陳重が自分の性的無知を見透かした¹⁴上でそれにつけ込み騙していた、即ち自分を都合よく支配できるモノとして利用してきたという意識を見ていた可能性があるだろう。支配と被支配という関係が浮上した途端、対等な立場で尊重しあう友情という精神的価値はその実態を失い、「虚無」と化す¹⁵。

いずれは李良から資金援助をうけて、自分の会社を興したいと夢想していたことも、また麻雀などさまざまな機会に金を無心し、総額で 32,000 元(p187)の借金を重ねてきたことも、李良との間に友情があるという前提のもとでは、困った時は互いに援助するという友

¹⁴ この時点で、インポテンツであるとの告白はまだされていないが、李良が性的に問題を抱えているかもしれない、と陳重は薄々感づいている(p54～55 参照)という設定になっている。李良自身がインポテンツを告白するのは、この露見からまもなくのことである。

¹⁵ 『成都』自序はミラン-クンデラの『裏切られた遺言』を引用し、神聖な精神的価値があるように見えるものの全てに値札がついており、買収できない人はないという人生観が語られている。「欲望」による価値の「虚無」化が 21 世紀中国のクンデラ受容を支える文脈の一つとなっている可能性が伺えよう。尚、クンデラブームについては『Chinese Culture Review(中国文化総覧)』vol.2(好文出版、2005 年 10 月)文学事件 10-8(p31)、キーワード「昆德拉」(p258)を参照のこと。

情の現れ、と意味づけられるだろう。しかし、その友情そのものの存在が疑問視され不確かになった途端、そこにあるのはただ相手を御しやすいモノとして利用する、利用する者とされる者、支配する者とされる者の関係でしかない。

友情が先か利用が先かという結論でない問いに、“もし李良があれば金持ちでなかったら、それでもこうして彼を重視したのだろうか？”(p123)と自問した陳重は、“自分にも分からない”(p123)と答えるしかない。かくして、目の前にある金銭的あるいは性的「欲望」の充足が、友人を含む他者をモノ化し、両者の関係から友情などの精神的意義を奪い、「虚無」化してしまう¹⁶のである。

3. 「虚無」感による「欲望」への傾斜

葉梅との不倫が露見して以来、陳重は何度となく許しを請おうとするが、李良は耳を傾けようともせず、全ての気遣いを拒絶し、二人の友情の存在を否定(p219 等参照)する。しばらく音信がない中、もう一人の大学時代以来の親友である王大頭から、李良が麻薬を常用していると聞かされる。陳重は慌てて辞めるよう説得するが、李良は取りあわない。

李良に麻薬をやめるよう説得するのは難しかった。李良は何もかも全てを分かった上で、究極的な問題をストレートに議論してきた。“もし1ヶ月しか生きられないとしたら、麻薬をやれるかい？”真剣に考えた末にやれると答えると、李良は笑った。(中略)俺だったら寧ろ性的絶頂の最中、1秒でポックリ逝きたいものさ。カンカン照りの中、鉋を担いで一生苦しむのはまっぴらだからな。(p142)

李良の余命が1ヶ月しかないということではない。恐らく、葉梅や陳重は愛情や友情の名のもとに、自分を都合よく支配できるモノとして利用したに過ぎなかったと認識したのを契機に、李良には未来に向けて保つ努力をすべき関係が、この社会から全て失われてしまったという状況の比喻なのだろう。つまり、友情や愛情などといった精神的価値が「虚無」と化したことで、李良自身が社会に生きる意義も「虚無」化し、何ら価値を見出せなくなったということである。

しかも陳重と異なり、インポテンツの李良には眼前の性的「欲望」を満たすという戦果を得ることで、支配する者とされる者が互いに繰り広げる、こうした「虚無」的現実から

¹⁶ 本稿では紙幅の関係で論じなかったが、李良との友情関係と同様、度重なる浮気という妻を蔑ろにする行為によって、妻との愛情関係が「虚無」化したり、職場での権力闘争でライバルを騙したり出し抜いたりする行為によって、それまであった信頼関係が「虚無」化していくのが、認められる。

目をそらすこともできない。生きることに価値を見出せず、“全てを分かった上で”間接的な自殺行為に身を委ねている者に向かって、“健康を害する”(p142)という陳重の説得が、何の効力も持たないのは当然だろう。

また引用で注意すべきもう一つの点は、腹上死を本望とする陳重も実は李良と同じく、未来に向けた永続的關係の維持を志向しない「虚無」的な人生観を共有し、刹那的な自殺行為に身を任せていることにある程度、自覚的だということである。一生が単に“苦しみ”の連続の過程に過ぎないのであれば、不確定きわまりない未来に向けて現在の人間関係に配慮し、目の前にある「欲望」をセーブすることは不必要なことであろう。性的快感でこの現実から目をそらしている最中に“ポックリ逝きたい”という陳重の理屈が伺えるが、これもまた一種の自殺行為と呼べなくもない。「欲望」が現実の「虚無」化を招くのみならず、「虚無」という現実の恐怖から逃れるため、「欲望」への傾斜が一層加速している構図が見て取れよう。

李良の間接的自殺行為と向き合うことで、陳重は大学時代から李良が自殺願望¹⁷を抱いていたことを思い出す。“大の男たるもの、己の生死は己で支配すべきだよ。殺されるより、自殺した方がましさ”(p154)という李良のたぶんにヒロイックな言葉は、改めて今の李良が置かれている文脈に照らしてみると、当時とは異なった意味へ変化していることが理解される。他人からモノとして利用され、支配され、捨てられるばかりの社会的ヒエラルキーの下位にとって、唯一“支配”できるものが己の生命のみだ、という諦念にも似た現実認識¹⁸が浮かびあがってくるのではないだろうか？

『成都』では全篇を通して、自分は明日にはどうなっているか分からない、不安定で危険極まりない立場に置かれているという現実認識が繰り返し現れる。例えば、食事の席で陳重の義兄が、都市管理局職員¹⁹に商売道具一式を没収された露天商が、小競り合いで誤って投げた石で職員を殺し、一家心中に追い込まれた事件を話題にした後、食卓を囲んでいた一家は沈痛に口を閉ざす。

¹⁷ 李良が大学時代から詩人の海子をアイドル視していたとの記述(p185)がある。『成都』に限らず、1989年に自殺した海子をアイドル視する現象は広く見られる。

¹⁸ 注14前掲書キーワード「民工索薪」(p263～264)では、未払い賃金の支払いを求める出稼ぎ労働者による抗議の暴力や自殺など、「流血の事態」が社会問題化していることが伺える。また『21世紀中国文化地図(2006年第5巻)』(吉林出版集团有限责任公司、2007年8月)キーワード「自殺秀」(p250)では、そうした出稼ぎ労働者の命がけの抗議が、単なる見せ物としか受けとめられなくなった状況を伝えている。

¹⁹ 都市管理局が露天商など都市の社会的弱者を取り締まることで生じる衝突や軋轢は、広く世間一般の非難の対象となっている。『Chinese Culture Review(中国文化総覧)』vol.3(好文出版、2006年7月)キーワード「城管」(p202)およびvol.4(好文出版、2007年7月)キーワード「城管」(p158)参照のこと。

義兄は言葉をかみしめるように、今は危機感に溢れた時代だから、誰も明日を預言しようとし、全ては仮初めであり、本当のものは金しかないと言った。金と聞いて、俺はいてもたってもいられなくなった。昨日、会計が俺個人の〔会社からの借入金の〕計算書をプリントアウトしてくれたのだが、受け取ってちらっと見たら、頭の中がグァーンと鳴った。俺名義の借金が 284,000 元あまりになっていた。

(p86)

法的に保護されないまま細々とした小商いで生計をたてる露天商が、ヒエラルキー上位にある管理当局職員の恣意的な論理一つで、ある日突然、生きる糧を奪われ、命まで絶たれていく「虚無」的な現実、陳重の一家は言葉を失う。明日には「虚無」と化すかもしれないこの現実、仮初めのものに過ぎず、今この瞬間に手にする金、即ち「欲望」のみが唯一確かなものだという義兄の台詞は、「虚無」という現実の恐怖から逃れるため一層「欲望」へと傾斜する、陳重の認識そのものでもあるだろう。『成都』が陳重という「欲望」に溺れる一人の男の人生を超え、同時代社会全体を批評の射程におさめる箇所と言えるかもしれない。

この時、陳重にとって「虚無」への恐怖はきわめて切実である。金の一言で引き戻された現実、28 万元以上にもおよぶ会社の公金流用が来月の会計監査で会社上層部に知られると、処分は免れないだろうというものであったからだ。私的流用を重ねてきた会社の金を何に使ったのか、今や陳重自身にも分からない。恐らく“麻雀でなければ女”(p86)というその場限りの「欲望」を満たすため、蕩尽を続けた結果の累積がこの数字なのだろう、と陳重は推測する。

ここで注意すべきは、こうした後先を考えないルーズな「欲望」の追求もやむを得ない結果なのだと、陳重に意識されている点である。小説中で陳重は常日頃、自分が会社に果たしてきた貢献に、自分の給与や評価が見合わないという不満を漏らしている。また小説ラストで会社を辞めさせられ、これまでの使いこみを清算しなければならなくなった時も、“この数年、会社のために数千万元の富を稼ぎ出したにも関わらず、自分に残ったのはこんなちっぽけな袋一つでしかない”(p216)と、内心の不満を募らせている。

つまり陳重の意識では公金の私的流用も、会社から都合よくモノとして利用される現実を不公平とし、それに対する意趣返しと位置づけられていたことが推測されよう。会社では自分の価値や努力が正当に評価されない、という一種の「虚無」的な現状への憂さ晴らしに、陳重は役得と才覚を駆使して金銭的「欲望」や性的「欲望」を満たし、ヒエラルキー上位を出し抜いた優越感を手にする。しかしそのことでより一層、現実の立場を危ういも

のにし、文字通り全てを失う「虚無」に直面するという図式は実に興味深い。

理不尽な暴力と不公平な現実と黙々と堪え忍ぶ社会的弱者が、生きる術を奪われて思わず都市管理局職員に石を投げつけた行為と、「欲望」を調節して慎ましやかに暮らすという選択肢もあった陳重が、ヒエラルキーの上位に対して精神的勝利を追求する行為とを同列に論じることは難しい。とは言え、両者ともに明日をも知れぬ「虚無」的な現実という一点を共有し、陳重の意識で等価と見なされていることは、「欲望」と「虚無」の関係を社会全体の逃れられない運命としてとらえている点で示唆的と言えよう。一般に 1980 年代生まれ世代においては、「虚無」的な現状への意趣返し行為のみがクローズアップされ、それが賞賛される傾向²⁰だけに、『成都』のこうした「虚無」への冷めた認識は注目に値する。

自らの才能と努力によって己の未来を切り開く生き方が本格化する 1992 年の南巡講話²¹から、小説の背景となっている 2001 年まで、約十年の歳月が流れている。必ずしも合法性が保障されない状況下で、個人利益を追求する人々は時として足下を掬われ、容易に「虚無」的な現実へと転落していく。“この社会にあるのは有罪あるいは無罪ではなく、幸運あるいは不運でしかない” (p218) と語る王大頭は、その意味で『成都』に登場する唯一のリアリストと言えるだろう。

4. 「欲望」と「虚無」のリアリズム

麻薬所持の現行犯で李良が逮捕される。十年の量刑を覚悟しなければならない事態に、親友で警察官の王大頭は 50 万元出せば事件をもみ消せるかもしれない、と陳重を通じて李良に持ちかける。王大頭の指示に従うことで李良は自由の身になるものの、陳重は王大頭が事件につけ込み、50 万元のうち一部を自分の懐に入れたのではないかと、という疑念を消すことができない。小説では、王大頭が果たして李良の金を私物化したのかという点は明らかにされていない。とりあえず、陳重自身も李良との友情に背き、彼をモノとして利用した過去があるにも関わらず、金銭的「欲望」から王大頭が同様の行為をしたのではないかと疑い、かつ許そうとしない点を確認しておけばよいだろう。

その後も陳重は、自己矛盾した態度²²をとることを否応なく迫られる。小説後半で職場を追われた陳重は、これまで私的流用した公金を清算するよう、会社から告訴されそうに

²⁰ 例えば、上司に辞表を叩きつけ、これまで口に出れなかった不満や怒りを上司に直接ぶつける行為が賞賛の対象となる。注 3 前掲の拙稿を参照のこと。

²¹ 陳重らの大学在学時にあたる。小説中には当時、大学キャンパスでもビジネスブームが吹き荒れたエピソードが描かれている。この時も学校当局の摘発で、順調な成功をおさめていた陳重のビジネスは「虚無」と化し、ひいては退学の危機に曝されるという結末を迎えている。

²² 理想主義的なタテマエが陳重の中でまだ生きていることを示すものであろう。陳重や李良は理想主義を信じていられた大学時代を肯定的に回顧している (p196 等参照) ことが、小説全体で繰り返し記述されている。

なる。取り調べの警察官が実際に現れるにおよび、陳重は李良逮捕の事件以来しばらく交際を断っていた王大頭に助けを求める。

王大頭に次はどうしたらよいのか尋ねた。大頭はこの時うって変わり冷淡な態度で、俺を長いこと横目で眺めていたが、陰気な調子で聞いてきた。“俺がお前の金をいただくのは怖くないのか？” 決まり悪くなり(中略)、まだ例の件を気にしているのか、あれだって友を思えばこそそのことだろう、と言った。(中略)“俺に近寄るな！” と大頭が怒鳴った。“使い道がある時は兄貴と呼ぶくせに、使い道がないとなったら禽獣にも劣る扱いをしやがって、テメエのような友達がいるか？” (p230)

王大頭が駆けつけてくれたことに対し、“やはり大頭は十数年来の友人だ” (p225)とこれまでの態度を一変させた陳重だが、この言葉には一言もない。親友の李良をモノ扱いし利用したと大頭を非難してきたが、当の陳重も日頃は大頭を軽蔑しつつ、都合のよい時だけモノとして利用していることが、この言葉で露呈された格好になったからだ。

そもそも学生時代から、陳重と李良は王大頭を“レベルが低い” (p122)と見なしてきたことが小説中に描かれている。王大頭の成績や容貌に抜きこんでた所がなかったことに加え、人生に対しても飲み食いとセックスができればそれで満足だという即物的態度を一貫して貫き、理想主義的態度を見せない点も、軽蔑の対象となっていたように思われる。また大学卒業時には、手堅く実質的な実入りが期待できる職業だとの理由で、わざわざ現場の警察官という職業を選択し、肩書きこそ立派だが実際に利益が入るとは限らない行政管理職に見向きもしなかったことも、当時は“愚か” (p14)な選択だと二人から非難されていた。

しかし、『成都』においては王大頭のみが卒業後も順調な人生を送ってきたのであり、その事実“オマエの金儲けは俺たちよりずっと楽だよな。リスクもなければ、智慧を絞る必要もない” (p122)と、資産家の李良も羨望の言葉を向ける。王大頭のリスクがない儲け²³とは例えば、違反取り締まりの対象となる一般庶民に対して、公権力をバックに威張り散らしては商売道具を差し押さえ、時に見逃すことと引き替えに金品を要求するなど、庶民を金銭的「欲望」を満たすモノとして利用することを指すだろう。同時にまた、警察官である王大頭らが自身の違反を取り締まるということも、基本的にありえない。

利用する者とされる者、支配する者とされる者のヒエラルキー関係は、これまで状況に

²³ 2007年に『成都』を映画化するに際して、警察官である王大頭のダークな一面を描くこと等に対して、配給会社や映画管理当局などから難色を示されたという。「城市，今夜請将我遺忘——与導演謝鳴暉一起解讀《成都，今夜請将我遺忘》」(『世界電影之窗 | SCREEN』、2006年11月)等を参照のこと。

応じて入れ替わる可能性も残していたが、公権力を行使する立場にある者とそうでない者との関係は固定されており、ほとんど身分と言ってよいかもしれない。換言すれば、公権力を有する体制側は常に民間を利用する側にまわり、必ず利益を手にするよう、構造化されていると言えるだろう。社会的ヒエラルキーの上下関係の中で、上位が「欲望」を恣にして下位をモノとして「虚無」化し、徹底的に利用して痛めつける。痛めつけられた下位はその恨みを更なる下位に向け、己の小さな「欲望」の餌食とする。『成都』に描かれる「欲望」が興味深いのは、社会のヒエラルキーに個々の「欲望」が構造化されている現実を、赤裸々に露呈させているからに他ならない。

小説ラストでついに陳重自身が、下位をモノとして「虚無」に突き落とす暴力的「欲望」の餌食にされる。クリスマスイブの夜、陳重は偶然、かねて憧れていたスワッピングクラブの主催者と同席で飲むことになる。この男から王大頭のことを聞かれ、“途端に大胆な気持ち”になり、陳重は大頭との個人的関係を饒舌に語り出す。平素は警察官という職業を蛇蝎の如く嫌いながら、陳重はここでも大頭との関係が利用できそうだと計算するや、散々にそのことを吹聴し、旨い話に預かろうと張り切る。飲み明かしてから、男に“ウチへお連れしたい”(p243)と切り出され、自腹では行けそうもない高級クラブでの快楽を想像した陳重は、「欲望」を刺激され喜び勇んでついていく。

俺は目を輝かせ、妻同伴でなくてもいいのかと尋ねた。男は笑って、他の方はもちろんダメですが、あなたは王林〔＝王大頭〕のご友人ですから。俺はひどく誇らしく、内心、王大頭の輝かしいイメージを思い起こした。(p243)

自分がモノとして利用されるのは我慢ならないが、自分が利用するのは構わない。この極めてご都合主義的基準によって、王大頭のイメージは“国章をつけた禽獣”(p183)から“輝かしい”親友へと両極端に分裂していく。

しかし、この男が陳重を誘惑した目的は、王大頭への敬意を表するためではない。3ヶ月前、王大頭ら警察にスワッピングクラブを封鎖された上、30万円を下らない資産を押収された恨みを、公権力に守られた王大頭本人ではなく、代償としてその親友に向けて晴らすためである。社会的上位から「虚無」化された内心の恨みは、自分より下位に向けてぶつける、という『成都』のパターンはここでも忠実に繰り返されているのが見て取れよう。小説ラストは、人気のない草むらで男達から集団リンチを受け瀕死の重傷を負った陳重が、イブの鐘の音を背景に、歓びに沸き立つ成都の賑わいとのコントラストが示される中、ひっそりと息をひきとることが暗示されている。

このラストの場面に限らず、『成都』では小説全篇を通じて成都の賑わいの描写が繰り返して現れており、いずれも“墓場”に喩えられている。「欲望」を満たす快楽に湧く成都の賑わいの裏では、互いをモノとして利用しあい、時として相手を「虚無」へと突き落とす暴力が渦巻く。そして自分もまた、いつ「虚無」へ突き落とされるか分からない恐怖の現実がつきまとい、人々は「欲望」で己を騙しつつ、目の前の恐怖から必死に目を閉じている。誰もがいつかは確実に「虚無」、すなわち“墓場”へと向かう逃れられない道行きを、『成都』は同時代中国像として描いたと言えるだろう。

李修文『泣きぼくろ』に見る 村上春樹受容の一端

——SMをめぐる綺想——

高屋 亜 希

1. はじめに

李修文の長編ラブロマンス『泣きぼくろ』¹は、村上春樹に酷似しているという出版社の宣伝文句の効果も相まってか、出版部数は10万部を超えた²とされる。小説はテレビドラマ化され、『泣きぼくろ』をシリーズ化した次作『縛れて天国へ』も好調に売り上げをのばし³、加えて台湾でも作品が出版される⁴等、李修文はこの小説によって、人気作家としての地位を一気に固めたと言えよう。

『泣きぼくろ』は日本を舞台にした⁵若い中国人男女の悲恋を描いたラブロマンスで、女の死後に二人の関係を男が回想するという形式で書かれている。日本に留学中の「僕」は友人達の噂話から、扣子という名の中国人売春婦に興味を抱く。やがて実際に知り合った

¹ 『滴泪痣』（中国青年出版社、2002年4月）。

² 姜小玲「把心情講給遠方的朋友聽——訪青年作家李修文」（『解放日報』、2003年6月30日）等による。

³ 『細綁上天堂』（中国人民文学出版社、2003年1月）。第2作では村上春樹に酷似との宣伝文句が消えるが、「愛と死のシリーズ3部作」第2作と位置づけることで、第1作『泣きぼくろ』の延長線上にあることを読み手に印象付けようとしている。なお第3作は本稿執筆時点で未刊である。

⁴ 第1作は大塊文化出版社より2003年12月に、第2作は寶瓶文化出版社より2003年7月に刊行された。台湾でも村上春樹に酷似という宣伝文句を謳ったが、期待されたほどの強い反響ではなかった模様である。

⁵ 小説中は誤った日本情報が散見され、日本の読み手にとってのリアリティが損なわれている。例えば池袋付近の競馬場の名称が「高田馬場」であったり、援助交際を持ちかける女生徒が「何か援助は要りますか？」と話しかけたり、歌舞伎町のラブホテル（原文は汽車旅館）がバスを改造したものであるという設定等、枚挙にいとまがない。なお李修文は大学在学中、1年ほど日本に滞在した経験があると自ら語っているが、真偽は不明である。

扣子に、「僕」は強く引きつけられる。扣子は不法滞在で、多額の借金を抱え、中国マフィアからも追われる身の上でありながら、ふてぶてしく生き抜いてきた女である。こうした面倒な身の上を承知の上で、「僕」は扣子と同棲を始める。互いに愛し合う幸せな日々の中でも、扣子は自分の不幸な身の上ゆえに、その幸福が未来永劫続くものであると信じることができず、自殺など自虐行為を繰り返す。危うさを抱えた二人の関係は、扣子が妊娠することで転機を迎える。生まれてくる子供の両親として、「僕」との間に永続的で確かな家族という関係を築くことができる、と扣子は安らぎを覚える。しかしその平安もつかの間、事故で流産した扣子は、「僕」との関係に未来を信じることができなくなり、再び自虐行為がエスカレートしていく。「僕」を愛しながらも、幸せな二人の関係への確信を持たない扣子は、「僕」に別れを告げて去っていく。約半年後、扣子が事故で死んだことを「僕」は知る。これが小説の梗概である。

宣伝文句にある村上春樹を想起させる要素は、実際にはほとんど認められない。あえて言うならば、筋立てに若干の類似が認められる程度である。村上春樹の『ノルウェイの森』では、主人公の「僕」が自殺した親友キズキの恋人であった直子と再会し、成り行きから性的関係を持つが、直子が処女であり、かつその初体験以降は性的交渉を一切持とうとしなかったことから、その背景にある直子のトラウマに「僕」も関係者の一人として責任を感じる立場に置かれ、直子のトラウマが癒えることを待ち続けるものの結局、直子は自殺を遂げるという筋立てである。『泣きぼくろ』は物理的な面倒事を背負った女として扣子を設定することで、「僕」が直子に感じる倫理的責任感の部分を取り除き、そうした女に捧げる男の無償の愛情が挫折に終わる物語として、『ノルウェイの森』を読み替えているとも言えよう。だがこの読み替えは、単に『泣きぼくろ』という1篇の小説に止まらない問題を抱えている。

『ノルウェイの森』の訳者でもある林少華は『泣きぼくろ』に序を寄せ、この小説が“涙腺を刺激するラブロマンスと主人公の悲劇的性格には、明らかに日本のアイドルドラマと小説に見られる、一途に自ら溺れていく愛情の要素と典型的シーンがミックスされている”と要約し、その日本の小説の具体例として『ノルウェイの森』、そして小説中にも言及がある谷崎潤一郎の『春琴抄』を挙げている。悲劇的な結末を意識しながらも“自ら溺れていく”物語⁶は、『ノルウェイの森』の読み替えとしてではなく、『ノルウェイの森』そのもの

⁶ 原文は追求沈淪。中国の村上ファンブック、蘇静・江江編著『嗨,村上春樹』(朝華出版社、2005年8月)も林少華の要約と類似している。親友キズキの死によって孤独な境遇になった「僕」と直子が互いの温もりを求め愛し合うが、直子是最愛のキズキの死から立ち直れず、直子が立ち直るのを待ち望んでいた「僕」が結局徒労に終わる物語と要約した上で、村上の特徴として全身傷跡を抱え救済を待っている女性が多く登場し、主人公が運命で定められているかのよう

の要約として、林少華は語っている⁷のではないだろうか？しかもそれは、日本の小説やドラマに見られる現代日本の典型的物語イメージとして語られていることは、注意を要するだろう。

著者の李修文自身は村上春樹からの影響について否定的見解を繰り返し表明し、『泣きぼくろ』と『ノルウェイの森』との類似点はほとんどないと語っている⁸。村上春樹に酷似という評価はたぶん出版社サイドの宣伝によるメディアの影響と言えるのは確かであるが、『泣きぼくろ』が商業的に大きな成功をおさめたこと自体、多くの読者が宣伝文句に謳われる物語として消費した可能性があるのではないか。本稿では、『泣きぼくろ』における村上春樹の影響を検証するのではなく、『泣きぼくろ』の分析を通して中国における村上春樹の読まれ方の一端、更には中国から見た現代日本の物語イメージについて考察したい⁹。

2. 世界への拒絶

主人公の「僕」は実の両親を知らない上、唯一の身寄りである養父も「僕」が戯曲学校を卒業する直前に急逝し、天涯孤独の境遇である。養父の死によって十分すぎる程の遺産を受け取った「僕」は、小劇団への就職が決まっていたにも関わらず、さしたる動機もないまま日本への留学を決める。しかし実際に日本にきた途端、「僕」は日本語を学習する意欲を失い、代わりに小説を書きたいという欲望を募らせるようになる。こうした一貫性を欠く「僕」の人生選択のあり方は、書き手が意図的に造形したものであると思われる。扣子との同棲後、もともと動機と意欲を欠いていた日本語学校にほとんど行かなくなった「僕」は、今後どうすべきかと答えの出ない自問を繰り返す。

にこの女性を永遠に失うと指摘した上で、悲劇に終わる『眠れる森の美女』型の物語と纏めている。

⁷ 林少華訳の特徴や問題点については、園山延枝「中国に於ける村上春樹「受容」——翻訳者・林少華の評価を中心とした考察」（『野草』76号、中国文芸研究会、2005年8月）に指摘がある。他、藤井省三「開往中国的村上慢船——村上春樹在中国以及中国在村上文学」（『東亜文化与中国文学』〈東亜現代中文文学国際学報〉第2期香港号、明報出版社、2006年2月）、および『村上春樹のなかの中国』（朝日選書、2007年7月）にも、誤訳など林少華訳の問題点について指摘がある。

⁸ 注（2）前掲記事の他にも、李修文自身はこうしたレッテルへ否定的な見解を繰り返し表明している。

⁹ 中国における村上春樹受容に関する日本での先行研究としては、注（7）前掲論文の他に、藤井省三「村上春樹と東アジア——都市現代化のメルクマールとしての文学」（『東京大学文学部中国語中国文学研究室紀要』5号、2002年月）・「ポスト鄧小平時代の文学における“絶対村上”と“反日”の情念」（『すばる』27巻8号、集英社、2005年8月）等があり、1990年代中国の経済成長と都市化が村上春樹受容を支える基盤になっていると論じている。またこうした論点は、注7前掲の『村上春樹のなかの中国』でも繰り返されている。

“いったいどうするつもりなんだ？”(中略) 僕も自分自身にこうした質問を投げかけてみることである。だが僕のような人間は永遠に自問自答できっこないのだ。他人の言う“理性”という二文字が、僕には全く影も形も見当たらないときている。(中略) こんなときまって、創作したいという願望が強烈に起こってきて、こんなことを考える。もしも一生こんなやり方、つまり読書したり、創作したり、音楽を聴いたりして過ごしていられたら、どんなにか素敵だろう。(p86)

創作したいという「僕」の唐突な欲望が、未来に向けて自分は今何をなすべきか、という自問からの逃避として現れることは注意を要するだろう。就職によって現実的な未来と向き合うことから逃避すべく日本に留学し、日本で学歴を得てステップアップの足がかりを探すことから逃避すべく小説家を夢想する。そもそも創作へ興味があるからこそ、普通高校進学を望んでいた養父の期待を裏切ってまで、戯曲学校のシナリオ科に入ることを選んだにも関わらず、在学中は創作への意欲が徐々に萎えていったと回想しているのだから、「僕」が未来に向けて自分の人生を選択するという行為を回避するために、逃避的行為を一貫して選択し続けている¹⁰ことは明瞭であろう。従って来日後に再び強くなった創作への欲望も、是が非でも実現したい未来として「僕」自身に意識されることはあり得ない。事実、ふとした機会に扣子に創作への欲望を何気なく口にするものの、“作家になりたいの？”と意志を確認されると、“そうとは言い切れないな。ただすごく書きたいんだ。”(p80)と、意志とまでは言えないと打ち消し、更には欲望そのものも立ち消えていくに任せる。

こうした「僕」のモラトリアムは、養父の潤沢な遺産によって可能になっているのだが、小説中盤において遺産の全てを扣子の借金返済にあてた「僕」が、マフィア等に迫られながら自活の手だてを探るようになる以前、こうした条件が「僕」によって意識されることはなく、無一文の苦労がしみついた扣子との生活観の違いとして、時折現れる程度である。「僕」自身はこの経済的条件を所与のものとして受け止めており、己の現実への逃避的態度を、自分をしばしば襲う“虚無感”¹¹ (p80) のせいだとしている。それでは、「僕」が

¹⁰ 中国エリート層の若者たちが自分像を模索する、といった青春期のモラトリアムを謳歌するようになったのは、「70 后」と呼ばれる 1970 年代生まれの一部の若者たちが最初である。そうした一部の実践が中国社会で広くリアリティを持つようになるのは 1990 年代末のことであり、いわゆる「80 后」と呼ばれる 1980 年代生まれの若者による“青春小説”・“学園小説”ブームの社会的背景ともなっているだろう。

¹¹ “虚無感”は 1990 年代末以降の“青春小説”において重要なテーマの一つとなっている。その意味するところは世代や個々の作家によっても異なり、今後、分析を積み重ねる必要があるだろう。拙稿「孫睿“青春三部作”に見る「虚無」の位置づけ——〈存在の耐えられない軽さ〉への抗い」(『中国文学研究』第 32 期、早稲田大学中国文学会、2006 年 12 月)および「慕容雪村『成都よ、今夜は俺を忘れてくれ』試論——「欲望」と「虚無」のリアリズム」(『中国文学研究』第 33 期、早稲田大学中国文学会、2007 年 12 月)も併せて参照されたい。

自分の欲望を主体的に選択することへの逃避として現れるのが『泣きぼくろ』の虚無感だとすれば、「僕」はどこへ向けて逃避しようとしているのだろうか。

扣子と同棲する以前、歌舞伎町のどこかのヌードクラブで働く彼女の姿を求めて新宿をさまよい歩く「僕」は、見知らぬ少女から声をかけられて、ラブホテルで“援助交際”(p65)に及ぶが、いざ行為をしようというその瞬間、唐突に虚無に襲われる。

僕は突然、虚無に襲われた。(中略)僕は全身の力をこめて彼女の中へと入っていきながら、岸に跳び上がった魚のように虚無的な喘ぎ声をもらした。僕は目を瞑って虚無から逃れようとした。目を瞑ると脳裏には奇妙にもこんなシーンが浮かんだ。あたり一面漆黒の闇の荒野を、幼い僕が素っ裸で駆けていく。(中略)自分がどこに行きたいのか分からず、ただ前に進まなければならないということしか分からない。(中略)果てしない荒野には、疾走する僕一人しか存在していなかった。こんなふうに、僕は汗を垂らして誰かの体の中へと入っていきながらも、世界中に自分一人しかいないような感覚に襲われていた。(p67)

成り行きに任せてラブホテルの一室に来るところまでは、経験のある少女の方が若干主導権を握っていたと言えるかも知れない。しかしセックスに及ぶ瞬間、即ち男として性的な能動性を行使しようというその時に虚無が訪れ、途端に目の前に全裸で横たわる少女の姿が「僕」の視界から消え、脳裏に幼い孤独な自分のイメージが浮かぶことは、明らかに「僕」が行きずりの少女を買春するという現実、自身の性的欲望から目をそらし、自分の行為についての主体性を不問にする作用を果たしている。ここでもまた「僕」は虚無を理由に、自分の欲望を主体的に選択することから逃避し、モラトリウムを続けているのである。

一人きりの幼い自分のイメージは恐らく、両親がいなかった「僕」の子供時代の原風景であろう。これが興味深いのは、次に何をすべきか、どこに向かうべきか、と自分を導いてくれる両親を期待しながら、ついにその期待が叶うこともないまま成長した「僕」が、今もなお“どこに行きたいのか分から”ない幼い子供のままでいたいという欲望を顕わにし、自分自身で直接に世界と向き合い関わることを頑なに拒絶している点である。このような「僕」の胎内回帰願望は、小説にしばしば顕在化する。例えば夜中の散歩中に感興の赴くまま、池の水に跳び込んだ「僕」がそこからかつてない安心感を覚える場面は、その典型的現れと言えよう。

目を瞑ると、かつてないほど心が落ち着いた。(中略) まだ生まれぬ胎児が、母親の子宮の中でものすごい速さで発育している、まるでそんな感じだ。(中略) 僕は確かに泣いていた。全く何の理由もなく、泣きたいから泣いた。それだけだった。(p44)

水中は母親の子宮に見たてられ、子宮に守られた「僕」はただ一人で世界と対峙し、己の行為を選択していくことの緊張から解放される。「僕」が涙を流す理由は、喩えてみれば心細い思いをした子供が母親を見た途端に安心して泣き出すようなもの、と想像されよう。実のところ、「僕」が扣子という女に見出し求めたのは、まさにこのような自分の替わりに世界と対峙し、行くべき進路を決めてくれる、母親の役割を担ってくれる点であったと思われる。苦労をなめてきた扣子の流暢な日本語や交渉能力、そして気の強さ。物事を自分で決めて「僕」に母親のように指図する扣子を眺めながら、「僕」は“会ったことのない僕の母親のように成熟している”(p87)と形容する。

更には数ヶ月の同棲を経て、二人が初めて肉体関係を持つ場面はより象徴的である。ここでも二人は戯れて水に飛び込むのだが、水にもぐった途端、「僕」はまたしても“母親の子宮の中”(p109)に回帰したかのような錯覚から目を潤ませる。そして“僕は扣子を見つけては。僕の小さな母親を”(p109)と、同じく水中にもぐっている扣子に意識を転換させるのだが、母親の代替として扣子をとらえていることは明瞭だろう。世界と対峙することを拒絶し、母の胎内に戻って庇護されながら、間接的に世界との繋がりを見出したいと願う「僕」。その願望を満たしてくれる存在こそが、扣子であったと言えよう¹²。では「僕」との関係によって扣子には何がもたらされたのだろうか。

3. 世界からの孤立

最初に愛情を意識したのは「僕」である。「僕」は同棲することをさり気なく切り出し愛情を告白する。同棲という提案に対して、扣子が先ず意識するのが愛情ではなく、きわめて現実的な経済上の問題であったのは興味深い。自分には部屋を借りるだけの金がないという扣子に、「僕」は自分が出すから問題ないと答える。金も払わないのに自分を同居させてくれる理由を扣子が訝り、“どうしてそんなふうにするの？あなたって変よ、本当に変”(p74)と言っていることから、彼女が「僕」の愛情に気付いていないのは勿論、「僕」に

¹²林少華は「村上春樹の文学世界と中国現代青年の精神構造」(和漢比較文学会・中日比較文学学会編『新世紀の日中文学関係——その回顧と展望』(勉誠出版、平成15年8月)において、村上春樹の主人公が「成長しない子供」のようであると、それが独りっ子世代で精神的に未成熟な、現代中国の若者に受容される要因の一つであると指摘している。独りっ子世代が注10で前述した「80后」と重なっていることは重要な点であろう。

対する愛情も格別意識しているわけではないことが伺えよう。愛情に気付かない扣子に、「僕」が婉曲な言い回しを止め、ストレートに愛しているからだと答え、思いがけない事態に一瞬呆然とした扣子は、外に飛び出して泣きじゃくる。「僕」に対して扣子はどのような感情を抱いていたのだろうか。

決まった自分の部屋を持たない扣子はこの数日前、病に伏せて身動きがとれなくなり、「僕」の部屋に転がり込んできたという設定になっている。扣子が「僕」の部屋を訪れたのはこれが2度目である。1度目もまた他に身を寄せる場所がなくなり、とりあえずの避難場所として訪れたもので、その時には「僕」から金をせびって挨拶もせずに出て行っている。更には扣子に同情を寄せる老夏と呼ばれる中国人に対しても同様の行為を繰り返していたことが、在日中国人コミュニティの噂話および扣子自身の回想で語られることから、この告白の時点で扣子が「僕」に好意を抱いていたとしても、それは積極的な愛情というものではなかったことが想像される。意地悪な言い方をするならば、扣子がしてきたことは相手の好意につけこんだ利用行為と言えなくもなく、利用されることに甘んじている「僕」の人のよさに彼女は好意を抱いていたのかもしれない。

つまり扣子にとっては生き抜くためのやむを得ない行為であるという事情はあるが、これまで相手から同情を引き出しては生き抜くための糧を手に入れる、という相手を一回的に利用し使い捨てるような生き方をしてきたのであり、相手との関係を未来に向けて継続させてこなかった点は注意を要する。例えば老夏のような人のよい相手は利用しやすかったため、結果的に関係が長く続いたに過ぎない。そう考えると、「僕」の提案は愛情という理由を掲げ、無償で糧を分かち合うことを意味していたことになるだろう。「僕」の告白が扣子にとって衝撃であったのは、無償の贈与が行われ続ける継続性のある人間関係、というこれまで自分のものとして想像し得なかった関係のあり方、生き方への新鮮な驚きがあったのかも知れない。

思いがけぬ「僕」の告白によって、扣子は恋人との穏やかで幸せな同棲生活を始める。しかしその愛情で満たされた二人だけの空間は、未来に向かって開かれることはない。小説中盤において、二人は借金の返済を迫るマフィアに見つかり、監禁されかけたところを何とか逃げ出す。そうした自分たちの境遇を、「僕」は再び世界から切り離された扣子と二人だけの空間を取り戻したいと一瞬願うものの、すぐさまその考えを“卑劣”(p232)であると打ち消す。

身を落ち着ける場所がもはやなくなってしまっても、一日また一日と生きていくしかない以上、それこそ扣子と同様、何事も起きなかったことにしていくほかある

まい。食うべき飯は食い、開くべき露天は開く。そうして生きていけば、本当に僕らが身を置ける一筋の割れ目が見つからないとも限らないだろう。(p232)

「僕」の視点から描かれる『泣きぼくろ』ではこの場面以前に、不法滞在に加えてマフィアからの借金を踏み倒して逃げ回る扣子の切迫した状況は、ほとんど表面には出てこないため、「僕」に強く意識されることはない。しかし扣子にとっては、これが来日以来ほぼずっと自身に課せられてきた生の条件であったことは意識しておく必要がある。僕が腹を据えるこの場面の後、果たして扣子もこうした状況を全く恐れていないことが二人の会話で明かされる。二人は生きることに忙しく怖いと思う暇もなかった一日を振り返って、明日もその次の日もずっとそのように生きていくことを互いに確認しあうが、こうした未来に向けて自己実現を図っていくという生き方とは対極的な、一瞬先の未来も意識しない現在しかないような生き方を、扣子のみならず「僕」までもが選択せざるを得なくなっていくのである。

『泣きぼくろ』では恋愛が進展するはるか以前から、二人がそもそも恐怖という外界からの負荷を楽しむメンタリティの持ち主であることが、冒頭より繰り返し強調されている。二人の共通の趣味がホラー映画であることもその一つであろう。また同じく小説冒頭で、扣子が“刺激的”(p36)と絶賛する日光江戸村に呼び出された「僕」は、予期せぬ仕掛けの連続でスリル満点の忍者屋敷に初めてということもあって肝を冷やすが、呼び出した扣子の方はリピーターで、スリルを味わうゲームにご満悦である。更には江戸村を後にした二人は、駅前で露天を開いているところをマフィアに見つかり袋だたきにされるものの、最後には何事もなかったかのように笑い飛ばしビールを飲みに行くというエピソードが続く、江戸村の仕掛けられたスリリングなゲームが扣子の境遇と相似形をなしていることに読み手は気付くであろう。そう考えると、ホラー映画、忍者屋敷という小道具は、扣子が自分と共に生きることの過酷な意味を「僕」に教え、「僕」がそれに耐えられるかどうかを測る試金石の役割を果たしているようにも読めてくる。

「僕」が恐怖と背中合わせの不自由な状況に耐えられるか、扣子は一貫して押し量っていたように思える。例えば同棲以降も数ヶ月に亘って性的関係に踏み出すことがなかった二人が、関係を進める重要な契機になったのは、ふざけた扣子が雪の降る新宿御苑のベンチに「僕」を手錠に繋いで自由を奪い、扣子が与えたその不自由な状況を「僕」が従容と受けとめることで、試練にパスしたことであった。

“君の奴隷になって、仰せのままにしようと思っているんだけど、どうかな？(中

略)” “あなたはここで奴隷になっていなさいな。ご主人さまは出かけて楽しんでくるから。”〔置き去りにされたベンチで眠っている間に扣子が体にかけてくれた〕新聞を開くと、口紅で書いた字が目に入った。“私の奴隷さん、そろそろ我慢できなくなったんじゃない。” 勿論、まだまだ我慢できるさ。僕はその口紅で書かれた字に向かって首を振り、くすつと笑って新聞を読み始めた。寒さが強まってきた。でも大丈夫、まだ我慢できる。(中略) 扣子がようやく戻ってきて、僕もようやく手が自由になった。(中略) “あなたのすごさを見せてもらったわね。降参よ。” 突然、彼女は泣き出した。泣きながら僕に言った。“私に一生繋がれているってあなた言ったわよね。忘れないでよ！” (p104～105)

「僕」が扣子に寄せる無償の献身的かつ犠牲的愛という『泣きぼくろ』のテーマに、SM的な関係¹³が重ねられていることに気付くだろう。世界に居場所を持たない不自由な生き方を相手に強いざるを得ない扣子が加虐の役割を担い、「僕」が愛情ゆえにその不自由さを引き受ける被虐の役割を担う、という意味での SM 的な関係。それは他にも例えば、扣子に話をせがまれた「僕」が彼女好みだろうと考えて語る話が、谷崎潤一郎の『春琴抄』等¹⁴であることから、『泣きぼくろ』が SM 的な関係は無償の犠牲愛に読み替えていることはほぼ確実と言える。

つまり『泣きぼくろ』は村上春樹の『ノルウェイの森』を、直子への愛情のために「僕」が自ら望んで被虐の役割を引き受ける物語として読み替え、更には谷崎、また恐らくは日本の SM アダルト映画を重ね合わせることによって、これを日本の愛情物語の典型としてとらえている可能性があるだろう。その結果として村上春樹と犠牲愛と SM と谷崎潤一郎といった、日本において接点を持ち得ないものが、『泣きぼくろ』では渾然一体となつて一つの物語を紡いでいる。無論それは、村上や谷崎そして SM の理解としては誤読とも言え

¹³ 本稿で言う SM 的な関係は、一般的な意味での SM の関係や思考様式とは異なっており、「SM 的」と称する所以である。紙幅の関係で本稿では論じることができなかったが、『泣きぼくろ』でも日本の SM アダルト映画への言及があり、かつ映画から想を得たと思われる設定が他にも認められる。現代中国において日本のアダルト映画の影響は非常に大きく、小説への影響も無視できないが、映画の多くは海賊版で流通しており、その影響・受容の全貌を知るのは困難である。ちなみに朱大可・張閔主編、高屋亜希・千田大介監訳『Chinese Culture Review——中国文化総覧』vol.2 (好文出版、2005 年 10 月) キーワード「同人志」(p280)には、“AV・女優・案内人・援助交際”など“肉欲的ニュアンス”を伴う日本語が現代中国語に輸入されているとの記述がある。またアダルト映画受容の一端を伺わせる事件が、千田大介「AV ポスター事件とインターネット社会」(『アジア遊学(特集現代中国のポピュラーカルチャー)』No.97、勉誠出版、2007 年 3 月)で紹介されている。

¹⁴ この場面では他にオペラ『蝶々夫人』への言及がある。『蝶々夫人』は別の登場人物の運命と重ねられていくが、紙幅の関係で言及しなかった。小説ではピンカートンが既婚でありながら、なお彼への愛情に準じる蝶々夫人の被虐の役割が読み込まれている。

ようが、『泣きぼくろ』ひいては中国において日本的な愛情関係、愛情ドラマがどのようにイメージされ、消費されているかを考える糸口となり得よう。

4. 世界からの拒絶

一瞬先の未来を期待し得ない関係を生きてきた扣子は、どれほど「僕」が愛情を繰り返して誓っても、すぐまたこの愛情を失うのではないかという恐怖をぬぐい去ることができない。「僕」が友人に誘われて飲みに出かけて帰宅が遅くなり、同棲以来初めて夜中に扣子を独りきりにさせた夜、扣子は衝動的に手首を切る。傷は浅く、帰宅した「僕」に介抱された扣子はすぐに落ち着きを取り戻し、数日後、自殺を図った心境を語る。

“あの晩、私が裁縫鉋で腕を切ったのは、別に周りのことが全てダメになってしまったとか、あなたがもう私に構ってくれなくなったと思ったわけではないの。ただ怖かっただけ。自分があそこに立ったまま、永遠に立ち止まり、もう動けなくなってしまったように怖かったの。全てが前へ進んでいくのに、私一人がそこに止まっている。そんな感覚。” (p155)

不法滞在に加え多額の借金を抱えて逃げ回る現在の境遇と、借金の形にマフィアから売春を強いられた過去の境遇と、相手に交際を尻込みさせる理由には事欠かない扣子にとって、「僕」との関係は自分自身どこか信じきれない部分が付きまとっていたのだろう。自分には恐怖と背中合わせの不自由な現在しか与えられない。その一方で「僕」には広い世界の中で自由に自己を実現していく可能性が与えられている。扣子が語る自殺の理由は、端的にこうした心境を物語っている。

「僕」の可能性を奪っているという自己卑下と、「僕」を失いたくないという願望が扣子の胸の内で葛藤を演じていることは、小説中の他の記述からも読み取れる。例えばこの自殺未遂事件のしばらく後、崑曲のシナリオ執筆を頼まれた「僕」がクライアントのいる北海道に扣子と共に行く列車の中で、扣子は実際に「僕」が物書きに一步近づき、いつの日か本当に小説家になって有名人になった時のことを想像し、一人中国に帰れる「僕」と帰れないまま日本に残される自分との境遇の差異を意識して落ち込み、衝動的に列車から飛び降りる。ここでも去っていく「僕」と残される自分が、扣子の中で対照的に意識されているのが伺える。

いずれ自分が強いる加虐に耐えきれなくなった「僕」が、この SM 的恋愛ゲームから降りるかもしれないという扣子の想像、或いは確信は小説全編に認められる。小説後半で関

係を続けることに限界を感じた扣子が、「僕」に愛想づかしをさせるために自分のことを売女等と罵らせることを強要し、「僕」の精神を消耗させる場面が延々続くが、これなどは明らかに扣子という存在が「僕」にかけている負荷の大きさをこれでもかと誇示することで、「僕」がこうした SM 的關係に音をあげるのを期待したものでしょう。

危うさを孕んだ二人の現在しかない関係は、扣子の妊娠によって未来への期待を覗かせ始める。

“もう 1 回言うけど、私はヌードクラブで働いていたことがあるし、デリヘルをしていたこともあるわ。つまり私は売女ってわけ。(中略)あなたを愛するようになって、自分があなたに相応しい女なのかどうか考えずにはいられない。でも私、考えているの。もしも私たちに子供ができて、子供があなたをお父さん、私をお母さんって呼ぶ。そうしたら私たちも、あなたが言うように互いをお父さん、お母さんって呼び合えるようになるし、もしかしたら私のこういう〔未来への期待を自分で踏みこむような〕感覚がなくなって、あっさり対等な関係になれたって思えるんじゃないかしら。違う？ そうしたらこの先、私もしっかり生きていけるでしょ。” (p208)

子供を産み育てるという決意をするには過酷な状況にある二人だが、期せずして共に出産を希望する。世界から拒絶され孤立した境遇にあるがゆえに、未来を期待できない刹那的で不安定な関係が、子供を間においた両親という関係、即ち生涯子供に対しては親であるという厳然とした事実によって、些かなりとも安定した継続的な関係になるのでは、と扣子が期待していることが伺える。実際これ以降、扣子の不安定な精神による衝動は抑えられ、二人の間からは緊張が消える。このもう少し後、マフィアと日本の警察、および入国管理局に居場所を突き止められ、同棲して愛情を育んだ表参道の部屋をひきはらわなくてはならないという悪化の一途を辿る状況の中ですら、こうした未来を信頼する扣子の精神状態は動揺することがない。新たな住处へと向かう途中で、扣子は子供が生まれたら、警察に出頭して必要な刑期を勤めてから、以後は合法的身分を取り戻して、「僕」と子供のもとに帰ってくるというアイディアを持ちかける。笑顔を浮かべた屈託のない話し方からも、自分が刑務所に入るであろう 1 年ちょっとの不在を「僕」が子供と一緒に待ってくれ、自分一人だけを置き去りにしないだろうという信頼が覗いており、実に興味深い。

こうした扣子の幸せな日々が急転降下するのは、お腹の子供を事故で流産してしまったからである。また子供が授かるだろうし、自分も扣子一人を置き去りにしては何処にも行かない、と「僕」がどれほど誓ってみせても、未来を信じていくという扣子の気力は既に

損なわれ元に戻ることはない。扣子は再び、全てがもともと挫折に終わることを運命づけられていたのだから、これまでに払った努力は無駄であり、これ以上の努力は無意味である、という運命論的な世界観に戻っていく。

“また〔子供が〕できるだろうですって？”彼女は自分の目元を指しながら言った。“見えたでしょ？これは泣きぼくろ。泣きぼくろ、分かる？つまり悪運の運命にあるのよ。私、そしてあなたも悪運なの！（中略）よくなりっこないわ。（中略）だって私は結局、こんな生活に分不相応だったのよ。”（p277）

そもそも『泣きぼくろ』は、小説全編を通して運命論的な世界観に支配されている¹⁵。二人が最初に出会った時点で、扣子は「僕」にも泣きぼくろがあるのを見とがめ、悪運を意味する泣きぼくろを持つ人間同士が一緒になってもよい結果などない、と初めから「僕」との関係を進めることに消極的である。実際に交際したものの、流産という決定的な悪運に襲われたこの場面において、その運命論は扣子にとって疑いのない確かな真実となり、確信されていたことが想像されよう。また興味深いことに、小説中において扣子は幾つもの占いや心理テストに強い関心を抱き、多くの物事の判断にあたってそれらを頼っていることが書かれている。

世界と向き合うことを恐れ、人生を巡る様々な決定から逃避している「僕」とは対照的に、扣子は豊富な現実経験に基づいて自身の運命を一人で決定し行動しているかのように見える。しかし決定を要する問題が彼女の想像し得ない未来、例えば「僕」との関係を今後どう進めるか、お腹の子供を産むか中絶するか等といった問題になった途端、扣子は判断力を失い占いにその決定を委ねる。不確定の未来の人生については、誰一人決定の主体たりえていない『泣きぼくろ』は、悲劇的挫折に終わると予言され確かにその予言の通りになった運命論的な物語なのであり、それによっても「僕」の扣子に対する運命に抗うかのような愛情の、犠牲的かつ献身的な被虐の意味合いは強調されているのである。

運命の歯車は止まらず、扣子は転落していく。流産の折にかかったもぐりの病院が、不純物が混じった薬を注射したことがもとでは扣子は聴覚を失う。扣子は「僕」との関係を実現させるのはそもそも無理があったのだと、愛想づかしのため自分が「僕」にかけてい

¹⁵ 焦紅濤は「在愛情文本的背后——論《滴泪痣》」（『湖南省政治管理幹部学院学报』18卷2期、2002年12月）において、扣子の自虐行為を運命論の現れと解釈している。同論文が扣子の自虐と被虐を同列に論じている点は、自虐を加虐に位置づける本稿の立場とは相容れず首肯できないが、小説の運命的世界観を無常観に支えられた日本の美学と結びつけて論じている点は、著者がどのような日本像をイメージしているかが伺え、それ自体興味深い。

る負荷の重さを自覚させ、その重さに耐え難くなった「僕」が音を上げることを期待する。こうした扣子の加虐性がこれまでの偶発的なものから日常的なものへ変化し、日増しにエスカレートしていく。

それに対して「僕」は扣子と別れることを拒絶し、必死にその被虐の役割を全うしようとする。扣子と同じ違法滞在者になって共に転落していく決意を見せるため、「僕」が自分のパスポートを彼女の目の前で破る行為こそは、「僕」が大きな犠牲を払うことによって扣子への強い愛情を表現するものであり、二人の SM 的關係が最も強度を帯びる瞬間であるだろう。結局、「僕」は最後まで扣子という加虐性に耐え続け、試練を乗り越えた「僕」の揺るぎない愛情という意味が残される。この意味を受け取り胸におさめた扣子が、最後に肉体でその愛情を確かめるように激しいセックスをした直後、静かに「僕」の元を去る。

小説は一人になった「僕」の元に扣子からと覚しき無言電話がかかってくることや、扣子が新宿で事故死して「僕」が遺骨の引き取り手になったこと等、別れたその後についてかなりの紙幅がさかれているが、ラブロマンスとしての力学は扣子が家を出た時点で使い果たされていると言えよう。

5. おわりに

小説の最後、扣子の遺骨を東京のしかるべき場所に葬った「僕」は、もはやこの世にいない扣子に一人呼びかける。

僕の心は君と一緒に砂埃に覆われたりはしない。僕のこの肉体と共にある。知っているよ。これこそまさに君が僕に繰り返したかったことだったよね。(中略)どこにいたって、ある時期がきたら、必ず君に会いに東京に来るから。こうやって僕と東京、僕と周囲の世界にも関係ができたと言えるだろう。(p355)

虚無を理由にあれほど世界と向き合うことを拒絶してきた「僕」が、扣子の死を経て一変している。ここに至って読み手はこの『泣きぼくろ』というラブロマンスが、「僕」のビルドゥングスロマンという枠で囲まれていたことに気付く¹⁶ことだろう。その意味で、扣

¹⁶海力洪「充盈之美——読李修文長編小説《滴泪痣》」(『南方文壇』、2002年3月)でも、『泣きぼくろ』が“ビルドゥングスロマン”(原文は成長小説)であると指摘されている。海力洪は更に『ノルウェイの森』も同じく“ビルドゥングスロマン”である点が『泣きぼくろ』と似ているとした上で、後者の主人公の方がより過酷な環境に置かれており、リアリティが勝っていると評価している。『ノルウェイの森』という小説にビルドゥングスロマンの要素が全くないわけではないが、日本においてはそうした位置づけは必ずしも一般的なものとは言えないだろう。村上春樹が中国において、例えば「80后」などの“青春小説”・“学園小説”と同じ枠組みで読まれている可能性は、注意する必要がある。

子と永遠に別れる直前のセックスの最中、またしても「僕」は扣子を自分の母親に重ね合わせ、母の胎内に自分が戻ることができるならば、二人が別れることもないのという感慨を覚えながら、彼女と肉体を交えているのは非常に示唆的である。扣子との別れという体験は、「僕」によって母との別れに重ねられ、この結末部分での母から独立する決意へと繋がっているものと思われる。その時、二人が築いた犠牲愛という SM 的關係は、「僕」が成長し独り立ちするための試練として意味付けられ、恋愛の悲劇性は薄められていると言えよう。

結局、『泣きぼくろ』という小説は、扣子という女を通じて様々な試練を与えられた「僕」が、試練を乗り越えモラトリアムを卒業する物語を枠組みとしており、そのモラトリアム期の表現に村上春樹『ノルウェイの森』等、日本の小説やアダルト映画が参照されていると言えるだろう。中国の村上春樹受容については、『泣きぼくろ』がそうであるように、若者のモラトリアムや自己実現というテーマがクローズアップされる 1990 年代後半以降の中国社会の文脈に大きく影響を受けている可能性があり、今後さらに検討を続けていきたい。

孫睿 “青春三部作” に見る 「虚無」の位置づけ

——〈存在の耐えられない軽さ〉への抗い——

高屋亜希

1. はじめに

中国文学批評界では2004年、80年代世代作家のメランコリックな作風が話題になった。人生・社会に対して積極的態度ではなく、感傷的で絶望的な態度で関わる青春像を描いた作品が目立つ、というのが曹文軒らの発言の趣旨であった¹が、これは広く同時代の青春小説を考える上で大事な論点と言えよう。というのも、人生・社会に対して積極的に取り組むことが無意味だという「虚無」感²が、中国同時代を彩る精神的なトレンドとして、様々な青春小説において繰り返し描かれているのは事実だからである。

例えば“村上春樹に酷似”を謳い文句に、2001年に話題となった李修文の長編小説『滴泪痣』³では、「虚無」感が主人公の意識を規定するものとして描かれている。小説では主人公が何かを夢見て人生の選択をしようとする瞬間、決まって「虚無」感に襲われて夢を実現したいという意志が消え失せ、その結果、モラトリアムを続けるという設定になっている。その一方、主人公はなぜ「虚無」感に支配されるのかという点について、早くに両

¹ 80年代世代作家が2004年に文学批評の視野に浮上し、多くのシンポジウム等で議論の対象にされたとの記述が、朱大可・張閔主編、高屋亜希・千田大介監訳『Chinese Culture Review——中国文化総覧』vol.3（好文出版、2006年7月）p28に見られる。曹文軒らの発言は同年11月22日、中国現代文学研究会・北京語言文化大学共催“走近‘80后’研讨会”席上のもので、メランコリック創作の原文は“秋意写作”。なお出版ビジネス界から見ると、これら80年代作家による青春小説のブームは2004年頃には頭打ちの状況が見えてきた、と意識されている。

² 「虚無」は本稿の分析概念として用いており、それに相当する原文は「虚無」以外にも、「空虚」「虚度光陰」など複数の語が使われているが、文脈に支障がない限りは全て「虚無」に用語を統一した。

³ 『滴泪痣』（中国青年出版社、2002年4月）。李修文は1975年生まれ。また同小説については拙稿「李修文『泣きぼくろ』に見る村上春樹受容の一端——SMをめぐる綺想」（早稲田大学中国文学会『中国文学研究』第31期、2005年12月）を参照されたい。

親を亡くした生い立ちが反動となり、いつまでも両親に庇護された子供のままでいたい、という主人公のモラトリアム願望を理由にあげている。つまり同小説において「虚無」はモラトリアムの原因であると同時に、その結果でもあるというトートロジーの如き位置づけと言えよう。従って「虚無」と青春期のモラトリアムを結びつけようとする書き手の意図は理解されるものの、両者が具体的にどのような関係にあるのかという点は勿論、同時代小説に広く共通する「虚無」感との関係についても答えを見つけるのは困難である。これは『滴泪痣』の欠陥と呼べようが、逆に言えば同時代中国において若者が人生・社会に対し、「虚無」的態度で向き合うことが自明視されているために、書き手が読み手に対してその設定について贅言する必要性を感じなかった結果とは考えられないだろうか？

本稿では中国青春小説における精神的トレンド、即ち「虚無」が具体的にどういう状況を指すのか、同時代社会においていかなる意味を持つのか等の問題を考察するが、考察に際しては紙幅の関係上、主として 2004 年に話題を呼んだ孫睿⁴の長編処女作『草様年華』を分析対象とし、必要に応じてその第 2 作『活不明白』と第 3 作『草様年華Ⅱ』、いわゆる青春三部作⁵を扱う。『草様年華』は主人公である北京の大学生が自身の些か情けない学生生活を戯画化したもので、第 2 作は卒業後も就職先が見つからない失業生活が、第 3 作では会社をクビになり大学院を目指す受験生活が描かれている⁶。いずれも主人公は自嘲的な視点から描かれており、主人公を襲う「虚無」感についても戯画的に対象化されているため、この問題を考える格好の例を提供してくれると考えられるからである。もとより数篇の小説で同時代小説における「虚無」表現の全てをカバーしうるわけではないが、議論のプラットフォームを構築する作業の一環と理解されたい。

2. 存在価値の「虚無」化

『草様年華』は北京師範大学がモデルと思しき北 X 大を舞台に、趣味の音楽と恋愛には

⁴ 孫睿は 1980 年生まれ。1997 年に北京師範大学に入学、2002 年卒業。『草様年華——北 X 大の故事』（遠方出版社、2004 年 1 月）「編者前言」には、2001 年にネット上で発表された同作が支持を集め、翌 2002 年にサイナネットの編集者の目にとまり、同サイトに連載され更に多くの読者を獲得、加えて 2003 年にフランクフルト・ブックフェアで海外出版社から翻訳出版のオファーが多数舞い込んだと報道されたことから、中国メディア注目の的となり、出版の運びとなった等の経緯が書かれている。但し海外で高い評価を得たとの報道は実際に翻訳された形跡がなく、著者・出版サイドが虚実入り交じった誇大宣伝でブームをしかけた可能性もあろう。

⁵ 第 1 作出版後、第 2 作『活不明白』（雲南人民出版社、2004 年 8 月）、第 3 作『草様年華Ⅱ——後大学時代』（長江文芸出版社、2005 年 9 月）の青春三部作を刊行。第 3 作は第 1 作の登場人物をそのまま使った続作だが、第 2 作は内容的に独立している。また他に短編小説集『朝三暮四』（北京出版社、2006 年 6 月）が出版されている。

⁶ 1999 年以降、大学生募集枠の急激な拡大が行われることで、大学生の社会的価値が急速に低落したが、孫睿が募集枠拡大以前の 1997 年に入学を果たし、大学卒の価値が下がった 2002 年に卒業しているのは、孫睿の小説を考える上で重要であろう。

熱心に取り組むものの、本業の勉学では全くその内容に興味を持てず、いかに努力せずに単位をとって卒業するか腐心する邱飛と、それを取り巻く悪友らの青春像をシニカルな筆致で描いている。小説結末部分で邱飛は卒業を目前に控えながら就職が決まらず、恋人にも度重なる浮気に愛想をつかされ捨てられてしまう。エリート予備軍の一員であるにも関わらず、望むような社会的ポジションが存在しないという現実を突きつけられ、不本意ながらも就職して青春の終わりを実感するという内容である。

それでは大学時代を通じて、邱飛は具体的に何をを目指していたのだろうか？小説は大学合格した時点から始まるが、そもそも合格した北 X 大機械科は自分の意志で選択した学科ではなく、当時付き合っていた彼女が邱飛に無断で願書を書きかえていた、という設定になっている。もっとも邱飛自身が記入していた志望も、どこでも大学に入れさえすればよいという観点から、超不人気学科を取って選択していたとも明かされているので、元より邱飛が具体的目標を持っていたわけではないことが伺えよう。

大学で新しい彼女を見つけること以外、具体的目標や気力を欠いた大学生活で邱飛を最も悩ますのは学期末毎の試験である。どこから手をつけてよいかも分からない状態に邱飛は茫然とするが、悪友と対策を講じた結果、仮病を使って2科目を追試にまわして他の科目に全力を注ぐことに決め、その判断の根拠を正当化する。

どの授業担当者も分厚い教科書を5ヶ月で解説し終えるが、その講義内容は最終的に100点の期末試験答案、薄っぺらな数枚の答案用紙に落ち着くに過ぎない。従って一冊を丸々理解する必要はなく、100点中60点だけマスターしていればよいということになり、即ちエッセンスを取って不要部分を捨てるのである。いったい何をエッセンスとするのか。その答えは過去問の中でいとも簡単に見つけられる。(中略) 先生方は住居の分配や職階の評定など切実なことには積極的態度を見せるものの、試験問題を出すことについては使い回し主義、即ち過去問を今年もう一度使う方法を採用している。(中略) 従って過去問さえ一つ一つ理解していれば、すんなり試験に通ることができるというわけだ。(p89)

講義の理解度は試験によって測られる。であるならば、と邱飛は講義を聴き理解するという過程をとばし、試験結果のみを問題にして論理を転倒させている。邱飛は試験問題こそが半年に及ぶ講義全体のエッセンスなのだとうそぶき、事前に試験問題を入手しそれをマスターするためにエネルギーを注ぐだけで十分であるとしている。無論、邱飛は本気でこれが正攻法だと信じているわけではなく、過去問をそのまま使い回す教師の怠惰を皮

肉っていることから、邱飛も自身の論理が屁理屈であることを十分承知していると言えよう。この屁理屈の後、追試にまわすことに決めた例の2科目は、過去問を入手して調べた結果、問題が年毎に異なっていることが判明し、講義全部を理解するという正攻法しか対処の仕様がないうという記述が続くに至って、正攻法では歯がたたない邱飛の劣等生ぶり⁷が読者にも明らかにされている。また追試にしてもらうため、仮病を使って本試験を欠席する許可証明を得ようと、悪友と悪戦苦闘する無様がユーモラスな筆致で延々と書き込まれており、果たして邱飛が主張するように、エッセンスのみを入手し理解する方法が正攻法より省エネルギーな攻略法と言えるのか、極めて疑わしい状況を小説は戯画化していると言えるだろう。

こうした冴えない劣等生が、教師や学校に対する皮肉と諦念を混ぜながら、自身の劣等生ぶりを読者に曝しつつ、開き直って屁理屈めいた論理で正当化してみせる。これが『草様年華』全篇を貫く基調であり、読者に支持された点であろうと推測するが、ここではとりあえず邱飛がどう正当化してみせるにせよ、自他ともに認める劣等生であるという事実を確認しておけばよいだろう。

邱飛は更に“学習の成績は何を証明するのか？何も証明できやしない。単に現行の教育制度によって圧迫・同化された程度と正比例をなすパラメータに過ぎない。”(p90)と、自身が劣等生であることに開き直った解釈を続ける。小中高大学と数々の試験競争に自身も参加することによって、このエリート校にいる現実を不問にした上で、優等生とは教育制度にどれだけ同化しているかというパラメータであると定義付け、自分の価値は劣等生であることによって測られないという文脈につなげている。そして要は、劣等生は制度への同化や己の異化を意識的に拒んだ結果なのだ、と劣等生の価値を称揚してみせているのである。

邱飛という存在の価値が試験成績のみによって測られるものではないことは言を待たないが、大学からのドロップアウトをこの時点で考えているわけでもなく、また試験で無様に悪戦苦闘する姿が散々語られた後では、この解釈は阿Qの論理と呼んで差し支えないだろう。そもそも制度への同化を拒んだ自己にどういう価値が備わっているかも明らかにされておらず、そのことが小説全篇、ひいては三部作を通した主人公の悩みともなっており、例えば『草様年華Ⅱ』では大学院受験を決意した後に、どの専攻に進むかを延々悩む場面が描かれている。

もっとも教師が毎年、同一問題を使い回すのが常態化していることは、試験という脅し

⁷ 成績以外に、女子寮の覗きや自転車窃盗等の行為も描かれている。出版界で劣等生や不良学生の表現に市場価値が見出される契機については、別稿で論じてみたい。

が機能していないことを意味し、一般的に講義を真剣に聞く努力を学生に求めるのは難しいだろう。遊び暮らした夏休み明け、本試験を欠席した2科目の追試が控えているが、“80円で合格が買える”(p101)、即ち80円を払って3日間の補講を受けさえすれば、全講義のエッセンス、追試に出題する問題と答えを丸ごと教えてもらえるため、慌てふためく必要は全くない。

追試成績が発表され、一方ならない喜びに襲われた。2科目とも合格で、理論力学の成績は何と[注:優等生の]張超凡よりずっと高得点の88点だったからである。これに対して張超凡は憤り不公平だと感じたが、この科目を理解している程度で言えば、僕より彼の方がずっとずっと理解しているわけだから、その感情はもっとも言うべきだろう。(中略)今後の勉学を無駄にしないためにも、こんなつまらないことにケチケチと目くじらをたてて頭を悩ませることなどないよ、と僕は張超凡にアドバイスしてやった。(中略)今のこの世界は既に公平とは呼べず、不公平を感じるのもよくあることなのさ。(p101)

教師が単位という自分が持つささやかな権力を、私利私欲を満たす機会と見なすことで、試験制度を形骸化させてしまう構図が伺えよう。単に学則が保証する追試を厳正に行うのではなく、補講と称する個人レッスンを有償で開講し、しかも追試問題を丸々伝授するという特典をつけることで、教師は劣等生の弱みにつけ込んだ小遣い稼ぎが可能となり、講義をまじめに聴講した優等生が払う努力は、こうした教師の私利私欲を前に邱飛以下の評価しか与えられない。邱飛は自分より劣等生の某悪友は教師につけ込まれ、100元札で支払った補講参加費の釣り銭20円を返して貰えなかったかわりに92点の高得点だったと、どう仕様もない現実の不公平を前に心を煩わせるだけ無駄だと慰める。

教師らが私利私欲を優先することで生じる教育制度の形骸化は、小説全篇を通じ現れる。例えば自著を受講生に購入させて名簿にチェックし、単位との関連を示唆して暗に購入を強制する教師(p213)、また大学院推薦枠を巡って優等生の張超凡が、成績は劣るが役人の親を持ち経済力に勝る同級生に教師への賄賂攻勢で破れ、勉学だけでなく“多方面の要素を考慮した”(p246)結果だと教師に開き直られる等、こうした例は枚挙に暇がない。単位を握る教師の権力や親の政治・経済力等を背景に自己利益を追求する数多の行為が、公正な競争や正当な努力から意味を奪い、ひいては競争や制度自体を空洞化させる現象は、この小説に限らず同時代中国において散見されるものであろう。何がしか権力を持つ者が自分に有利なように競争の規則を恣意的に運用することが日常的に蔓延する世界にあって、

そこで得られる結果は個人の努力と結びついているのではなく、親の経済力など持って生まれた運不運の問題⁸でしかない。

こうした不合理な不公平に憤り落ち込む張超凡について、その感情を“もっとも”だとしていることから、邱飛にとっても正攻法の勉学の意義は認められているのだろう。しかし不公正が常態化した現実において正攻法が持つ意味は、優等生ではあるが吃音で冴えないという設定の張超凡が象徴的なように、要領がよい周囲の劣等生らに重宝され利用される道化の意味しか持ち得ない。邱飛は意味が空洞化した制度への諦めや蔑みを滲ませながら、仮病やカンニングなど制度から意味を奪う不正行為を自ら実践し、誰もがやっている現実だからと言い訳しながら、屁理屈を並べて正当化していると言えよう。しかし己のそうした行為を振り返った時、それが自分にとって楽しくもなければ、己の実力に繋がるような意味すら残してもいない、即ち無意味な行為を行うために自分の貴重な青春がすり減らされていることに、邱飛は気付いて愕然とする。

もし自分が目の前にある専門を放棄し、真に自分が心から愛するに値する専門を探すとすれば、それは何か？ またしてもどうしたらよいのか分からない茫然とした状態が、僕に近づいてくるのを感じた。学校での名状し難い空虚に身を置くことが耐えられなくなるたび毎に、僕は徒歩かバスで北京の街をまわってアテもなく彷徨うことにしたものだ。(中略) バスの脇を車が一台また一台ともものすごいスピードで通り過ぎてゆくものの、何の目的があって道路の上を疾走していくのか、僕には理解できないのである。(p157)

学ぶ楽しみもない上に、誠実に努力して学ぶことが往々にして踏みにじられる大学で、学ぶ意義を邱飛は探してみるのが見つからない。せめて興味を持てる専門に移ることで学ぶ意義を取り戻そうにも、邱飛自身それが何であるのかも分からない。その間にも試験だけは続々と待ち構えており、邱飛も何とかそれをクリアしていくのだが、行き着く先も定かではないまま競争や消耗だけを繰り返すだけ生活において、己の存在意義は無意味で耐えられぬほどに軽い⁹。そうした大学という場が強いる“空虚”さ、本稿の言葉を使えば「虚無」が耐え難いものと邱飛に感じられた時、決められた道路を“疾走していく”だけの行

⁸ こうした意識については、孫睿に限らず同時代中国の小説では広く見られる。例えば拙稿「劉強『為難情』に見る「考X」言説——「実現されない私」というトポス」(早稲田大学中国文学会『中国文学研究』第30期、2004年12月)参照のこと。

⁹ 孫睿とクンデラとの間に影響関係があるわけではないが、同時代中国のクンデラブームを考える時、こうした「虚無」表現の参照にされた可能性があると考えている。

為の無意味さに疑問を呈し、“アテもなく彷徨う”「虚無」的な現実には、自ら向き合おうとするかのような行為が選択されていることは注意を要するだろう。それでは「虚無」に向き合うことは、どのような意味が与えられているのだろうか。

3. 「虚無」への価値付け

目的や意味が明らかでないにも関わらず、苦痛を強いる圧力だけは存在する生活への軽蔑や焦燥は三部作に共通する。就職活動を描く『活不明白』で主人公は幾度か転職を繰り返すが、労働は時間の浪費だとの考えを披露している。

どこで働いても、何をしても、必ず時間の無駄だというような感覚に襲われる。何故なら、忙しくしているのは自分のためではなく、生活に必要なものと交換すべく労働力を売っているからである。(中略)“何故働くのか”と突き詰めて考えると、全ての行為は徒労であり、無意味だと忽然と悟ることだろう。時間の浪費にあたらないもの、といったら何だろうか。睡眠、眠りだけは己のためにするものである。
(p244)

睡眠は冗談であろうが、自分に対する利益の有無によって、行為の意味が測られる点が注目に値しよう。睡眠の対極にある無意味な行為に労働が位置づけられているが、その理由は他人を益するだけの行為だからと考えられている。ここで言う他人とは例えば上司や会社などを指し、自分がどれだけ努力しても会社の利益になるばかりで、己の利益に直結するわけではない行為として労働が解されている。

この後、広告会社に勤める主人公は会社を通さず、私的に広告制作を受注し小遣い稼ぎに励むが、その行為を“自分のために働く”(p256)と位置づけ、徹夜残業も辞さない態度を見せる。つまり自分自身の利益や物質的欲望を満たす行為を労働に期待し、社会的自己実現あるいは社会・会社全体の利益への貢献など労働を巡る社会性に対しては、意識の範疇にないと言えよう。個人が私利私欲を図ることが社会制度全体を空洞化させる原因であることを前章で見てきたが、孫睿の小説においては一貫して、他人の私利私欲によって空洞化した制度に自身の存在意義をすり減らされることへ批判的眼差しを向ける一方、自分自身の欲望を満たす行為だけは無条件に肯定されている。こうした点も孫睿の小説がどの程度、自己批評的なのかを測る指標となろう。

さて『草様年華』に戻ると、強い「虚無」感に苛まれた邱飛は、このまま無意味な勉強を続けても仕方がないと退学を決意し、期末試験を放棄してアテもなく彷徨う旅に出かけ

る。西安への短い逃避行の後、北京に戻ってきて退学の意向を伝える邱飛に、友人が思い止まらせようと諭す。

今は基本的に何事も成し遂げていない。(中略) だけど自分が何事も成し遂げていないと思うのだって、お前が生きてきたこの 22 年間で〔注：学校での勉学以外の〕他のことをする機会が全くなかったからじゃないか。だからといってお前がスゴイことをやる素質が備わっていないってことじゃない。卒業後のいつか、お前だってスゴくなるかもしれないんだから、絶対に退学なんて考えるなよ。(中略)〔注：大学というのは〕知識は学べない。でもここで自分の思考方法を鍛えることならできる。(中略) もしお前が最初に大学進学をせず、適当な職場に勤めることを選択していたら、今頃絶対、自分の儲けばかり考えるセコイ勤め人にでもなって、現状に満足して何か進んで物事をやろうなんて考えず、救いようがない程ひどい凡俗な人間になっていたろう。絶対に今みたいに、たくさん本を読んだり、たくさんの問題を考えたりというようにはなつてなく、日がな、スポーツくじや日常のこまごましたこと、上司へのおべっかに埋もれているしかなかったと思うな。(p188～189)

小さな自分の利益に汲々としながら、その現状にささやかな楽しみを見出して安住する勤め人への侮蔑が語られ、対照的に現状へ批判的視点を持ちうる自分たち大学生の精神的優位が説かれ、大学はそこらの勤め人よりも優位な精神性、即ち思考を鍛える場として位置づけられている。勿論、そうした精神的優位が将来の成功を約束しているわけではなく、またそもそもまだ社会的に何者でもないことを自ら認めているのだから、ここで語られる優位は自分たちの主観に過ぎない。

しかしこれが興味深いのは、「虚無」に新たな意味が加えられている点である。つまり自らの無意味な行為を「虚無」としてマイナスにとらえていたのが、ここでは「虚無」を認識するか否かが精神性を測る試金石となり、「虚無」は他人に対して精神的優位をひけらかすファッションアイテムと化しているのである。同時代中国において「虚無」が精神的トレンドであることを考えると、『草様年華』に見えるこの事例は、「虚無」を語ることに付きまとう優位性、及びまだ何者にもなり得ない現実への拒絶逃避の表現、といった「虚無」の多義的意味を示唆していよう。また「虚無」が称揚されることは同時に、「虚無」表現を可能にする場としてのモラトリウム、即ち青春の称揚にもつながり¹⁰、青春小説が好んで

¹⁰ モラトリウムの社会的浮上自体が近年のことであり、このことと青春小説の登場には密接な関連があるだろう。例えば林少華は「村上春樹の文学世界と中国現代青年の精神構造」(和漢比較

「虚無」をテーマとする理由の一つと想像される。

しかし繰り返すが、まだ何者でもないモラトリアムの優位は邱飛らの主観に過ぎない。従って現実にもその優位を保証するために、“セコイ勤め人”や出稼ぎ労働者など自分たちよりも社会的・文化的階層が劣っていると見なす存在を必要とする。この逃避行から帰京した直後の描写で、農村出身である寮の清掃員について、嫌悪感・差別感を滲ませたエピソードを、邱飛は幾つも披露している。

例えばこの清掃員が水道水を節約せず、蛇口を最大水量まで捻って使うのは、田舎の河と都会の水道を同一視し、水道の仕組みやコストに無知であるが故だろう、との推測を邱飛は述べている。機械的に目の前の清掃作業をこなすだけで、その背後にある全体の仕組みにまで考えが及ばない田舎者に対し、行為の意味を知的に理解できる自分の精神的優位を対比させることで己を優越化する手法¹¹は、前述した「虚無」を知り得る自分の精神的優位を導く方法とよく似ていると言えよう。

こうして「虚無」的現実に対して批判的に向き合うモラトリアムが、大学生の特権として発見されることで、小遣い稼ぎに熱心な大学教師も含む、目先の利益に汲々とする勤め人たちを精神的な高みから見下ろして軽蔑する意識が小説中でより鮮明になっていくことになる。もっとも邱飛は退学というリスクを選択したわけではなく、大学という場に軽蔑を示しつつも他ならぬその場に安住する自分を不問にしている上、また大学という保護されたモラトリアムの方が永遠に続くわけでもない。であるならば、ここで邱飛が発見獲得した「虚無」を語りうる己の精神的優位は就職、即ちあるポジションに安住して稼ぎを得る行為の中で、真に試されることにはならないだろうか。

4. 再浮上する「虚無」

現状に安住する者への軽蔑と安住を拒絶する者への賛美は三部作全体を貫いており、例えば3章冒頭であげた『活不明白』の引用では、労働への軽蔑が語られていた。また同書

文学会・中日比較文学学会編『新世紀の日中文学関係——その回顧と展望』勉誠出版、平成15年8月）で、村上の主人公が“成長しない子供”のようで、独りっ子世代で精神的に未成熟な現代中国の若者に受容される要因の一つと指摘しており、村上が青春小説として読まれているのが伺える。また村上が初めて翻訳されてからブームになるまで約10年のタイムラグがあることは、藤井省三が「開往中国的村上慢船——村上春樹在中国以及中国在村上文学」（『東亜文化与中文文学』〈東亜現代中文文学国際学報〉第2期香港号、明報出版社、2006年2月）で指摘しており、中国で青春小説というジャンルが登場する20世紀末になってようやく、村上の本格的ブームが始まることは非常に示唆的であろう。

¹¹ 孫睿はインタビューに答えて、自分たちが上の世代と比べ精神面は集団主義的束縛を脱し、個性的かつ多様な方法で生活を明晰に理解するのが可能な一方、実際の生活面では行動が制限束縛されるアンバランスに置かれており、そうした現状に対して理想に基づいて己を実現できない憤懣や困惑を表現している、という趣旨の発言を行っている。陳香「孫睿：我的青春憤怒迷惘」（『中華讀書報』2004年3月31日）参照のこと。

の別の箇所でも、経営者に辞表を叩きつけて転職を繰り返す昨今流行りの行為に対して、“なんて洒脱なんだ”(p133)と羨望の眼差しを送っている。しかし三部作の特徴は実際に自分も実践に及び辞職を叩きつけたものの、おいそれとは転職先が見つからない状況を戯画的に書き込む点であり、1つの場所に安住できない主人公の心理が利害から超越した純粹な精神性の現れでないことを対象化している。

タイムマシンに乗って10年の歳月を飛び越え、30歳以降の自分の様子を覗くのに、ドラえもんが友達にいたらと本当に思う。(中略)その結果が良くても悪くても、一目見たら少なくとも気持ちが落ち着くんだけど。(中略)青春と富の前で僕はまだ本気でちょっと躊躇している。もしも10年後か15年後の自分の様子が見られたら、きっとそのどちらを選ぶかさっさと決められるだろう。でも今は躊躇することしかできない。本当、まだ諦めたくないんだ。実際には、答えはもうはっきりしている。僕が躊躇しているのは、僕が青春の方をより愛していて、未来への理想に溢れているってことだ。にも関わらず僕が躊躇するのは、僕が理想を実現できるかどうか、まだしっかりした目算がないからだ。(p122)

ここで言う青春を、モラトリアムという語に置き換えてよいだろう。ある場所に腰を落ち着け、そこで辛抱や努力を積み重ねて富を得るという生き方が、完全に否定されているわけではない。しかし誰も未来を見通すことができない以上、その場で辛抱や努力を積み重ねたら確実に富が得られるかは定かでなく、大学生活と同様、払った努力が意味を持たない「虚無」という結果が待っている可能性も高い。またより多くの富が得られる職場が他にあるかもしれない。そうすると現在の職場で辛抱し小さな利益に満足することは、よりよい“未来への理想”を諦め、「虚無」に終わるかも知れない現状に甘んじることを意味しよう。つまり職場において経済的に下位にある者が劣勢を認めず、現状を否認し別のチャンスを求めて転職を繰り返す行為が、大学時代の「虚無」を対象化して精神的優越性を示す行為の延長として位置づけられている¹²ことになる。そして己の存在意義が「虚無」化されるのを拒絶し続ける行為、及びその行為を是とする意識こそが青春、即ちモラトリアムと呼ばれろと考えられよう。逆の言い方をすれば、モラトリアムは現時点での経済的劣勢を認めたくないため仕方なくやっていることであり、現実社会の勝者となることが内心

¹² 「虚無」に対する態度は様々な方法で表現される。例えば春樹『北京娃娃』(遠方出版、2002年5月)で主人公が語る自殺願望も、現実には価値を置かないという態度を表明することで、現実には固執する相手への精神的優位を表現している。

渴望されているのが伺える。

『草様年華』でも、邱飛は卒業を目前にして就職が決まらない。「虚無」を直視し得る精神的優位は邱飛の主観に過ぎず、現実の就職戦線では何の武器にならないにも関わらず、邱飛は相変わらずドン・キホーテさながら己の精神的勝利のため戦い続ける。ある職場に試用され働き始めた邱飛は、仕事自体の苦勞よりも、“経営者の顔色を伺って行動する”(p290) のが卑屈だと辞表を叩きつけ、“胸中の鬱憤を晴らす”(p291)。

〔注：試用期間中は〕両者の間には従属関係が存在しないのだから、ボスに対してペコペコ諂う必要などなく、話していてソリが合わなければいつでも席を蹴って立つことだってできる。さんざんに相手を罵倒してからおもむろにその場を去り、別の会社を見つけるのなんか、別にたいしたことじゃない。〔注：新人社員の〕君だって会社のボスよりずっとビックになれるんだ。また採用された時に、会社があつらえた小さな靴をはいたものの足がだんだん大きくなり、それにつれて痛みを感じるようになることがあるだろう。その時、会社のボスというのは自分のオフィスに隠れて、君が苦しんでいる様子を密かに笑いながら、君の価値を搾取しているわけだが、にも関わらず君はボスの命令に従わざるをえない。(p291)

会社勤めをする誰もが新人社員としてスタートし、会社のヒエラルキーの最下層に甘んじなければならない。注意すべきなのは、最下層というのが単に給与額を指すのではなく、雇用者や上司への口の利き方や振る舞い方など、常にその上下関係を意識させられることに意識が向けられ、その上下関係の中で自身の“価値”、即ち存在意義が搾取されることに他ならないと憤っている点である。

大学時代にはたとえ劣等生であっても、成績だけで学生が一元的に序列化されるわけではなく、成績による序列化が何の意味も持たない現実を蔑むことで、悪友同士が連帯して互いの“価値”を承認しあっていたと言えよう。それに対して、自分より能力に劣る上司を軽蔑し、自分の方がもっと高い“価値”を備えているのだと邱飛が内心考えたとしても、職場でそれを実際に口に出せるわけではなく、また厳然と存在する上下関係の中で、邱飛が期待する“価値”は周囲から承認される気配もない。誰からの承認もない以上、自分の“価値”は自分一人で主張するしかなく、邱飛は辞職を叩きつけることで自身の“価値”を捨て身で表現しようとする。もっともこの時に表現される邱飛の“価値”は具体的内容が本人にも意識されているわけではなく、自分の“価値”はこの職場だけで測られるものではない、という一種の現実拒否として現れるに過ぎない。

とりたてて実績があるわけでもない新人社員が、入社早々、その存在“価値”を周囲から認められる環境などそうそうある筈もなく、邱飛の就職先は決まらずにモラトリアムが続行される。存在“価値”が即座に現れる職場が現実にないとすれば、邱飛は自分の精神的優位をいかにして確信しうるのだろうか。

5. おわりに

就職では現実の利害や上下関係に配慮するため、不自由な振る舞いを強いられることに邱飛は憤慨するが、憚ることなく自身の精神的優位をぶつける対象が存在しないわけではない。例えば日本企業の面接に行った邱飛は、日本人担当者と若い中国人通訳の関係に、かつて政治的・軍事的に蹂躪支配した日本と中国の関係を重ね合わせ、人を喰ったような応答で侮蔑を言外に覗かせた後、憤然とその場を立ち去り愛国的な義憤をぶつけている。この日本人担当者の具体的言動に問題があったという記述は一切なく、邱飛にとっての日本が無条件に自分よりも低い地位に位置づけられ、彼の精神的優位を証明するのに利用されているのが伺えるだろう。その意味では出稼ぎ労働者など自分たちよりも社会的階層が劣っているとされる存在カテゴリーに日本が入れられており、随時、憤懣をぶつけることで精神的優位を確認しうるのだろう。

また『草様年華Ⅱ』では会社をクビになった邱飛が、古巣の大学に戻り大学院をめざしモラトリアムを継続している。かつての悪友らも各自の事情で大学に戻り、経済的に苦しいことを除けば、職場の上下関係で屈辱的な思いをすることもなく、精神的には自由で大きな不満があるわけではない。小説中で自分が現実にはまだ何者でもないという事実が痛みを伴って現れるのは、例えば恋人を巡ってライバルが出現した時である。エリート会員のライバルとの差は傍目には歴然としている。しかし自家用車を乗り回し社会的成功を見せつけるライバルに対し、車内の BGM が“出稼ぎ労働者でも口ずさめる”歌で“何のセンスもない”(p141)と邱飛はこき下ろし、内心ライバルに対する優越感を覚える。自分たちより社会的・文化的階層が劣っていると見なす出稼ぎ労働者にも歌える曲であることを理由に挙げ、ライバルを文化的階層の下位に位置づける点は興味深い。つまりセンスとは単なる趣味の相違・善し悪しの問題ではなく、社会的な上位者と下位者を序列化する装置となっていることが伺える¹³。勿論、センスを巡る上下関係も邱飛が考えるほどに客観的かつ自明なものではなく、主観的な勝利に止まっていると言えるだろう。日本やセンス等がそうであるように、現実では総じて一回的かつ主観的な精神勝利の快楽を貪ることし

¹³ 邱飛の音楽趣味が穴あき版テープ(打口帯)で培われた経緯が『草様年華』に見られる。穴あき版テープや海賊版 CD の文化的意味については、「中国“盗版事業”和“Saw-gash Generation”」(『波西米亚中国』、広西師範大学出版社、2004 年 5 月)等、顔峻の一連の批評に詳しい。

か、己の精神的優位を確かめる術が残されていないことが見てとれる。

本稿では孫睿の青春三部作における「虚無」表現を検討してきたが、自身が置かれた「虚無」的状态を対象化し語ることは、単に現実社会に対する主人公たちの「虚無」感が投影されているだけではなく、現実には耐えられないほど軽い己の存在意義に反旗を翻し、精神勝利法によって何ほどか重さを加えようとする抵抗の現れと結論されよう。頑なにモラトリウムを続ける孫睿の小説に登場する若者たちが、自分に割り当てられる社会的ポジションを引き受けて大人になるのは、いったい何時のことなのだろうか。

『Chinese Culture Review』

vol.1 (2001～2002)

訳者まえがき

高屋 亜 希

本書は、朱大可・張闕主編『21世紀中国文化地図』第1巻（広西師範大学出版社，2003年11月）の部分訳である。本書のスタンスについては「原序」に詳しいが、現代中国社会の文化事情および歴史的経緯について詳しくない読者にとっては、必ずしも分かりやすいものとは言えないであろう。訳者の方からこの点について、若干補うことにする。

21世紀中国文化をどうとらえるか、という原著者の問題意識の出発点を遡ると、1980年代に辿りつく。1980年代に文学との関わりが始まった原著者の経歴からも伺えるが、1980年代に諸文化を支えていた社会制度状況が、改革開放の流れが急激に進展する1990年代以降、徐々に崩壊を始め、21世紀に入る頃を境目にして、その崩壊が完全に意識化・対象化される。1980年代を支えていた状況の喪失に対する反省的な視座から、21世紀という同時代をとらえ批評を試みたのが、本書である。それでは1980年代というのはいかなる時代だったのだろうか？

一言でいうと、それはインテリによる啓蒙の時代であった。1976年に文化大革命が終結し、その後、保守派との激しいせめぎ合いを経て、鄧小平による改革開放の流れが推し進められていったのは周知の事実である。だがそうした社会状況の中で世論をリードしてきたのが文学など、インテリによるエリート文化であったことは、日本の読者にとって必ずしも常識ではないだろう。極端な労農兵中心史観が支配した文革時期、インテリは常に思想改造の対象とされ、主体として社会に関わることを拒絶されてきたが、文革終結によって彼らは再び社会の主体としての己を取り戻し、自分たちこそが中国社会全体をリードしていかなければという使命感を抱き、文学などエリート文化を通じて己の声を社会に向けて発したのが1980年代である。

文革という惨事がインテリに与えた肉体的・精神的傷害について語った「傷痕文学」に始まり、文革を引き起こした社会的諸原因への批判・反省的思索を展開する「反思文学」、改革開放政策によってもたらされる社会的軋轢・問題点について未来社会への展望を交えて語る「改革文学」、インテリによる精神的系譜の修訂とも言うべき「ルーツ文学」など、文革後の中国社会の中でより優位な社会的ポジションを確保し、アイデンティティをいかに構築するかというインテリ自身の問題と密接に関わりながら、そうした問題系は文学などのエリート文化において展開されてきた。

文学によって社会に参加し、いかに社会全体をリードしていくかという中国インテリの意識はなにも 1980 年代に始まるものではなく、文革以前、ことによると民間でうたわれる詩歌に民意を読み取り、それを政治に反映させようという、『詩経』国風に遡る伝統的な思考パターンと言ってよいかもしれない。話を 1949 年の人民共和国建国以降に限定しても、1950～1970 年代においてそうした意識・姿勢は存在しなかったのではなく、単にそれが国家の全体主義的な主導のもとで行われていたに過ぎない。インテリに期待されていた役割は、そうした国家的政治意識を構築するために奉仕するか、或いは全体の足並みを乱す余計者として否定・排除されるかのいずれかであったことは、前述した通りである。従って 1980 年代を境に変化したのは、文学による社会参加という枠組みそのものではなく、誰がその主導権を握り世論をリードするかという点である。つまりはインテリの側に言説権を奪回する奪権闘争および主体回復運動として行われたのが、1980 年代の文学による啓蒙運動であったと言えよう。言うまでもなくこの文化的運動は、あの 1989 年の天安門事件に帰結する政治的な民主化運動とも連動したものである。

あの天安門事件は歴史的ターニングポイントであった。それは国家主義と民主主義の対決における後者の敗北であったというよりは、この運動が真に国民全体を巻き込む大衆運動になり得なかったことが示すように、奪権闘争におけるインテリの敗北であったと言える。天安門事件の終結とともに始まる 1990 年代という時代が、改革開放のかけ声のもとに急激な市場開放化を進め、それと同時に社会主義的な統制によって保護されてきた国营企業を初めとする諸制度が、市場競争に対応できず崩壊を始める。文学も実のところ国家に保護・統制されてきた制度であり、他の領域と同様、市場競争の荒波をもろにかぶることになる。インテリによる奪権闘争も、こうした新たな社会状況の中で、急速にその闘争の対象を見失っていくことになったのである。

それでは現代中国文学を支えてきた制度とはいかなるものであったのか？従来、筆一本で生計をたてる職業作家は基本的には中国作家協会に所属し、国家から給与を支給される。経済的保障を得る代償としては当然、その創作は全て国家による全体主義的な政治意識に

歩調をあわせなければならなかった。例えば国家レベルの権威ある文学賞などは、そうした政治意識を具現化・明示化する機能を帯びており、文学はそれらを構築するツールとしての制度的役割を引き受けざるを得なかった。こうした制度は文学に限ったことではなく、美術・演劇・映画なども同様の制度によって保護・統制されてきたのである。

このような文化制度下において、国家体制に対して批判的な創作者の個人的見解は、社会全体の中で反体制的というレッテルを貼られ危険視されると同時に、それだけで前衛的な意味を有していた。であるからこそ、自分たちが思っていることを替わりに言ってくれたという受容のされ方ではあるが、こうした文学作品は読者による一定の評価・支持を勝ち得ていたのである。思えば 1980 年代とは、文革の桎梏から解き放たれた社会的熱狂の中で文学が読まれ、インテリ・文学者と社会が共振していた稀な時代であったとも言えよう。無論、個人的な見解を表明することについて、インテリ・文学者はそれに伴うリスクを引き受けねばならず、例えば逮捕や共産党員からの除名など、様々なペナルティが科せられることになる。またそうした作品はそもそも公的な出版物にはなりえず、多くは地下出版という形をとらざるを得なかった。中国において 1980 年代は、反体制作家・亡命作家を多く生んだ時代でもあり、詩人の北島やノーベル賞作家の高行健などはその代表的存在と言えよう。

だが 1990 年代に入って状況は変化する。なしくずしの市場開放・経済自由化の中で、部分的とは言え、様々な障壁が取り除かれ、文化をめぐる統制が緩和されたのは歓迎すべきことではあったが、同時にエリート文化の 1980 年代的な社会的前衛性が薄れてしまったのである。エリート文化に残されたのは芸術形式上における前衛性であるが、市場からの反応は冷淡なものであった。国家サイドが有形無形に強要を迫る政治的意識と、いかに折り合いをつけ自己を主張するかという 1980 年代的な闘争は影を潜め、市場に受け入れられるか否かがその文化の価値を測るもう一つの基準として登場し、例えばこれまで国家の保護を受けてきた老舗文学雑誌も軒並み不振に陥ったのである。そうした全面的な市場化・自由化の流れは、2001 年の WTO への中国加盟が象徴するように、21 世紀に入ってより加速していると言えよう。こうした文化をとりまく政治的・社会的事態にどう向き合い、対応するかということを巡って、1980 年代には一枚岩を誇った中国のインテリが、1990 年代から 21 世紀にかけてどのように分化し、対立が生じたのかという見取り図については、「原序」を参照されたい。

本書のスタンスは、1990 年代以降に出現した大衆文化、およびそれを消費するインテリを含めたネットワーク層の存在を基本的に肯定しつつ、加えてこのネットワークから一人一人が自由な個人という立場で参加して作りあげる、理性的な公共圏の萌芽を見出そうと

している。換言するならば多くの場合、個人的な言説の消費に止まっている、あるかなしかの大衆文化のネットワークにインテリ自ら参加することを通じて、意識的な言説生産の公共体の形成を促そうという、ある意味では1980年代的なインテリの使命感のもとに本書は企図されているとも言えよう。但し1980年代的使命感とは言っても、それはかつてのような超越的立場から社会・民衆を啓蒙していくというスタンスではなく、流行大衆文化に対するインテリ自らの批評的実践の積み重ねとして企図されていることは注意しておく必要があるだろう。このような立場をとるがゆえに、文学・美術・音楽・映画・テレビ・演劇・建築・メディア・流行という9分野の多岐にわたる文化事象の全てを、個人のインテリが自分の関心・視野に納めて、自ら批評的に参加しようなどという、日本では考えられない試みがなされているのである。

今日の日本において各領域に細分化されたサブカルチャーの消費者に横断的なネットワークを想定し、公共圏の到来を期待するという事態はほとんど考えられないのではないだろうか。中国においては大衆文化の細分化が始まったばかりであるため、こうした試みも辛うじて成立し得るとは言うものの、こうした原著者の試みは些か倒錯的ですらあるのかもしれない。しかし現代中国においては、ともすれば個人的利益のみが官民を問わず追求され、市場競争の公平性・透明性の維持までもが無視される現実があり、本来そうした情況への批評的役割が期待されるインテリすらも私的利益を優先する昨今の状況を考えると、社会批評を行う公共的な言説の場を早急に立ち上げる必要に迫られているのも確かである。

いま一つ日本の読者に対して補足しておくべき点は、本書が扱う中国文化とは基本的に都市文化であるという点である。中国では現在でも基本的に二重戸籍制度を維持しており、都市と農村の人口は別々に管理され、人口の圧倒的大多数は農村に止められている。都市に比べて農村が経済的・文化的に大きなハンディを背負わされているのは勿論、こうした農村人口はたとえ都市に流入したにせよ、過酷な肉体労働に従事し最下層に位置づけられるしかない現状にある。今なお肉体労働への蔑視が強い中国社会にあって、彼らの存在や精神世界は都市インテリ層の視界に入ることは稀なことと言えよう。従って流行大衆文化を消費する大衆教養層が拡大したと言っても、それは中・上層の都市民に限定されることであり、そもそも高価なパソコンを個人的に保有して日常的にネットにアクセスする層は、中国全土からみるとやはりごく一部に止まると言える。経済的・文化的に都市と隔絶された農村、あるいは都市下層に置かれた大勢の人々の精神を支える文化は、実のところ本書が取り上げる都市文化とは全く別の形で存在しているのである。

日本に住む我々にとって本書が有益なのは、原著者の意図とは異なるのであるが、変化

著しい中国社会の同時代都市文化の諸現象を、ある批評的見地から全体を見渡すという稀有な体験が得られる点にある。中国でたまたま出会った事物・事象が個別的事例なのか普遍的事例なのかですら、外国人である我々にとって判別することは容易ではない。ましてそれが中国社会の中でいかなる意味を持ち受容されているのか、ということまで様々な文化領域の全てを把握することは非常に困難なことであり、ある一定の偏りを持つにせよ、そうした見方をも含めて教えてくれるという点において、本書は中国同時代文化を知るよきガイドブックとなってくれることだろう。日本において、中国の政治・経済について紹介・解説する一般書は比較的目にするが、文化、とりわけ同時代文化については読者の関心も比較的乏しいためか、一般書では散発的な紹介に止まっているのが現状である。本書を通じて現代中国に正面から向き合い、理解しようと願う人々が一人でも増えてくれることを切に期待している。

『Chinese Culture Review』

vol.2 (2003)

訳者まえがき

高屋 亜希・千田 大介

本書は、朱大可・張閔主編『21世紀中国文化地図』第2巻（広西師範大学出版社，2004年5月）の部分訳である。第1巻は、単に2001～2002年の中国文化事情の記録にとどまらず、20世紀最後の10年全体を総括するスタンスとボリュームを備え、クロニクルの体裁をとりながらも「1990年代文化精神史」とも言うべき1冊の書物として完成していた。それに対して第2巻は、総括というスタンスが失われた分、1冊の書物としての完結性は希薄になっている。だが、それでは第2巻は第1巻の余勢で作ったオマケなのかと言われると、これは私見に過ぎないのだが、第2巻は第1巻を生み出す動機・原動力のような位置にあり、やはりこの第1・2巻は2冊で1セットであるように感じている。

動機というのは、第2巻が扱う2003年の中国の社会状況、より具体的に言えば言論統制を巡る緩和傾向のことである。2003年はSARS流行による不安感が中国社会を覆った年であったが、にも関わらず本書がSARS現象から明るい未来を見いだそうとしている点が、きわめて興味深く感じられる。

SARS発生当初、政府サイドが情報統制をしいてSARS発生の事実を否認し、そのことが却って感染流行の拡大を招き、更には正確な情報が与えられない中で社会を恐怖に陥れたことは、読者の方々も記憶されていることと思う。そうした社会的パニックを沈静化に導いたのは政府ではなく、実態を知らせた医療現場の医師たち、それに医師の声を社会に届けたネットメディア、そしてネットを通じて情報収集し世論を盛り上げたネチズンたち、この三者であった。正体不明の見えざる敵の襲来に脅える中国国民は、彼らによって初めて可視化されたSARSという敵と向き合うことが可能になった、という点こそが最重要であり、真に事件と呼ぶに相応しい。それに比べると、国内ネット世論と国際社会の関心に

押されるようにして、政府関係者の処罰など政府から SARS への一連の対応変更を引き出したことも二次的な事件に過ぎない。またひとたび、SARS が敵として可視化されたことによって、敢然と戦いに立ち向かう医療関係者が英雄として形象化され、中国国民が現代の英雄ドラマを存分に消費し陶醉するに至った結末も、大衆消費社会の祝祭めいており、全く重要ではない。

中国メディア事情に詳しくない読者にとっては、このネットによる SARS の可視化がどれほど大事件であるか、想像できないであろう。中国共産党中央機関紙である『人民日報』がその最も顕著な例であるが、中国のマスメディアは新聞・テレビ・ラジオを問わず、全て基本的に党か国家の機関に所属しており、それらの政策宣伝機関として位置づけられている。従って、資本主義諸国におけるマスメディアのような、第 4 の権力として他の行政・立法・司法の権力機構を監視するという社会的位置づけとは大きく異なっている。具体的には、中国マスメディアにおいて党・国家中央の政策に対する批判的見解が報道されることは、権力闘争などの例外的事情がない限り、まずありえない。また社会報道についても、中国共産党の指導のもとでは社会的にマイナスの事件は発生しえないという建前のもと、ごく数年前まで国内の凶悪犯罪や大事故などについては、事件が解決し社会に不安を与える要素が取り除かれた段階で初めて報道されていた。

近年、市場化の進展および各新聞への独立採算制導入にともなって、消費者の興味にあわせたニュースの提供が求められるようになったため、社会事件に関してはこうした言論統制はかなり緩和されてきた感がある。しかし、例えば党・国家幹部の汚職事件の報道なども、地方幹部についてはメディアを利用して社会浄化を推し進めようとする中央の思惑と合致するため積極的に取り上げられるが、その矛先を転じて中央に向けることは禁じられている。また記者が自力で独自のニュースソースを開拓して報道する条件・伝統が不足しているため、消費者のニーズに合わせたニュースの提供と言っても自ずと安易な方向に流れ、悪質なニュースの捏造は論外としても、日常の小さな不平不満を訴える読者からの投稿が紙面に溢れ、肝腎の政治的禁区への意識が削がれるようになっている。

こうした中国のメディア事情を踏まえるならば、SARS という当局の政策にも関わる重大事を巡って、当局とは異なる見解をネットによって共有し、一時的であるにせよ一つの言論勢力を形成しえたということは、これまでありえなかったことが納得されよう。ネットを通じた世論形成の場、いわゆる公共圏を期待する、という本書原著者のスタンスもこうした事件によって生み出された、あるいは後押しされたのではないだろうか？2003 年は、こうしたネットを通じて世論が形成され、それが現実の政治を動かしていくという事件が一度ならず、再三繰り返された。その一つが即ち、本書でも大きく紙幅をさかれている孫

志剛事件である。

中国では建国当初の1950年代より、悪名高い二重戸籍制度を行っている。全国民を都市戸籍と農村戸籍に分けて管理し、両者あるいは都市間の移動を厳しく制限したものである。限られた資本を都市に集中投下することによる急激な国力増強、また全体主義的な人口管理による治安の効率化などが制度導入の理由であり、実際にそのように機能してきた。しかし改革開放政策によって、資本のみならず人口流動も加速する中で、この二重戸籍制度は社会の実情にあわなくなってきた。加えて資本が集中投下され、何かにつけて優遇措置が行われる都市、とりわけ北京・上海などの大都市の戸籍を保有すること自体がある種の特権となっており、国民の間に強い不公平感を招いている。こうした大都市の戸籍を農村あるいは他都市出身の出稼ぎ者が入手するのは極めて困難であり、喩えるならば知己のない外国で職を探し、孤軍奮闘して生計をたて、国籍取得を目指すようなものである。

孫志剛事件で問題となった收容送還制度は、改革開放政策で社会の人口流動が本格化した1980年代初に導入されたものである。都市に居住しながらその都市の戸籍を保有しないものは、暫定居留証等による身分証明書が必要となり、携帯していない者は都市への不法滞在者として身柄を拘束されて原籍に送還されたり、收容所に収監されて必要な保護が与えられる。これが收容送還制度である。本来はホームレス等の都市の社会的弱者を救済することを目的としていたが、近年は完全に形骸化していた。違法な手続きによって收容する傾向に加え、收容された者を請け出すには、收容理由の如何に関わらず請負金が必要とされ、收容所関係者が私腹をこやす手段として悪用されていたのである。社会主義制度の疲弊が改善されないままに導入された資本主義制度の弊害が、問題を更に複雑かつ深刻なものにする事態は、今日の中国ではあらゆる分野で見られることであるが、收容送還制度もまたその典型と言えよう。

くだんの孫志剛は、大学卒業生の若きインテリであったが身分証を携帯していなかったため、不法滞在者として拘束された上、收容所職員から暴行を受け死亡したというものである。このことが引き金となってインテリの中に義憤が引き起こされ、ネット上では收容送還制度そのものへの批判が形成され、ついには既成のマスメディアや政府を突き動かして制度撤廃へと追い込むに至った。ここでも既成のマスメディアではなく、ネットが問題を可視化し、国民と政府の眼前に突きつけるという機能を果たしたのである。

ただ注意すべきなのは、ネットによる見えざる敵の可視化という個別的な事件そのものが即、本書原著者ひいては中国インテリに言論緩和への期待を抱かせたわけではないことである。恐らくは中国インテリの多くは、事件に対する中央政府の比較的柔軟かつ寛容な対応に、言論自由化へのゴーサインを読み取ろうとしていたのではないだろうか？SARS

報道事件の折、総書記に就任したばかり胡錦濤が、ネットでの言論活動を容認・奨励するような発言をしたが、そのことがインテリたちに明るい未来を期待させたとするならば、この 2003 年の未来への楽観ムードも新総書記に対するインテリの期待、と解すべきなのかもしれない。

いまひとつ日本の読者に誤解のないように付け加えるならば、テレビや新聞など既成マスメディアに比べれば緩やかであるとは言え、ネットという新興メディアについても完全な言論の自由が許されているわけではない。例えば、商用 Web サイト開設には当局の許可が必要であるし、中国がインターネットに公式接続した当初から、海外の一部ニュースサイトや反中国的なサイトにはアクセス制限がかけられていて中国国内から接続できなくなっている。このいわゆる電子の長城の機能強化は絶え間なく続いており、2002 年の Google 封殺事件を経て、従来の IP アドレスによるアクセス制限に加えて、NG ワードによる情報フィルタリングさえも導入されている。携帯電話のショートメッセージさえもが当局の監視下に置かれるようになったことは、本書にも取りあげられている。

このように中国ではインターネットにおいても、政府当局に不利益な個人の言論が社会に向けて拡散し、世論を形成するという事態への歯止めが制度的に設けられている。しかも、政府見解と異なる言論を載せたサイトの閉鎖や関係者に対する当局の監視等、ネットに対する時代錯誤な規制が強化されている。SARS 事件を契機に、ネットという新興メディアに咲いた言論自由への夢想も、結局は徒花に終わったということなのだろうか？

2003 年を彩るこうした言論自由を夢想する楽天的なムード、即ち本書を世に出す動機ともなった社会状況は、翌 2004 年には一連の引き締めによって徐々に冷却させられているように見受けられる。原著者ひいては中国インテリが 2003 年に夢想したものが現実裏切られることがないよう、心密かに願っている。また日本の読者には、2003 年という徒花にも似た狭い時空をくぐって、本書が世に届けられたという事実を、大切に受けとめていただけることを併せて願っている。

『Chinese Culture Review』

vol.3 (2004)

訳者まえがき

高 屋 亜 希

本書は、朱大可・張闕主編『21 世紀中国文化地図』第 3 卷（広西師範大学出版社，2005 年 9 月）の部分訳である。2003 年を扱った第 2 卷は、SARS・孫志剛事件などを契機に、インターネットを通じた個人による自由な言論空間を夢想した、インテリの期待に彩られていた。それに対して第 3 卷が描き出す 2004 年は一気にトーンダウンし、政治経済からファッションモードに至るまで、全巻を通じて“低調”“控えめ”“シック”という言葉が基調となっている。



2001 年に WTO に加盟し、世界各国との市場競争に遅ればせながら参入した中国であるが、競争とは無縁の社会主義経済体制のもとで保護されてきた後、いきなり今日のグローバル化が進行した世界を相手とする競争は厳しく、現状は苦戦を強いられていると言えよう。そうした中国の経済的苦境は、国内の文化領域において往々にして逆説的に現れるものらしい。例えば、手っ取り早く世界一・最先端の称号を得るために、世界一の高さを競う摩天楼の建築に血道をあげたかと思うと、有名建築家による超奇抜なデザインを次々に採用するなど、国際都市のイメージを上面だけ一気に創り上げようと、大規模かつ急激な不動産開発を政財界あげて推進する風潮が、この数年顕著であった。そうした社会風潮に対して本書第 1～2 卷が鋭い舌鋒で批判していたことは、読者もご記憶のことと思う。それに比して、第 3 卷の批評が全体としてトーンダウンしたことに訝る読者もいることだろう。しかし、そうしたトーンダウンをもたらした 2004 年の社会状況そのものが、本書に生々し

く刻みつけられていることは決して見逃されるべきではない。

例えばパリのシャルル・ド・ゴール空港崩落事故の報を聞いて、日本の人々は何を思ったであろうか？その設計者であるポール・アンドリュウが、日本の関西国際空港の基本構想に参加した設計者¹と同一人物であることを指摘する者がいなかったわけではないが、多くの日本人にとっては飽くまでも遠い異国フランスでの不幸な事故に過ぎず、それによって関西国際空港への危惧が引き起こされることも、とりたててなかったと記憶する。

一方、中国では本書キーワード「安德鲁」「鸟巢」の記載にもあるように、アンドリュウが北京で建造中の“巨大卵”こと国立大劇場と同一設計者であることから、西洋建築デザイナーによるデザイン重視の大型建造物の安全性・有用性に対する、従来の盲目的信頼が一気に揺らぎ、見直しを迫る世論が高まっていったのである。図らずも“ウォーターキューブ”ナショナル・スイミング・センターや“鳥の巣”ナショナルスタジアムといったオリンピック施設も、デザインの斬新さ優先の路線から一歩立ち止まり、建設コストの軽減やオリンピック後の実用度の面から設計への見直しが進められたが、見直しをめぐる実際の経緯とは別に、中国のインテリがこれら一連の出来事を一つに繋げ、急進的な建築ブームが転機を迎えたことを象徴する“事件”として受けとめたことは、非常に興味深い。



実際 2004 年は、不動産業の右肩上がりの成長神話に陰りが見え始めた年であり、行き場を失った投資マネーが不動産業から観光開発・書画骨董のオークション等流れ込み、威勢のよい掛け声で登場した高層建築物・高速道路などの大がかりな建設計画が、次々と資金難から頓挫していく状況は本書からも伺える。行き過ぎた経済の過熱が、理性と落ち着きを取り戻すこと自体は喜ばしいものと言えよう。だが問題は経済自体のトーンダウンにあるのではなく、何も建築に限ったことではないが、急速に先行き不安に覆われた中国社会を語る言葉を、中国の人々が奪われつつある事態こそが真の問題なのである。

例えば、前述したキーワード「安德鲁」には“中国建築界と中国政府が直視し解答しなければならぬ問題”という評語が付されているが、これは原著者から提供していただいた元原稿に基づくもので、実際に中国国内で刊行された段階では“中国政府”という語が削られている。削除としては極めて軽微なものであり、中国出版界で従来から行われてきた言論管理統制の一端として、とりたてて言うほどのこともないのだろう。しかし緩やかになった統制のもとでかなりな程度、自由な批評を展開していた第 1～2 巻と比較するなら

¹ 関西国際空港はレンゾ・ピアノの設計で、ポール・アンドリュウはプロジェクトの基本構想に参画し、「なにわの海の時空館」を設計している。

ば、こうした些細な表現にまで修正が必要とされる言論状況は明らかに変化と呼ぶべきであり、本書全体に渡ってこのような細部に修正が施されていることに注意する必要があるだろう。

話を戻せば、行き過ぎた経済の過熱にストップがかかる現状が確かに眼前にあるにも関わらず、そもそも過熱へと導いた当の責任主体から政府当局を外さなくてはならない。不在化した批判対象を巡って批評を展開しなければならない言葉の不自由さこそが、この第3巻の批評の筆を鈍らせている主要な原因であろう。その意味において、憤りを向ける対象を再び奪われた年として、2004年は記憶されるべきなのかもしれない。それは無論、2002年末に新総書記として登場した胡錦濤政権に対するインテリの淡い期待感が、1年であえなく潰えた年と言い換えることもできよう。

既成のマスメディアに比べ比較的緩やかな統制であったことから、原著者をはじめとする一般の中国インテリが言論自由への夢を寄せていたインターネットに対し、当局の鮮明な管理統制姿勢が露わになったのも、この2004年である。当局によるネット規制・統制を示すキーワード「金盾工程」「敏感詞」も、一部関係者には2002年頃からその存在が知られていたとは言え、この年にそれが一般インテリの間で可視化されたということであろう。無論、言うまでもなくこれらのキーワードは元原稿にのみ存在し、中国国内では公にされなかった箇所である。

また2003年にネット世論によって收容移送制度の廃止という政策変更を引き出した孫志剛事件は、ネチズンの勝利として第2巻で高らかに語られていたが、本書キーワード「禁乞」などは、廃止された移送制度の代替物が早くも登場したことを示している。別のキーワード「拆了/啦 (China)」の比喻を使うならば、2003年が中国の人々を囲い込んでいた柵をなに程か“撤去”したのに対し、2004年には当局の新たな柵が再びあっさり人々を囲い込み、人々が保有するささやかな自由をも容赦なく暴力的に“撤去”しはじめたと言える。

政府当局による“撤去”は、政治とは直接的関係を持たない庶民の娯楽にまで及ぶ。4月には、人気だった刑事・裁判ドラマ等がゴールデンタイム枠での放映を禁じられ、国語教科書のパロディ「Q版语言」が不真面目だという理由で禁書にされる等、枚挙に暇がない。こうして人々の自由な領域がますます囲い込まれていく中、囲い込もうとする当の主体については語ることを封じられ、断ち切られた人々の欲望と憤りの言葉は不満を膨らませながら、別のはけ口を追い求めていく。



政治・経済両面で急速に閉塞感・先行き不安感が増す社会の中で、行き場を失った人々の言葉はどこに向かって吐きだされていくのか？1 つ目は、目の前にある中国の不安な現実から目を背けるように、中国のかりそめの優越感を貪りそれに浸ろうと、真偽ないまぜになった優越的な中国イメージを生産・消費する傾向がより強まっていく。例えばメディア事件に採られている、我こそは断食の世界記録を持つ達人と、人々が我も我もと一斉に名乗りをあげ、中国医学の伝統を持ちだして国威発揚を行ったという事件は笑劇の様相を呈しているものの、「中国人は一夜の間に、奇跡にあふれた時代に回帰してしまったようである」とのコメントを著者が付けているように、1950～60 年代の反復にも見える 2004 年の思想モードは見過ごすことができない。虚構の数字を根拠に、現実的根拠なき優越的な中国像を仕立て上げるメンタリティは、大躍進以外の何物でもないのではないだろうか？こうした思想傾向は何も政府当局や一般庶民に止まるものではなく、「文化保守主義」「甲申文化宣言」「祭孔」といった一連のキーワードを並べると、現実の世界なき優越的な中国イメージが、中国インテリによって儒教など中国の伝統が担ぎ出されることによって、より本質主義の方向に向かっていることが見て取れよう。



言葉が向かう出口の 2 つ目は、こうして新たに仮想された優越的な中国像を貶める他者であり、その一つが日本である。「女体盛」事件はその端的な例に他ならない。「女体盛」は確かに日本を起源とする文化の一つと言えなくもないが、少なくとも事件の舞台となった昆明のレストランの経営に日本人が関わっていた²わけではなく、また客として関わっていたわけでもない。世間の関心を集めるために手っ取り早くお色気を利用する、昨今の中国でよく見られる商売方法の延長に、たまたま日本起源の文化が引用・誤読されたに過ぎない。商売のために中国女性の裸身を不特定多数の中国人客の目に晒すことの倫理的問題はこの場合、紛れもなく中国人自身の問題である筈なのだが、日本文化の受容を通じて公衆に視姦され辱められる中国女性の肉体は、いつしか好色な日本男性の被害者として語られ、やがて容易に民族的義憤へとスライドしていく。

そこで語られる日本は、中国と日々密接な関係を有する現実の日本ではなく、あくまでも優越的な中国像という仮想の外部にある虚構である。加えて 2004 年は本書でニュース偽造年と称されているが、根拠のない噂・推論がネットを通じて広く事実のように一人歩きしていく、というネットのマイナス面との相乗効果も相まって、優越的な中国像が必要と

² 中国では日本人の経営として報道したニュースも多かったが、事件の舞台となったレストラン「和風村」は日本留学経験がある中国人が経営していた。

し、創りあげる仮想敵は、幾重にも虚構であることを定められている。こうした 2004 年の言論・文化状況を通読するならば、2005 年春の反日デモが決して唐突に発生したものでないことを、読者は納得していただけるものと思う。



本書の原著である『21 世紀中国文化地図』第 3 巻は、当初 2005 年 5 月の出版予定であったが、実際の出版は秋にずれこんだ。第 1～2 巻で激しく展開した作家協会批判が災いし、一部から出されたクレームに出版社サイドが配慮して自粛したためと聞いている。また原著者が運営する文化先鋒ネットは、辛口ジャーナリスト・批評家が集って一つの言論空間を作りあげ、それが本書を世に出す原動力・母体のような役割を果たしていたが、2005 年、“技術的な理由”によって当局の閉鎖処分を受けた。

こうした中国の社会・言論をめぐる厳しい状況は当面、変化が望めないだろう。本書を通読した上で読者は是非、原著者の張閔氏が書かれた「序に代えて」を再読していただきたいと思う。文革中に少年時代を送った原著者は、読むべき書物も何もない中、今ここにはない外の世界を夢想する手段であり、心の糧となったのが地図であったと冒頭で説き起こし、末尾で再び比喻としての地図について語っている。出口の见えない不透明な現在にあって、今ここにはない世界を夢想しつつ手探りを続ける、その果てに出口が用意されているとは限らない。しかし外の世界を夢想し、格闘する精神の軌跡こそが痛ましくも生々しい現実なのであり、読者にはそのことを最も読んでほしい。中国の読者に手渡された原著者のそうした願いが、日本の読者にも伝わることを、訳者として切に望んでいる。

『Chinese Culture Review』

vol.4 (2005)

訳者まえがき

高 屋 亜 希

本書は、朱大可・張閔主編『21世紀中国文化地図』第4巻(上海大学出版社、2006年8月)の部分訳である。原著の「序言」で「娯楽元年」とうたわれる2005年であるが、多くの日本の人々にとっては、反日デモなどに代表される敵対的な中国像にとまどい、たぶんに反発を覚えながらも、その現実を理解しようと務めた年として記憶されるのかもしれない。罪もない娯楽文化の大衆的広がりや反日など攻撃的な表現との間に直接的な影響関係があるわけではないが、両者が中国同時代社会の根底で密接につながり、非常に近いメンタリティを共有していることは、注意すべきであろう。



本書の読者にとって、2005年に顕在化する反日の動きは前年の2004年にはすでに用意されていたものであることはご承知のことと思う。この時期、急速に広まった経済への先行き不安感と言論状況の閉塞感などから、中国社会ではそうした現実から目をそむけるように、かりそめの優越感をむさぼるため、中国を顕彰する文化保守主義の言説がもてはやされると同時に、それを貶める虚構の他者像への糾弾が繰り返された。2005年もこの傾向は一貫して継続し、格好の他者像として日本がターゲットとされ、それが反日デモの背景ともなっている。

しかし、2005年の中国文化を考える上で寧ろ注目すべきは、こうした文化保守主義の動きすらも瞬く間に資本の論理に呑み込まれてしまった点であろう。つまり政府か民間かを問わず、中国伝統文化の優越性を価値づけて、持ち上げようとする動きが一段と活発化した。その一方、伝統文化は陰りを見せはじめた不動産(「房价」参照)に代わる新たなビジ

ネスチャンスとして注目され、人々が殺到して大量生産した挙げ句、たちまちのうちにデフレの様相を呈したのである。

例えば、儒教經典朗読運動(「读经」参照)の蔣慶が儒教遺産税構想(「儒教遗产税」参照)を打ち出したことなどは、その分かりやすい例の一つであろう。蔣慶は西洋に倣って近代化を推し進めたこの100年の試みを否定し、儒教など中国伝統文化に範をとるよう主張して、2004年に一躍社会的注目をあびるようになった。だが、こうした動きと連動するように中国各地で行われるようになったさまざまな儒教的祭祀イベント(「祭孔」参照)に対して、蔣慶は遺産税を徴収し、それを自らの儒教文化立国構想の実現にとりこもうとしたとされる。儒教という伝統文化遺産も、本来、全ての人々が利用できる公共的文化遺産であったはずが、2005年には一部の人が所有権を主張し、切り売りして金儲けをはかる対象になってしまった。



伝統文化人気(文11-1および「刘心武」参照)を金儲けのチャンスだと算盤をはじくのは、政治家や商人ばかりではない。名門大学が次々と国学の学科や講座をたちあげたことも、この風潮に応じたものであろう。人民大学が国学院(「国学院」参照)を創設したことも、北京大学が国学のクラス(「国学老板班」参照)を設け受講者に経営者層を取りこんだことも、伝統文化という学問領域の活性とは関係がなく、単に2005年の時流に乗ったアカデミズムによる投機行為にすぎない。経済的時流に乗れず、不遇を託っていた伝統文化の学科は、にわかに湧き起こった好景気に我が世の春を謳歌し、伝統文化の更なる価値称揚に務めたのである。無論、時流を利用してこうした学問領域を活性化する好機とすること自体、大いに推奨されるべきであろう。しかし問題なのは、往々にしてアカデミズムが売り出すこれらの商品すらも、粗製濫造されたハヤリモノに過ぎず、それが傍目にも明らかなことである。

2005年は台湾から大物政治家が相継いで大陸を訪問した年(「反法西斯战争胜利60周年」・「国民党参访团」参照)であるが、政治的パフォーマンスとして中華圏の文化的共通性を大いに強調したい歓迎レセプションで、中国伝統文化の本来の面目がつぶれるような失態が相継いだ。国学院の看板を掲げる中国人民大学学長の紀宝成が、台湾新党主席の郁慕明を出迎える場で、意味を誤解したまま古典の語句をスピーチに引用した事件(「「七月流火」」参照)、あるいは台湾親民党の宋楚瑜主席が清華大学を訪れてスピーチを行った際、同大学の顧秉林学長が小篆の書を記念に贈り、その場で朗読したものの、文字の読み方につまって会場の失笑をかった事件など、枚挙に暇がない。伝統文化の素養を

身につけることが期待される名門大学の学長からしてこの有様であり、メッキを施して間に合わせた大量の商品は、もはや消費者のニーズを満たしているのか否かも定かではないまま、なおも量産されていくのである。



伝統文化を投機対象として扱う傾向がひときわ目立ったのは、何と言っても美術である。高騰を続ける美術オークションの落札価格や“お宝鑑定”番組(「《鑑宝》」参照)の人気などはその顕著な傾向であるが、例えば国家博物館が同館所蔵の国宝級名画を刻印した金の延べ棒を売り出した(美 8-1 参照)ことも、その端的な表れと言えよう。これは金そのものの価値に芸術的価値をプラスした投機商品の開発・販売を企図したものであろうが、伝統文化の名画が刻印されていることがその芸術的価値を保証するかのよう一般の購入者に受けとめられた点、および価値を保証する伝統文化イメージが国家博物館、ひいては国家そのもののイメージと一体化している点など、きわめて興味深い。

また故宮をめぐる 2005 年に起きたさまざまな事件も象徴的である。2005 年は故宮博物院設立 80 周年を迎える記念の年にあたり、新たにロゴマーク(「故宮院徽」参照)を発表してブランド化を進めるなど、中国伝統文化を顕彰する関連記念イベントが行われた。滅多に公開展示されることがない名品を、直接目にする機会が一般庶民に与えられたことは、そうした動きのプラス面と言えるだろう。しかし例えば、2008 年のオリンピックを前に故宮の大規模修復工事が進められている最中、古建築を修復する技術が途絶し職人がいないと報告された(建 12-5 参照)ことは、伝統文化がもてはやされる一方で、実際にはその当の文化が空洞化している現状を浮き彫りにしていると言えるだろう。

こうした伝統文化の衣装をまとった現状の「醜態」劇を前に、本書の原著者は苦笑しながらヤジをとばす観客(「哄客」参照)の立場をとっているわけだが、文化保守主義に対してこうした立場をとって楽しむ人々は社会的にはごく少数であるにせよ、これもまた「娯楽」的な態度と呼びうるだろう。



2005 年に彗星のごとく登場した「娯楽」ヒロイン(「呕像」参照)と言え、先ずは、芙蓉姐姐(「芙蓉姐姐」参照)を挙げなくてはなるまい。数年前、社会的に話題を振りまいた「美女経済」は、美貌など女性としての身体性を元手に社会的資本を手にいれるもので、自らの美貌と性体験の告白を織り交ぜたと称する小説で話題を煽った衛慧などの身体創作、有名人とのセックスをブログで暴露した木子美、セルフヌードをブログで公開した竹影青瞳

など、これまで数名の成功者を輩出してきた。しかし「美女経済」も過激路線をエスカレートさせ続けた結果、今や露出の供給過剰(流 7-4・12-5 参照)に陥っており、少々過激という程度では何ら他人との差異を図れなくなってしまうている。そうしたデフレ状態や文脈を無視するかのように、美貌とは縁がなさそうな地方出身(「北漂」参照)の女性が、本人の意識では麗しい、他人の目からは滑稽で噴飯モノの奇妙なセクシーポーズ(「S 形」参照)で登場したことが、「美女経済」を新たなステージへと押し上げたのである。芙蓉姐姐の鈍感な勘違いぶりを嘲笑する事件は、嘲笑を人気と勘違いする芙蓉姐姐の愚鈍さによって更に増幅し、中国全国民が抱腹絶倒する大事件へと発展していった。

中国全土を巻き込んだもう一つの「娯楽」事件と言えば、“スーパーガール”(「超女」参照)を挙げないわけにはいかない。歌手をめざす一般女性の中から人材発掘するオーディション番組に人々が熱狂したのは、明日のアイドルを夢見る女性たちのひたむきな努力もさることながら、そうした本人たちの努力が審査員からの辛辣なコメントで貶されるギャップを、距離を置いて楽しんでいたことも無視できないように思われる。つまり視聴者は、そのギャップを視界におさめると同時に、かつ自ら勝者を決定する投票権を持っている(「海选」参照)、自分たちの優越的な快感によって連帯し、降って湧いたカーニバルに狂喜していたのである。その意味において、ド派手な衣装と振り付けで登場し、歌唱力の無さを「今日はノドの調子がワルイ」と悪びれず開き直った紅衣教主(「紅衣教主」参照)こそ、グランプリに輝いた李宇春(「李宇春」参照)より、はるかに 2005 年の“スーパーガール”現象のヒロインに相応しかったと言えるのではないだろうか。

明日のヒロインを目指し、成功者のコピー、そのまたコピーが繰り返される。そして粗悪なコピーが溢れかえったあげく、でき損ないのコピーの無様な「醜態」を嘲笑して楽しむことが、2005 年に見出された「娯楽」なのである。



思えば、自分は他人と違う個性を持っており、その個性を開花させることが社会的成功とイコールだと信じられた時代は、1990 年代半ばに衛慧ら 1970 年代生まれ世代の登場とともに始まり、1980 年代生まれ世代の活躍で開花したのだが、こうした無邪気な自己実現への信頼も 10 年足らずで終焉を迎えたと言えるのかもしれない。無論、自ら社会の表舞台に立って華々しい成功をおさめたい、と夢見る者が消えたわけではない。しかし、舞台に向けて殺到する人々の全てが成功者になれるわけでもない現実が次第に意識され、成功者に対する幾分の嫉妬と自分自身に対する諦めが静かに蓄積されていくようになる。舞台に闖入してきた道化を嘲笑する観客の距離感や優越感は、こうした嫉妬や諦念の代償として

も機能しているのであり、これが「娯楽元年」の社会・文化状況を支えている。もしかすると、あの反日デモもまた、道化のメーキャップを施された日本像を嘲笑して楽しむ「娯楽」の一つであったのかもしれない。

しかし最後に一つだけ、日本の読者に理解していただきたいと願うことは、こうした「娯楽」が時として憂さ晴らしの要素を孕むにせよ、これまで発言権を持たなかった中国の一般の人々が手にした、ささやかな発言権の萌芽なのであり、民主的権利の行使なのだ、ということだろう。2005 年の反日デモもそうした試行錯誤の過程で生まれてきたものである。それは両国の関係にとってまことに悲しい出来事ではあったが、同時に中国の人々が自らの言論を獲得していく長い、長い過程の始まりを告げる「元年」の一齣として記憶されることになるのかもしれない。

* 文中のカッコ内で示した参照は、全て『Chinese Culture Review(中国文化総覧)』vol.4(2005 年)の文化事件、およびキーワードに対応したものである。

現代中国の「私」探し

——ボヘミアン幻想と海外文化の引用——

高屋 亜希

1. 日本文化の引用と民族主義的な誤読

2004 年、中国雲南省の日本料理店で“女体盛り事件”がおきました。“女体盛り”が本来に日本起源の文化と言えるのか不明ですが、中国では日本文化として紹介されたことにより、中国人客に視姦される中国人女性の肉体は、いつしか好色な日本人男性の性的被害者として語られ、民族主義的な憤りの言葉がネットにあふれました。2005 年の反日デモを先取りする事件と言えるでしょう。

中国では一般に、日本人男性は好色のイメージが持たれています。近年、中国語に取り入れられた外来語には、AV・援助交際・(アイドル) 写真集…といった性と関連がある日本語が並び¹、海賊版によって大量に流れ込んだ日本の AV は、中国人の性的ファンタジーに大きな衝撃を与えました²。また日本産アニメ・マンガに大量に含まれる性表現も、好色という日本イメージに何らかの影響を与えているのかもしれない。

これは、性表現を含む様々な日本文化のうち、単純で分かりやすい肉欲の部分だけが日本イメージとして一人歩きし、中国の民族主義的な文脈と結びついた事例と言えるでしょう。こうした事例から、私たちは中国の文化的無知・誤解を見出し、偏見を抱きがちです。実際、民族主義的な文脈というのは厄介で、文化の相互理解には全く役にたちません。

しかし、海外文化が中国でどう引用されているかという問題は複雑で、プラスとマイナス、それぞれの意義がどこにあるのか一概には言えず、民族主義と結びついたこうした事例をもって、結論を急ぐのは禁物だと思います。中国の若者は様々なルートを通じて食欲に海外文化を吸収し、自分たちが必要とする新たな表現を模索していますが、この事例も

¹ 朱大可・張閔主編、高屋亜希・千田大介監訳『Chinese Culture Review(中国文化総覧)』vol.2(好文出版、2005 年 10 月)キーワード「同人志」(p280)を参照のこと。

² 千田大介「AV ポスター事件とインターネット社会」(『アジア遊学(特集現代中国のポピュラーカルチャー)』No.97、勉誠出版、2007 年 3 月)を参照のこと。

そうした大きな社会的プロセスの一部として考える必要があるでしょう。

2. 若者の「私」探しと海外文化の引用

中国の都会では、急速な都市化・消費社会化を背景に、1990年代後半から、大量に自己実現・自己表現を望む若者があふれ始めました。それ以前は、恵まれたごく少数のエリートの場合を除き、人生の選択肢や自己表現の場がとても限られていたのです。

自己実現を熱望する今時の若者の中に漂流族³と呼ばれる人たちがいますが、一ヶ所に身を落ち着けて学習や仕事に専念することで自己実現を図るのではなく、今ここにはない自分がどこか別の場所では実現できだろうと、転職など新しいポストへの異動を繰り返すのが特徴です。中国に進出した日本企業で、採用した中国人学生がすぐに辞めてしまうという話をよく聞きますが、それもその筈、中国の若者が欲しているのは安定した将来ではなく、今この瞬間に煌めく「私」を周囲に見せつけることなのです。自分を押さえて忍耐することは屈辱的なばかりで、少しもオシャレではない…。こうして、些細な不満や挫折のたびに転職が繰り返されることになります。大学受験をはじめとする各種の受験が社会ブームになる⁴のも理由は同じで、試験合格によって新たな「私」を実現できるかもしれない、という期待感に駆られてのことです。

現代中国において自己実現を図るという生き方そのものが、喩えてみれば斬新な流行ファッションのようなものです。国内にはオシャレなモデルが見あたらないとなると、自ずと海外文化がモデルにされます。ボヘミアンファッションやバックパック旅行⁵、ビートジェネレーションの文学作品…。流浪の過程で「私」の個性が表現されるという、漂流族とも通底する意識が伺えるのではないのでしょうか？

中国で村上春樹の小説が読まれる理由⁶も同様、オシャレな人生のファッションカタログとして読まれているのです。中国の若者は、自分が望むような煌めく「私」に辿り着けない虚しさを村上の小説に投影し、『ノルウェイの森』の性表現に単なる肉欲とは異なる精神性の現れを見出し⁷、自己表現の参考例に加えました。自己実現・自己表現への強い関心が、

³ 中国語では「漂一族」などと標記され、「北漂」「校漂」などの派生語も見られる。

⁴ 注1前掲書キーワード「考 X」(p255)のほか、高屋亜希「劉弢『難為情』に見る考 X 言説——〈実現されない私〉というトポス」(『中国文学研究』第30期、早稲田大学中国文学会、2004年12月)を参照のこと。

⁵ 注1前掲書キーワード「背囊」(p222)・「波希米亚」(p224)のほか、本成果報告論文集所収の拙稿「「七〇后」とボヘミアン幻想の終焉——馬驊事件の余白に寄せて」を併せて参照されたい。

⁶ 中国語圏での村上春樹受容についての先行研究は多いが、受容現象の「背景」を概観するものとしては例えば、藤井省三の専著『村上春樹のなかの中国』(朝日選書、2007年7月)が簡便である。但し受容現象そのものは個々の複雑かつ多様な村上理解で構成されており、今後、具体例の分析を積み重ねていく必要があるだろう。

⁷ 高屋亜希「李修文『泣きばくろ』に見る村上春樹受容の一端——SMをめぐる綺想」(『中国文学

海外文化の引用全般に作用しているのです。

3. 現代文化創造の場としての「私」探し

中国の大都会の街中には、素敵なお店やレストランが並び、デパートにはブランド品が溢れ、書店にも海外の流行小説が店頭に並んでいます。ともすれば私たちはそこに、経済成長著しい中国の姿や大衆流行文化のグローバル化現象などを見出します。それも間違いではありません。しかしその結論に止まるのであれば、“女体盛り事件”から文化的無知という結論を引き出すことと同様、中国人の手で今まさに創られている、現代中国文化形成の具体的プロセスを見失うことにもつながるのです。

最近、『Chinese Culture Review—中国文化総覧』という、現代中国文化に対する立体的な視覚を提供してくれる本を翻訳しています。

何が立体的かと言えば、試みにプチブル⁸、即ち都会の経済力のある若者についての解説を読むと、“キャリア-ウーマン・チャイナドレス・個性的ファッション・カフェバー・カプチーノ・孤独・憂愁・クラシック・格調といった言葉と密接な関連”があり、“文化的アイデンティティを弄ぶ”人々を指すと要約されています。つまり、自己実現・自己表現を至上価値とする都会の若者の多くは、比較的恵まれた経済力を背景に、消費によって煌めく「私」を演出することに陶醉し、これらのアイテムが動員されているということです。カフェバーでカプチーノを手にするキャリア-ウーマンが消費しているものは、ファッションナブルな「私」というイメージなのです。更にアイテムの一つ、チャイナドレスの解説⁹を読むと、香港の王家衛監督の映画『花様年華』から引用された文化であり、オールド上海へのノスタルジーという文脈と結びついたものだと語られています。

様々な文化を引用しながら、現代中国の若者が「私」という複雑な模様をどのように織りあげ、現代文化を創造しているかという一端が、見て取れるのではないのでしょうか？ 試行錯誤を重ねながら創られる、現代中国の文化的営為の現場を理解せずして、中国で今なにが起きているのか、分かる筈などないのです。

* 初出：「オピニオン」(『Waseda.com on Asahi.com』)、2006 年

<http://asahi.com/ad/clients/waseda/opinion/opinion200.html>

研究』第 31 期、早稲田大学中国文学会、2005 年 12 月)を参照のこと。

⁸ 朱大可・張閔主編、高屋亜希・千田大介監訳『Chinese Culture Review(中国文化総覧)』vol.1(好文出版、2005 年 10 月)キーワード「小資」(p289)を参照のこと。

⁹ 注 8 前掲書キーワード「旗袍」(p276)を参照のこと。

現代中国の国家イメージ再編

——北京オリンピックカウントダウンの現場——

高屋 亜 希

1. ナショナリズムと伝統文化の和解

去る8月8日、北京オリンピック開幕を1年後に控え、天安門広場では盛大なカウントダウンイベントが行われました。ジャッキー・チェンなど香港や台湾のスターも多数かけつけ、国際社会に向けて中華圏の一体感が華やかに演出されたイベントでしたが、どのようにご覧になられたでしょうか？

こうした中華ナショナリズムを核にした舞台づくりは、社会主義建設を目標にかかげる革命ナショナリズムが実質的に失われた1990年代、人々を一つに統合する新たな国家イメージを構築する必要から、10年以上の歳月をかけ準備されたものです。来年の北京オリンピックは、そうした動きの集大成となることでしょう。

例えば、イベントの舞台となった天安門広場の東側に、改修工事中の中国国家博物館がありますが、これも中華ナショナリズム構築を示す格好の例と言えるでしょう。これは2003年にもとの中国歴史博物館と中国革命博物館を再編統合したものです。中国共産党は前近代の王朝支配を革命によって覆し、人民をその抑圧から解放したという歴史観を、政権を正当化する根拠としてきました。したがって伝統文化とは多くの場合、人民を搾取した王侯貴族の贅沢品であり、その歴史評価には常に厄介な問題がつきまとっていたものです。

中国ひいては中華圏が共有する誇るべき遺産として、伝統文化が前面に押しだされるようになったのは、中国では近年の現象です。国家博物館再編は、前近代の王朝史と近代の革命史という2つに区分された歴史の境界線が消え、伝統文化を継承する中国国家という1つの概念に覆われていく現状の象徴だろう、との巷の分析¹もあながち牽強附会とは言え

¹ 馮原「建築史的“鏡像”」（朱大可・張閔主編『21世紀中国文化地図』第3巻、広西師範大学出版社、2005年9月）を参照のこと。

ないように思われます。

1990年代以降、さまざまな分野で伝統文化を取りこみ、ソフトな中華ナショナリズムをつくりだす試みが、官民を問わず続けられてきました。例えば日本でも関心が高い工夫茶という中国茶のお点前も伝統文化のように見えますが、むしろ台湾で洗練化された文化であり、近年になって導入されたものです。また縁起物として赤い組み紐の飾りを中国各地でよく見かけますが、これも中国結²という台湾で近年に復興された伝統工芸です。

伝統文化を紐帯とする新たな国家イメージが必要とされたものの、中国では文化大革命などによって伝統文化が長らく否定され、その間に多くの伝承技術が失われてしまいました。そのため、新たなナショナリズムの構築に際しては、香港や台湾など中華圏で復興保存された文化が大量に輸入されることになったのです。

2. 民間主導の伝統文化賛美の背景

伝統文化を利用した中華ナショナリズムの舞台が着々と準備される一方、必ずしも人々にそれが共有されているわけではありません。推進する当の政府そのものが官僚汚職で威信を失墜させているのが象徴的ですが、経済的成功といった個人利益を調節し、革命ナショナリズムに代わる社会全体の公共利益を構築できない状況が、今も続いているからです。つまり自分が個人利益を抑えて公共利益を優先させている間に、他人は自分を出し抜いて個人利益を追求するかもしれない、という疑心暗鬼の競争意識が社会全体を覆い、公共利益が後回しにされるということです。

昨今、中国については食品安全問題をはじめとして、不信をかきたてる事件が相継いでいます。実はこうした問題は、中国の人々にとっても何を信じたらよいのか、日々頭を悩ませる問題となっています。安全性に問題がある製品が出回る原因はさまざまです。ただ大きな背景としては、公共利益そのものへの信頼が革命ナショナリズムとともに、1990年代に失われたことが挙げられるでしょう。

政府主導の中華ナショナリズムの動きとは別に、この数年、民間でも伝統文化見直しの動き³が顕著に見られます。例えば蔣慶による新儒教運動もその一つです。その評価は分かれるところですが、社会全体の公共規範が失われ不信感が蔓延する現状を否定し、儒教を

² 中国結については、張閔「中国結：新世紀的国家図騰」（朱大可・張閔主編『21世紀中国文化地圖』第2巻、広西師範大学出版社、2004年5月）のほか、余項科「中国結びの社会文化的意味」（『中国研究月報』57(4)、中国研究所、2003年）「柔らかい中華ナショナリズムの形成——中国結を中心として」（『現代中国』no. 77、日本現代中国学会、2003年）を参照のこと。

³ 朱大可・張閔主編、高屋亜希・千田大介『ChineseCultureReview(中国文化総覧)』vol. 3(好文出版、2006年7月)キーワード「祭孔」(p218)・「甲申文化宣言」(p220)・「新国学」(p255)・「文化保守主義」(p251)など、およびvol. 4(好文出版、2007年7月)キーワード「祭孔」(p180)・「読経」(p162)・「儒教遺産税」(p198)などを参照のこと。

精神軸に据えた新たな公共性の構築を目指す、民間の動きとも言えるでしょう。こうした動きは各地に広まっており、あえて義務教育を受けさせず、儒教經典を素読させる私塾に子弟を通わせるケースが出て、社会問題化しています。

民間による伝統文化賛美の傾向は一見すると、国家主導の中華ナショナリズムと似かよっており、重なる部分もあります。しかし注意すべきは、公共規範なき市場競争に対する現状批判ひいては政府批判が、民間ではグローバリズム批判、伝統文化賛美の形をとるケースが往々にして見られるという点です。その意味では、カウントダウンイベントで演出された華麗な中華ナショナリズムの主旋律とは別に、その背後ではもう一つの国民統合をめぐる旋律が不協和音を響かせながら進行している、と言えるかもしれません。

3. オリンピックによる公共性実現への期待

オリンピック開催まで1年をきりました。オリンピックは国民全体のイベントであることが、中国のメディアでは繰り返し強調されています。オリンピック利益の分け前にいかんがありつくかが、個々の人々にとって最大の関心事となり、十分な分け前が与えられなかったと不満を抱く人々の目は、すでにオリンピック後を向いているとも言われます。

それに対して政府は、開催に向けたさまざまなインフラ整備こそが、北京市民ひいては国民全体の利益になっていると説いています。また個々人の直接的な経済利益を超え、国民全体が等しく恩恵を享受することこそ、“ヒューマニスティックなオリンピック”を掲げる政策の眼目なのだと訴えています。

個人の利害を超えた、社会全体の公共利益を共有するナショナリズムの実現は、近代中国100年の悲願であり、革命ナショナリズムの崩壊以降は急務の課題でもありました。オリンピックが中国社会全体を統合するイベントとして意識され、人々に公共意識が共有されるのか、それこそが期待されていると言えましょう。

* 初出：オピニオン」(『Waseda.com on Asahi.com』)、2007年

<http://asahi.com/ad/clients/waseda/opinion/260.html>